

2020年度文化遺産に関わる国際会議

博物館と地域社会



ACCU International Workshop 2020
Museum and Local Community



ACCU

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

2020年度文化遺産に関わる国際会議
博物館と地域社会

ACCU International Workshop 2020
Museum and Local Community

Cultural Heritage Protection Cooperation Office,
Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)

Agency for Cultural Affairs, Japan

凡例

本報告書は、文化庁、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター、独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館の共催により2020年12月16日～22日に開催した、文化遺産に関わる国際会議「博物館と地域社会」の内容を収録したものである。

発表者から提出された発表原稿、あるいは当日の録音音声をもとに書き起こされたものを、日本語の場合は英語に、英語の場合は日本語に、それぞれ翻訳し、体裁を整えるため編集者が加筆・修正を加えた。なお、発表者から提出された発表原稿が英語の場合、原則として発表者の使用している表記（イギリス英語あるいはアメリカ英語）に基づき編集を行った。

Note

This book is the proceedings of the International Workshop “Museum and Local Community”, held on 16-22 December 2020 by the Agency for Cultural Affairs, Japan; the Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU); and the Kyoto National Museum.

The contents of the proceedings were based on the presentations prepared by the participants and the transcription from recordings. The parts originally written or spoken in English were translated into Japanese and the parts in Japanese were into English, which were edited by the editors where appropriate. English spellings, either British or American, were not changed from the originals prepared by the presenters in principle.

目 次

開会あいさつ／ Opening Remarks	4
参加者一覧／ List of Participants	6
基調講演／ Keynote Speech	9
「ICOM 京都大会の成果と今後の課題—これからの博物館に求められるすがた—」 栗原祐司（京都国立博物館） “The Result of ICOM Kyoto and Future Issues: The Figure Pursued in Museum in the Future” KURIHARA Yuji (Kyoto National Museum)	
事例報告 1／ Case Study Report 1	25
「博物館と観光を再考する—アジア各国の事例から—」 田代亜紀子（北海道大学大学院） “Rethinking of Museum and Tourism: Cases from Asia” TASHIRO Akiko (Hokkaido University)	
事例報告 2／ Case Study Report 2	43
「京都文化博物館と地域コミュニティ—まちづくりを担う博物館—」 村野正景（京都府京都文化博物館） “The Museum of Kyoto and Local Communities: The New Museum Developed Together with the Community” MURANO Masakage (The Museum of Kyoto)	
事例報告 3／ Case Study Report 3	57
「博物館と地域社会—カンボジア国立博物館における地域連携の課題と展望—」 チャプ・ソフィアラ（カンボジア） “Museum and Local Community: Challenges and Prospects for Community Developing of the National Museum of Cambodia” CHAP Sopheara (Cambodia)	
事例報告 4／ Case Study Report 4	69
「エコミュージアムのローカライゼーション—地捫侗族人文生態博物館の 17 年間の実践—」 レン・フーシン（中国） “Localization of Ecomuseum: 17 Years Practice of Dimen Dong Ecomuseum” REN Hexin (China)	

事例報告 5 / Case Study Report 5	91
「中央消防署の展示施設—マレーシアの世界遺産都市ジョージタウン—」	
ミン・チー・アン（マレーシア）	
“The Central Fire Station: George Town World Heritage City, Malaysia”	
Ming Chee ANG (Malaysia)	
事例報告 6 / Case Study Report 6	103
「パタン博物館と地域コミュニティ」	
カナル・サンディーブ	
“Patan Museum and Local Community”	
Khanal SANDEEP (Nepal)	
事例報告 7 / Case Study Report 7	113
「世界遺産ゴールの要塞—コミュニティと歴史を結びつける遺産解説プロジェクト—」	
ニラン・コーレイ	
“Fortifications of World Heritage Site of Galle: Linking the community with the living history through interpretive presentation”	
Nilan COORAY (Sri Lanka)	
事例報告 8 / Case Study Report 8	125
「ウズベキスタン国立歴史博物館—文化遺産保存の中心として—」	
オタベック・アリプトジャノフ	
“The State Museum of History of Uzbekistan as a Center of Preservation of Cultural Heritage”	
Otabek ARIPDJANOV (Uzbekistan)	
総合討議 / General Discussion	141
「博物館が地域社会に果たす役割」	
“The Role of the Museum for Local Development”	

開会あいさつ

私ども ACCU 奈良では、国内外の専門家が意見を交換する国際会議を毎年開催しており、2018年と2019年は文化遺産の保護と地域社会の関わりについて議論を行い、エクスカージョンも実施しました。今年度はコロナウイルスのために、海外の専門家の方々を招へいすることができませんし、文化遺産がある現地を訪れるエクスカージョンも困難になってしまいました。このような悪条件のもとではありますが、今年も国際会議を開催いたします。

日本国内の参加者の一部には京都に集まっていたき、そのほかの方は海外の方を含めてオンラインでの接続となっています。オンライン会議では時間が限られますので、事前に資料を作成いただき、関係者に配布しておりますので、本日後半の総合討議では、資料の内容を踏まえたやり取りを行いたいと思います。

昨年までの議論では、文化遺産を継続して保存活用してゆくためには、地域社会の果たす役割が重要であることを確認し、地域社会が抱える多様な文化遺産を、地域コミュニティと協働していかに継承していくかを考えました。地域社会や地域の文化遺産を考える時に博物館はとても重要な要素となります。博物館が地域社会の発展に大きく貢献することは、昨年京都で開催されたICOM京都大会でも取り上げられています。

今日は、前半でICOM京都大会を主催された京都国立博物館の栗原様に基調講演をいただきます。そして、後半では日本に加え海外6か国の専門家の方々に、博物館が地域社会で果たす役割について議論を深めていただきたいと考えています。この会議は、申し込みをいただいたオブザーバーにも公開しており、日本および海外の50名を超える方々の視聴が予定されています。ここでの議論がそれぞれの国での博物館と地域社会の問題を考える契機となることを期待して、開会のあいさつとさせていただきます。

ありがとうございました。

令和2年12月22日

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
文化遺産保護協力事務所

所長 森本 晋

Opening Remarks

ACCU Nara holds an annual international conference for professionals inside and outside Japan to exchange opinions. In 2018 and 2019, we discussed the protection of cultural heritage and community involvement, and had excursions. This year, due to the COVID-19, we are unable to invite professionals from overseas, and excursions to cultural heritage sites are also difficult. The circumstances are difficult, but we are holding this year's international conference nevertheless.

A portion of our participants within Japan have gathered here in Kyoto, but the others, including participants from overseas, are joining us online. There are time restrictions in online conferences, so we have prepared and distributed the materials in advance to those concerned. In the general discussion in the latter half of today, I hope that we can have a dialogue based on the content of these materials.

In the discussions up until 2019, we confirmed the necessity of the role played by communities in continuously preserving and utilising cultural heritage, and considered how to pass on this diverse local cultural heritage in cooperation with the local community. When thinking about the community and cultural heritage, museums are a very important factor. Museums contribute greatly to the development of regional communities, which is something that was raised at the ICOM General Conference held in Kyoto in 2019.

In the first half of today, the keynote speech will be given by Mr Kurihara of the Kyoto National Museum, which was the host of the ICOM General Conference in Kyoto. And then, in the latter half, I expect that experts from seven countries including Japan will deepen their discussion about the role of museums in the community. This conference is also open to observers who have applied to do so, and is scheduled to have more than 50 people from both Japan and overseas watching. I hope that the discussions held here will be an opportunity to consider issues centred around museums and local communities in each country.

Thank you for your time.

22 December 2020

MORIMOTO Susumu

Director

*The Cultural Heritage Protection Cooperation Office,
Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)*

参加者一覧 List of Participants

Japan

基調講演
Keynote Speech



栗原 祐司

独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館 副館長

KURIHARA Yuji

Deputy Director
Kyoto National Museum

事例報告 1
Case Study Report 1



田代 亜紀子

北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 准教授

TASHIRO Akiko

Associate Professor
Research Faculty of Media and Communication, Hokkaido University

事例報告 2
Case Study Report 2



村野 正景

京都府京都文化博物館 学芸員

MURANO Masakage

Curator
The Museum of Kyoto

コメンテーター
Commentator



吉村 和昭

奈良県立橿原考古学研究所企画学芸部 学芸課長

YOSHIMURA Kazuaki

Director of Curatorial Division
Archaeological Institute of Kashihara, Nara Prefecture

モデレーター
Moderator



森本 晋

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所 所長

MORIMOTO Susumu

Director
Cultural Heritage Protection Cooperation Office, ACCU

Cambodia

事例報告3
Case Study Report 3



チャプ・ソフィアラ
カンボジア国立博物館教育・出版室 室長
CHAP Sopheara
Chief
Education and Publication Office, National Museum of Cambodia

China

事例報告4
Case Study Report 4



レン・フーシン (任和昕)
地們侗族人文生態博物館 館長
REN Hexin
Director
Dimen Dong Ecomuseum

Malaysia

事例報告5
Case Study Report 5



ミン・チー・アン
ジョージタウン世界遺産公社 ジェネラルマネージャー
Ming Chee ANG
General Manager
George Town World Heritage Incorporated

参加者一覧 List of Participants

Nepal

事例報告6
Case Study Report 6



カナル・サンディープ
ハヌマンドカ王宮博物館 館長

Khanal SANDEEP
Executive Director
Hanumandhoka Palace Museum

Sri Lanka

事例報告7
Case Study Report 7



ニラン・コーレイ
スリランカ政府都市開発住宅省戦略的都市開発プロジェクト
(ゴール要塞修復) チームリーダー／保存専門家

Nilan COORAY
Team Leader and Conservation Specialist
Strategic Cities Development Project - Rehabilitation of the Fortifications
of Galle Fort, Ministry of Urban Development and Housing, Government
of Sri Lanka

Uzbekistan

事例報告8
Case Study Report 8



オタベック・アリプトジャノフ
ウズベキスタン国立歴史博物館 副館長

Otabek ARIPDJANOV
Deputy Director
State Museum of History of Uzbekistan

基調講演

Keynote Speech

ICOM 京都大会の成果と今後の課題 －これからの博物館に求められるすがた－

栗原 祐 司

皆さん、こんにちは。京都国立博物館の栗原です。今日は、「ICOM 京都大会の成果と今後の課題－これからの博物館に求められるすがた－」というテーマで、30分ほどお話をさせていただきます。

もしかすると、皆さんの中にも参加された方がいらっしゃるかもしれませんが、2019年9月1日から7日まで、国立京都国際会館をメイン会場として、ICOM 京都大会 (ICOM General Conference in Kyoto) が開催されました。

ICOM大会は3年に1回開催されます。日本での開催は初めて、アジアでは韓国・ソウル、中国・上海に次いで3回目の開催で、ICOM 京都大会の大会テーマは、「Museums as Cultural Hubs: The Future of Tradition (文化をつなぐミュージアム－伝統を未来へ)」でした。120の国と地域から、約4,600人の参加があり、これはICOM大会史上最多の参加者数で、そのうち41%は日本から、14%はアジア諸国からの参加でしたので、参加者数の半分以上はアジアからの参加だったということになります。コロナ禍の現在を考えれば、まさに白昼夢のようです。大会初日から3日目まで毎日基調講演があり、全体で195のセッションで1,300人以上の発表者がありました。大会のサブテーマともいべきプレナリー・セッションは、スライド7に示す4つでした。以下、これらの成果を簡単に振り返ってみます。

持続可能な未来の共創に関しては、ICOMは2018年9月に持続可能性のワーキンググループを設置して議論を継続していますが、ICOM 京都大会ではプレナリー・セッションとワークショップが行われ、気候変動、人種差別、社会福祉など様々な視点からの議論が行われました。彼ら、彼女らのスピーチを聞いてみると、持続可能な開発は、単なるスローガンや目標の段階ではなく、既に多くの博物館で実践が積み重ねられており、少なくとも欧米ではSDGsに関する価値の共有や検証が進んでいるということを実感せずにはいられませんでした。

SDGsについては、皆さんもよくご存知だと思いますが、「Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標)」の略称で、正式名称は「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030年アジェンダ」といいます。2015年9月に国連で開かれたサミットの中で世界のリーダーによって決められた、人間、地球及び繁栄のための国際社会共通の行動計画であり、17の目標と169のターゲットからなります。2030年までに挙げられた課題を解決し、目標を達成していくことが求められおり、「誰一人取り残さない (leave no one behind)」ということが、基本理念とされています。折しも、コロナ禍にあつて、我々は、地域に暮らす外国人や障がい者、高齢者、失業者等にとって博物館は敷居の高い施設になっていないか、この機会に多様性と包摂性を考えるべきではないかと思います。

ICOM規約に定める「博物館 (Museum)」の定義の再考については、2018年以降、MDPPという特別委員会 (Standing Committee for Museum Definition, Prospects and Potentials) で検討を進めてきており、ICOM大会でオープン参加のラウンド・テーブルも行い、最終日の臨時総会でも3時間にわたる議論が行われましたが、最終的に採決は延期となりました。MDPPは、その後のICOM会長辞任に伴って、委員長及び5人のメンバーが辞任し、最近新しいメンバーによる議論がスタートしました。遅くとも2022年のプ

ラハ大会までには、一定の結論が出る予定だと聞いています。ちなみに現在のICOM規約の「博物館」の定義は、スライド11に示している、

「博物館とは、社会とその発展に貢献するため、有形、無形の人類の遺産とその環境を、教育、研究、楽しみを目的として収集、保存、調査研究、普及、展示する、公衆に開かれた非営利の常設機関である。」

です。また、MDPPによって提案された新しい定義案は、スライド12に示している、

「博物館は、過去と未来に関する批評的な対話のための、民主化を促し、包摂的で、様々な声に耳を傾ける空間である。博物館は、現在起こっている紛争や課題を認識し、それらを考察しつつ、社会のために託された資料や標本を保管し、未来の世代のために多様な記憶を保全し、すべての人々に遺産に対する平等な権利と平等なアクセスを保証する。」

博物館は、営利を目的としない。博物館は、開かれた公明正大な存在であり、人間としての尊厳と社会正義、世界的な平等と地球全体の幸福に貢献することを目的に、多様なコミュニティと手を携えて収集、保存、研究、解釈、展示並びに世界についての理解を高めるための活動を行う。」

です。

現状のものに比べると、分量も大幅に増えています。参加者からは、「それは定義ではなく理念ではないか」という意見や、「教育 (education)」「非営利 (non-profit)」「恒久的機関 (permanent institution)」の文字が消えたことへの反発、「政府への働きかけが必要なものであり、定義と定めるには時期尚早」という声も多く出されました。またアジア諸国からは、「国によっては実践することが困難な課題であり、民主化を切望している国において、どのようにICOMの精神を実現できるのか」という意見もありました。皆さんは、どのようにお考えでしょうか。

次に、被災時の博物館に関しては、2018年のブラジル国立博物館の火災や、2017年のプエルトリコのハリケーン被害における文化財の被災などの事例紹介や、東日本大震災における津波被害の文化財レスキュー及び保存修復に関する議論がなされました。今や世界各地で武力紛争のみならず自然災害の危険が高まっており、この問題はICOMのみならず、ICOMOSやIFLA、ICA等でも議論がなされています。ICOM京都大会では、新たにDRMC (Disaster Resilient Museums International Committee) 及びICETHICS (International Committee on Ethical Dilemmas)が発足し、国際委員会数は32になりました。今年はコロナ禍で、どの国際委員会も集会形式での会議を開催できていませんが、例えば2020年8月のベイルート爆発に際し、ICOMOS等と被災文化施設の保護に向けた連帯・協力に関する共同声明を発出するなどの活動を行っています。また、日本国内では、2020年10月に「文化財防災センター」が新たに発足しました。

世界のアジア美術とミュージアムに関しては、日本美術をはじめとするアジア美術のさらなる国際交流・発信の必要性について議論しました。このセッションでは、日本美術を含むアジア美術至上主義を主張したのではなく、多様性の視点を提言することを目的としました。すなわち、学芸員が自らの文化や環境に基づいて作る展示に対して、それを鑑賞する来館者は多様です。いわゆる伝統的な文化を体感していない児童生徒も多いわけです。博物館の展示は、一方的に自らの文化や価値観を押し付けるのではなく、お互いの文化を認め合う多様性の視点もまた重要であり、そのためにも各国の歴史を踏まえつつ、欧米の美術だけでなくアジアやアフリカ、イスラムの美術などについても議論する必要性を唱えたのです。このことについては、2019年10月末にマレーシアのクアラルンプールで開催された第7回ANMA (Asian National Museum Association; アジア国立博物館協会) 総会でも報告しました。残念ながら、2020年に開催予定であった日中韓国立博物館長会議は中止となりましたが、引き続き国立博物館のみならず、アジアの博物館の連携・発展に努めていくことが重要だと考えています。

また、「デコロナイゼーションと返還」、「マンガ展の可能性と不可能性」、「博物館と地域発展」というパネル・ディスカッションも行われました。

デコロナイゼーションについては、日本の博物館界では未だ十分な議論が行われていませんが、その言葉には、歴史的に構造化されてきた支配者側の差別意識、または被支配者側に植え付けられた負の心性を変えろという意味が含まれており、2020年の国際博物館の日のテーマである「平等を実現する場としての博物館：多様性と包括性 (Museums for Equality: Diversity and Inclusion)」に結びつく概念であると言っていいでしょう。単なる文化財返還要求ではなく、デコロナイゼーションの視点から展示を見直すことも重要であると考えます。

マンガについては、2019年に大英博物館で「マンガ展」が開催されましたが、近年はアジア各国でもマンガやアニメに関する特別展が開催されたり、マンガやアニメの専門博物館が設立されており、ICOMでこのテーマでシンポジウムが開催されたことは、実に意義深いと思います。日本国内には50近いマンガ・アニメの博物館がありますが、地域振興や観光振興の中核施設となっている博物館も少なくありません。こうした観点からの博物館の役割も今後は重要になってきます。

博物館と地域発展については、2019年、ICOMとOECDが連携し、『地方政府、コミュニティ、ミュージアム向けガイド』を作成しました。この中では、博物館が地方政府による決定や政策立案の優先事項であり続けるための、地方政府との具体的な推進方策が示されています。また、博物館の経済的原動力としての可能性について述べていますが、単なる博物館政策の観光政策への追随ではなく、むしろ観光政策との連携によって博物館の基本機能を充実強化することによる利用価値の向上を図ることを求めています。

2016年のICOMミラノ大会で基調講演を行ったデイヴィッド・スロスビー博士も、博物館は文化的価値と経済的価値を持つと述べ、更に、文化的価値と経済的価値を生み出す「文化資本」という概念を導入し、持続可能性の議論へとつないでいます。ICOMとOECDのガイドブックでは、「文化資本」という言葉は使っていませんが、「博物館が創造性や文化多様性を促進する」と述べています。ICOM京都大会で基調講演を行った蔡國強氏が、自分がいかに美術館からインスピレーションを得て新たな作品をつくってきたかを語っていましたが、まさに博物館が創造性を促進するというエビデンスを示してくれたわけです。最近日本では、ビジネス系の本が数多く出版されています。いずれも、美術館でアートを鑑賞することが美意識を鍛え、新たな発想や創造性につながるというものです。古くから王侯貴族たちが行っていた美術館の活用方法が、広く市民の間にも浸透したと言ってもよいだろうと思います。ICOMとOECDのガイドブックでは、イタリアのサルディーニャ島で仮面博物館を作ったことにより、地元住民の認識を変えることができ、人口の流出を止めることができたという事例が紹介されていますが、これは仮面博物館の建設という文化資本に再投資したことにより、経済的価値を生み出した例だと思われます。このほかにもガイドブックには様々な事例も紹介されており、このURL (<https://www.oecd-ilibrary.org/docserver/9a855be5-en.pdf>) から本文(英語)を読むことができますので、ぜひ一読をお勧めします。

大会では地元の門川京都市長が登壇し、京都駅前に京都市立芸術大学を移転したり、京都駅に近い貨物駅跡に水族館や鉄道博物館を開館させるなど、商業施設ではなく文化施設によって町の活性化を図ろうとしている政策が紹介されました。このほか、大会期間中は、同時並行で各国際委員会等が活発に意見交換を行いました。32になった国際委員会は、3年に1回の大会では一堂に会して会議を行いますが、それ以外の年は世界各地で各委員会ごとに年次会合を開いています。傾向としてはどうしても欧米が多いのですが、ぜひアジア諸国でも積極的に会議を誘致して、ICOMの国際会議を開催してほしいと思っています。そのことが各国の博物館関係者のICOMコミュニティへの入り口となり、国際的な視野に立った研究を行うことにより人材が育っていくからです。

ICOM京都大会の最終日には、各国際委員会・国内委員会からの提案を踏まえ、5つの決議が採択されました。このうち「2. アジア地域のICOMコミュニティへの融合」と「3. 『Museums as Cultural Hubs』の理念の徹底」は、ICOM日本委員会が提案したものです。ICOMの議論はともすれば欧米主体になりがちであるため、組織委員会では、当初からアジアの視点からの議論の重要性を主張してきました。プレナリー・セッションで「世界のアジア美術とミュージアム」をテーマの一つとしたのもそのためです。ICOM日本委員会では、ICOMがアジアの各地域の自主性と特殊性、多様性を尊重するとともに、アジアの博物館との相互理解の促進に努めることを大会決議案として提案し、採択されたのです。今後、日本をはじめアジア諸国がどれだけICOMコミュニティにおいてイニシアティブを発揮できるか世界中が注目していると言っているでしょう。

もう一つの決議は、ICOM京都大会のテーマである“Museums as Cultural Hubs”の概念は、人類共通の宝である文化資源を守り、次世代に引き継ぐとともに、現代に生きる人々のために活用するため、大会が終わったら消え去ってしまうのではなく、継続的に議論していくことが求められるということを大会決議案として提案し、採択されました。

「1. 『我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ』の履行」及び「5. 博物館、コミュニティ及び持続可能性」は、いずれもSDGsに関する内容です。同様の決議は、2010年上海大会、2013年リオデジャネイロ大会、2016年ミラノ大会でも行われているのですが、残念ながら日本の博物館ではSDGsについて主体的、積極的に受け止め、検討することが少なかったように思います。皆さんの国ではいかがでしょうか。

2019年12月に同じ国立京都国際会館で開催された国連世界観光機関とユネスコ主催の「観光と文化をテーマとした国際会議」では、地域コミュニティの強化と責任ある観光の推進に向けた観光マネジメントの再構築や、文化観光の持続可能な発展と共有価値のより良い理解に適した能力強化などを提言した「観光・文化京都宣言」が取りまとめられました。オーバーツーリズムの問題など、今やコロナ禍で状況が変わってしまっているところもありますが、文化の伝播と相互理解による観光の質の向上を図る重要性は、普遍的なものだと思います。持続可能な観光、というものも考えていく必要があると思います。

ICOM大会は3年に1回の開催ですので、次回は2022年8月に京都市の姉妹都市でもあるチェコのプラハで開催される予定です。コロナウイルスが収束し、多くの仲間とまた会えるのを楽しみにしています。その次の2025年の大会は、2021年6月にパリで開かれる総会で選挙によって決まります。アジアでは、2004年に韓国、2010年に中国、2019年に日本で大会を開催したので、次はどの国でしょうか。ぜひ将来、みなさんの国でも開催されることを期待したいと思います。

まとめです。ICOM京都大会の成果を踏まえたこれからの博物館に求められる姿について、究極的には、5つのキーワードを示すことができると思います。

まずはDiversity（多様性）。ICOM規約のMuseumの定義については未だ議論中ですが、文化の多様性を考えれば、ICOMが唯一無二の基準を各国に強いることは適切ではなく、むしろ各国・地域でそれぞれの展開を促すようなバッファゾーンのあるゆるやかな定義であるべきだと私は考えています。そもそも博物館学（Museology）が欧米先進国主導の植民地主義的な学問であると考えれば、デコロナイゼーションの観点から、アジア諸国はもっと多様な世界観や慣習等に敬意と配慮を主張すべきだと思います。

次に、Sustainability（持続可能性）、これは言うまでもなく、博物館はもっとSDGsについて考慮すべきだと思います。

三つ目にEquity（公平性）。これはFairnessと言い換えてもいいかもしれませんが、博物館においてはequality（平等性）よりもEquity（公平性）のほうが重要であり、それこそが、SDGsの基本理念である「leave

no one behind」精神だろうと思います。そしてそれは、Inclusion（包摂性）にもつながります。経済の活性化なくして博物館の運営は成り立ちませんが、今や博物館は一部の特権階級の人たちだけのものではありません。障がい者、高齢者、ジェンダー、移民、低所得者等の区別なく、誰もが学び、楽しみ、心安らぐことのできる施設でなければなりません。

最後に、Integrity（誠実性）です。ICOMの倫理規程を持ち出すまでもなく、博物館関係者は、個人の利益や名誉、出世等のためではなく、高い倫理的な原則と価値観を持って、博物館活動を行う必要があります。そしてその根底には、これまで述べた4つのキーワードがあるのだろうと思います。

コロナ禍で厳しい状況が続きますが、こうした理想を各博物館が求めることによって、地域社会にもいい影響が及ぶのではないかと思います。

最後はやや書生論的な話になりましたが、以上で私の話を終わります。ご清聴ありがとうございました。

The Result of ICOM Kyoto and Future Issues: The Figure Pursued in Museum in the Future

KURIHARA Yuji

Good-day, everyone. I am Kurihara Yuji of the Kyoto National Museum. Today I will be talking for about 30 minutes on the theme of ‘Results of ICOM Kyoto and Future Issues: The Figure Pursued in Museum in the Future’.

Perhaps some among you were participants in the event, the ICOM General Conference in Kyoto, that was held from the 1st through the 7th of September, 2019, the Kyoto International Conference Center as the main venue.

The ICOM General Conference is held once every three years. The first occasion for holding the conference in Japan, and the third in Asia following those in Seoul, South Korea, and Shanghai, China, the theme of the ICOM General Conference in Kyoto was ‘Museums as Cultural Hubs: The Future of Tradition’.

There were approximately 4,600 participants from 120 countries and regions, the largest number in the history of the ICOM General Conference, and of these 41% were from Japan and 14% from various countries of Asia, so that more than half of the participants came from Asia. Thinking about this from the present COVID-19 pandemic, it truly appears as a daydream. There were keynote addresses from the opening through the third day of the conference, and a total of 195 sessions with more than 1,300 people giving presentations.

As shown in slide7, there were four Plenary Sessions which perhaps should be called the sub-themes of the Conference. What follows is a brief review of the results of each.

With regards to the sub-theme of ‘Curating Sustainable Futures Through Museums’, ICOM had established a Working Group on Sustainability in September of 2018 which has been continuing to discuss the issue, and at the ICOM Kyoto Conference a Plenary Session and workshop were held, with discussion carried out from a variety of perspectives including climate change, racial discrimination, social welfare, and so forth. Listening to the speeches of the participants, one could not help feeling that sustainable development was beyond the level of mere slogans or targets, as many museums have already been accumulating practical experience, and at least in Europe and America the sharing of values and verifications regarding SDGs is well underway.

Regarding SDGs, as I believe you are all aware this is an abbreviation for Sustainable Development Goals, but the formal name for this is ‘Transforming Our World: The 2030 Agenda for Sustainable Development’. This was agreed upon by world leaders in the midst of a summit held at the United Nations in September 2015, and is a shared plan of action of international society for the benefit of people, the planet, and prosperity, with 17 Sustainable Development Goals and 169 specific targets. It calls for resolving the issues raised and achieving the stated goals by the year 2030, and takes as basic principle to ‘leave no one behind’ in this endeavour. At this very moment, in the midst of the COVID-19 pandemic, when museums may seem like unapproachable institutions to the many foreign residents or physically disabled, or to the elderly or the unemployed of their local regions, I believe that on this occasion we should be thinking about issues of diversity and inclusiveness.

With regards to a re-evaluation of the definition of ‘Museum’ as set out in the ICOM Statutes, the Standing Committee for Museum Definition, Prospects and Potentials (MDPP) has been conducting an examination since

2018, holding an open-participation round table within the ICOM programme and devoting three hours to discussion at the Extraordinary General Assembly on the final day, but ultimately the final determination was postponed. Subsequently, the Chair and five members of the MDPP resigned in conjunction with the resignation of the ICOM President, and debate has recently begun among the new members. I hear that a determination is expected to be forthcoming by the 2022 General Conference in Prague at the latest. Incidentally, the current definition of Museum in the ICOM Statutes is shown in slide11:

‘A museum is a non-profit, permanent institution in the service of society and its development, open to the public, which acquires, conserves, researches, communicates and exhibits the tangible and intangible heritage of humanity and its environment for the purposes of education, study and enjoyment’.

Also, the draft of a new definition that was proposed by the MDPP is shown in slide12:

‘Museums are democratising, inclusive and polyphonic spaces for critical dialogue about the pasts and the futures. Acknowledging and addressing the conflicts and challenges of the present, they hold artefacts and specimens in trust for society, safeguard diverse memories for future generations and guarantee equal rights and equal access to heritage for all people.

Museums are not for profit. They are participatory and transparent, and work in active partnership with and for diverse communities to collect, preserve, research, interpret, exhibit, and enhance understandings of the world, aiming to contribute to human dignity and social justice, global equality and planetary well-being’.

Compared with the current definition, the content has greatly increased. This was met by opinions such as ‘That’s an ideal, not a definition’ from the Conference participants, and there were many complaints that the words ‘education’, ‘non-profit’, and ‘permanent institution’ had vanished, or that ‘What we need is pressure applied to governments; it’s too early to decide upon a definition’. Also, from various Asian countries there was the opinion that ‘This issue is difficult for some countries to put into practice; how can countries hoping to democratise achieve ICOM’s aims?’ How do all of you feel about this?

Next, regarding ‘Museums in Times of Disaster’, there were introductions of case studies of cultural properties afflicted by disaster such as the 2018 fire at the National Museum of Brazil, or the damage brought by a hurricane in 2017 to Puerto Rico, and discussions regarding the rescue of cultural properties damaged by the tsunami in the Great East Japan Earthquake, and the conservation and restoration efforts, and so forth. At present there is heightened risk throughout the globe not only from armed conflict but also natural disasters, and this problem is being discussed not just by ICOM, but also ICOMOS, and IFLA, ICA, and so forth. At the ICOM Kyoto Conference the Disaster Resilient Museums International Committee (DRMC) and International Committee on Ethical Dilemmas (ICETHICS) were newly launched, bringing the number of international committees to 32. With this year’s COVID-19 pandemic none of these international committees are able to assemble for meetings, however activities are being carried out such as for example the joint declaration concerning solidarity and cooperation with ICOMOS and others for the protection of damaged cultural facilities on the occasion of the Beirut explosion in August 2020. Also, within Japan, the Cultural Heritage Disaster Risk Management Center, Japan, was newly launched in October 2020.

Regarding ‘Asian Art Museums and Collections in the World’, there was discussion of the need for further

international exchange and dissemination of Asian art beginning with the art of Japan. The purpose of this session was not just for the sake of Asian art itself, including Japanese art, but to make proposals from the perspective of diversity. In other words, whereas curators create exhibits grounded in their own culture and environment, there is a wide variety of visitors who come to appreciate them. There are many school children who have not directly experienced the so-called traditional culture involved. Museum exhibits should not unilaterally impose their own culture and values, but the perspective of diversity in which there is mutual recognition of each other's culture is vital, and for that reason the need was asserted to have discussions not only of Western art, but also of Asian, African, and Islamic art and so forth based on the history of each country. A report concerning this issue was also made at the 7th Asian National Museums Association Executive Meeting and Conference held in late October 2019 in Kuala Lumpur, Malaysia. Unfortunately the Directors Meeting of National Museums, Korea-China-Japan, that had been scheduled for 2020 was canceled, but I feel it is vital that henceforth we strive for coordination and advancement not only among national museums but for the museums of Asia in general.

There were also panel discussions on the topics of 'Decolonisation and Restitution', 'Possibilities and Impossibilities of Exhibiting Manga/Comics', and 'Museum and Local Development'.

With regards to Decolonisation, while there has still not been sufficient discussion in the realm of Japanese museums, the term includes the meaning of redressing the historically structured discriminatory consciousness on the part of the rulers and the feelings of negativity implanted in the ruled, which may well be called a concept that links with the International Museum Day 2020 theme of 'Museums for Equality: Diversity and Inclusion'. I think it very important that this is not simply a call for the restitution of cultural properties, but for a re-evaluation of museum exhibits from the perspective of Decolonisation.

Regarding *manga*, the exhibition 'Manga' was held at the British Museum in 2019, but in recent years, special exhibitions on *manga* and *anime* have been held in various Asian countries, and museums have been established specialising in *manga* and *anime*, so I think it is really significant that a symposium was held on this theme at ICOM. There are nearly 50 *manga* and *anime* museums in Japan, many of which are core facilities for regional and tourism promotion. The role of the museum from this perspective will also become important in the future.

Concerning museums and regional development, ICOM collaborated with the OECD in 2019 to create a guidebook titled *Culture and Local Development: Maximising the Impact*. It indicates specific measures for enabling museums to continue being a priority item for local government decisions and policy making. It also discusses possibilities for the museum as an economic driving force, but not just in the manner of museum policy being a follower of tourism policy, but rather as the need for aiming to increase the value of the museum's utilisation by enhancing and strengthening the basic functions of the museum through collaboration with tourism policy.

Dr David Thorsby, who gave a keynote speech at the 2016 ICOM Milano Conference, also stated that the museum has cultural and economic values, and further introduced the concept of 'cultural capital' which generates those cultural and economic values, linking this to the discussion of sustainability. While the above-mentioned ICOM-OECD guidebook does not use the term 'cultural capital', it states that museums 'inspire creativity and boost cultural diversity'. Cai Guo-Qiang, who gave a keynote speech at the ICOM Kyoto Conference, talked about how much he had been inspired by museums to create new works of art, thereby showing evidence that the museum indeed promotes creativity.

Recently, many books on business have been published in Japan, which hold that appreciating art in museums trains the aesthetic sense and promotes creativity and new ideas. It may be said that a method of utilising museums

which has long been employed by members of the nobility has now spread widely among the citizens.

The ICOM-OECD guidebook gives the example of how the creation of a museum featuring traditional masks on the island of Sardinia in Italy was able to change the perceptions of the residents and bring about a decrease in local emigration, which serves as an example of creating economic value through the reinvesting of cultural capital in the construction of a museum. Various other case examples are introduced in the guidebook, which can be accessed at this URL (<https://www.oecd-ilibrary.org/docserver/9a855be5-en.pdf>) in English, so I recommend you to take a look.

At the conference the local mayor, Mr Kadokawa of Kyoto, took the stage and introduced measures being planned to revitalise the city with cultural rather than economic facilities, such as relocating Kyoto City University of Arts in front of Kyoto Station, opening an aquarium or a railway museum at the nearby site of a former freight depot, and so forth.

In addition, ICOM's international committees held simultaneous meetings during the Conference period, where there were active exchanges of opinions. Now 32 in number, the international committees all meet together at the Conference once every three years, but in other years hold annual meetings individually at various sites around the world. The tendency is for many of these to be held in Western countries, but I would like to see Asian countries actively invite and host ICOM international committee meetings. This can serve as a gateway to the ICOM community for museum personnel of each country, and will help develop human resources grow by conducting research from an international perspective.

On the final day of the ICOM Kyoto Conference, based on proposals from each of the international and national committees, there were five draft resolutions adopted. Of these the second draft resolution, a recommendation for 'Commitment to the Integration of Asia into the ICOM Community', and the third, a proposal for 'Commitment to the Concept "Museums as Cultural Hubs"', were put forward by the Japanese national committee. As there is a tendency for Western members to carry ICOM discussions for the most part, the Organizing Committee insisted from the beginning on the importance of holding discussions from an Asian perspective. That is why 'Asian Art Museums and Collections in the World' was featured as theme for one of the plenary sessions. The ICOM Japan Committee's first proposal was that ICOM should respect the independence, distinctiveness, and diversity of each region of Asia, and strive to promote mutual understanding among the museums of Asia, and this was put forth and adopted at the Conference. It may be said that henceforth the world will be paying attention to how much the countries of Asia beginning with Japan can take initiative within the ICOM community.

The second proposal from Japan accepted (as the third draft resolution) at the Conference was that the concept of 'Museums as Cultural Hubs', which served as theme for ICOM Kyoto, should not fade away as the Conference ended, but continue to be discussed in order to protect the cultural resources that are common to all humankind, pass them on to the next generation, and utilise them for people living in the present age.

The first draft resolution adopted at the Conference, 'On Sustainability and the Implementation of Agenda 2030, Transforming our World', and the fifth draft resolution, 'Museums, Communities and Sustainability', both have content that concerns SDGs. Similar resolutions were made at the 2010 Shanghai Conference, the 2013 Rio de Janeiro Conference, and the 2016 Milano Conference, but unfortunately Japanese museums appear to have made little effort at proactively and positively considering the theme of sustainability. What is the situation like in your own countries?

At the UN World Tourism Organization/UNESCO World Conference on Tourism and Culture in Kyoto, held in December 2019 at the same Kyoto International Conference Center, the 'Kyoto Declaration on Tourism and Culture'

was compiled, which proposes the reconstruction of tourism management for the strengthening of local communities and the promotion of responsible tourism, and the strengthening of capacities geared towards the sustainable development of cultural tourism and better understanding of shared values. Although the situation has changed somewhat due to the current corona pandemic, in face of problems such as ‘overtourism’, I think the importance of improving the quality of tourism through cultural transmission and mutual understanding is universal. And I believe it is also necessary to think about sustainable tourism.

The ICOM conference is held once every three years, so the next one will be held in August 2022 in Prague, Kyoto’s sister city in the Czech Republic. Hoping that the coronavirus situation will be resolved, I am looking forward to seeing many of our colleagues there again.

The locus for the next conference in 2025 will be decided by election at the general meeting to be held in Paris in June 2021. In Asia, we have held conferences in 2004 in South Korea, in 2010 in China, and in 2019 in Japan, so which country will be next? I certainly hope that it will be held in your country in the future.

Let me sum up. Ultimately, based on the results of the ICOM Kyoto Conference, I think we can indicate with five keywords an image of what will be required of the museum in the future.

The first is Diversity. While the definition of Museum in the ICOM Statutes is still being debated, in view of the diversity of culture, it is hardly appropriate for ICOM to force a monolithic standard on all countries, but I believe rather that it should provide a liberal definition with a buffer zone that promotes each country and region’s development. If we regard Museology as originally being a colonialist discipline led by advanced Western countries, from the perspective of Decolonisation, the various countries of Asia should call for respect and consideration of the wider diversity of world views and customs.

Next is Sustainability, and it goes without saying that museums must give more thought to SDGs, Sustainable Development Goals.

The third is Equity. This might be restated as Fairness, but for museums rather than equality, it is equity that is more important, and this is most certainly the spirit of “leave no one behind” that is the basic principle of SDGs. Fourth, this also links up with Inclusion. While museums cannot operate unless there is economic revitalisation, museums are no longer limited to a privileged class of people only. They must be facilities where everyone can learn, enjoy, and be at ease, regardless of distinctions made involving the disabled, elderly, gender, immigrants, or low-income earners.

Finally, there is Integrity. Without going so far as to point to ICOM’s Code of Ethics, it is necessary for museum personnel to conduct the activities of the museum with high ethical principles and values, and not for personal gain, honor, career advancement, etc. At the root of this, I believe, lie the four keywords mentioned thus far.

Although the crisis of the coronavirus pandemic still continues, I believe that if every museum follows these principles it will result in positive impact for the local community.

While this may have turned into something of an impractical argument, I would like to hereby conclude my remarks. Thank you for your attention.

ACCU International Conference
on Cultural Heritage (Online)



ICOM京都大会の成果と今後の課題 —これからの博物館に求められるすがた—

THE RESULT OF ICOM KYOTO AND FUTURE ISSUES
— THE FIGURE PURSUED IN MUSEUM IN THE FUTURE —

22 December, 2020

栗原 祐司 Yuji Kurihara

Vice Executive Director, Kyoto National Museum
Vice Chair, ICOM-JAPAN
Director, Japanese Association of Museums

1



25th ICOM General Conference in Kyoto



2

THE FIRST GENERAL CONFERENCE
IN JAPAN
THE THIRD IN ASIAN COUNTRIES



Kyoto International Conference Center

3



THE NUMBER OF PARTICIPANTS IN ICOM
GENERAL CONFERENCE WAS THE
LARGEST EVER.

4,590

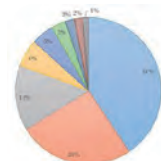
Participants

120

Countries & Regions



地域別参加者数	参加者数	参加者数
アジア	3,174	69%
ヨーロッパ	1,176	26%
アメリカ	1,176	26%
オセアニア	1,176	26%
アフリカ	1,176	26%
中東	1,176	26%
合計	4,590	100%



5

MANY ARGUMENTS ON A WIDE THEME

1,394
Speakers



195
Sessions



KEYNOTE SPEAKERS



2 Sep.
Kengo Kuma



3 Sep.
Sebastiao Salgado



4 Sep.
Cai Guo-Qiang

6

4 PLENARY SESSIONS

- Curating Sustainable Futures Through Museums
- The Museum Definition
—The Backbone of ICOM
- Museums in Times of Disaster
- Asian Art Museums & Collections in the World



7

Curating Sustainable Futures Through Museums



8



9

The Museum Definition -The Backbone of ICOM



10

Article 3 – Definition of Terms Section 1. Museum

A museum is a non-profit, permanent institution in the service of society and its development, open to the public, which acquires, conserves, researches, communicates and exhibits the tangible and intangible heritage of humanity and its environment for the purposes of education, study and enjoyment.

(ICOM Statutes 2007 revised)

11

New Definition (Draft)

Museums are democratising, inclusive and polyphonic spaces for critical dialogue about the pasts and the futures. Acknowledging and addressing the conflicts and challenges of the present, they hold artefacts and specimens in trust for society, safeguard diverse memories for future generations and guarantee equal rights and equal access to heritage for all people.

Museums are not for profit. They are participatory and transparent, and work in active partnership with and for diverse communities to collect, preserve, research, interpret, exhibit, and enhance understandings of the world, aiming to contribute to human dignity and social justice, global equality and planetary wellbeing.

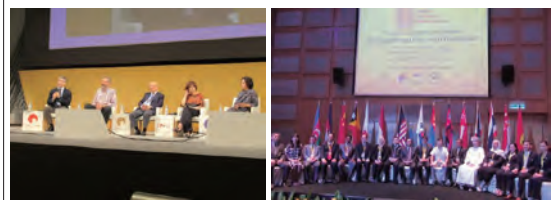
12

Museums in Times of Disaster



13

Asian Art Museums & Collections in the World



14

3 PANEL

- Decolonisation and Restitution
- Possibilities and Impossibilities of Exhibiting Manga/Comic
- Museum and Local Development



15

International Museum Day



Museums for Equality:
Diversity and Inclusion
INTERNATIONAL MUSEUM
DAY

18
may 2020



16



17

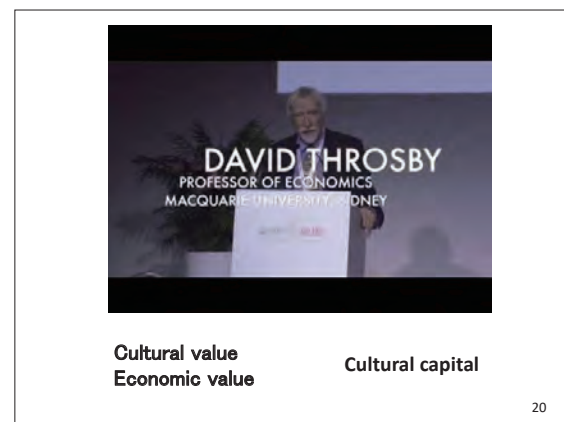


18



Museum and Local Development

19



Cultural value
Economic value

Cultural capital

20



“Why do world elites visit the art museum even if they are very busy?”

“Why do world elites train a sense of beauty?”

“The executives gather in the art museum”

21



Museo delle Maschere Mediterranee

22



23



24

5

Resolution



1. On sustainability and the implementation of Agenda 2030, Transforming our World
2. **Commitment to the Integration of Asia into the ICOM Community**
3. **Commitment to the Concept "Museums as Cultural Hubs"**
4. Measures to safeguard and enhance collections in storage throughout the world
5. Museums, Communities and Sustainability

25

2. Commitment to the Integration of Asia into the ICOM Community

- i) the promotion of Asia-related exhibitions in accordance with the 2016 ICOM Milano resolution "Promotion and Protection of Cultural Objects on International Loan";
- ii) the creation of more robust Asian art databases and digital content with broad, international reach;
- iii) the fostering of international scholarly exchange among specialists within Asia and around the world; and finally,
- iv) the establishment of specialist networks with a focus on Asian art and culture, in order to share knowledge and experience and to enrich the presentation of Asian content in museums around the world.

26

3. Commitment to the Concept "Museums as Cultural Hubs"

The theme "Museums as Cultural Hubs" is particularly relevant for having been the unifying theme of the 25th General Conference of ICOM, held in the same venue as the 1997 Kyoto Protocol to the United Nations Framework Convention on Climate Change. The concept of "Cultural Hubs" suggests the role of museums as central axes for the exchange of information that transcends time, be it centuries, political eras, or generations. This long-term conceptual framework fostered a meaningful General Conference with ground breaking discussions on the museum definition, sustainability, and the correlation between museums and local development. "Cultural Hubs" also encompasses the ability of museums to traverse national and geopolitical boundaries.

27

As a concept, it suggests how museums can play a generative role in forging transverse connections across divergent fields. Museums can help us discover the integral relationship between the humanities and the sciences. In this sense, it is highly significant that the discussions at ICOM Kyoto, the third-ever General Conference in East Asia, included such interdisciplinary subjects as disaster risk management and archives. To meet the trans-temporal, trans-national, and trans-disciplinary needs of a new era, the 34th General Assembly recommends that ICOM asserts its commitment to flexible, integrative discourse through an adaptation of the conceptual framework "Museums as Cultural Hubs".

28

5

Resolution



1. On sustainability and the implementation of Agenda 2030, Transforming our World
2. Commitment to the Integration of Asia into the ICOM Community
3. **Commitment to the Concept "Museums as Cultural Hubs"**
4. Measures to safeguard and enhance collections in storage throughout the world
5. **Museums, Communities and Sustainability**

29

2019.12.12~13 4th UNWTO /UNESCO World Conference on Tourism and Culture in Kyoto



30

NEXT ICOM GENERAL CONFERENCE IN PRAGUE, 2022



31

Conclusion

Diversity
Sustainability
Equity(Fairness)
Inclusion
Integrity

32



THANK YOU.
ご清聴ありがとうございました。

事例報告

Case Study Report

博物館と観光を再考する －アジア各国の事例から－

田 代 亜 紀 子

本日は、「博物館と観光を再考する－アジア各国の事例から－」ということで、発表させていただきます。北海道大学メディア・コミュニケーション研究院の田代と申します。

まずは自己紹介をさせていただきます。さきほど申し上げました通り、北海道大学で教えております。所属はメディア・コミュニケーション研究院ですが、兼務として観光学高等研究センター、アイヌ・先住民研究センターにも属しております。2015年から北海道大学に勤めており、その前は、東京文化財研究所、奈良文化財研究所にそれぞれ、特別研究員、アソシエイトフェローとして勤めておりました。私の専門は博物館というわけではなく、博物館に勤務しているわけでもありませんので、今回は、私が研究をしている遺跡保存と地域社会、観光の関係性から、博物館と観光、博物館と地域社会をみていきたいと思います。地域としては、私がフィールドワークをおこなっている東南アジアを中心に、日本、特に北海道の事例もいれながらお話していきます。

本日の構成ですが、まず、観光の多様性について、そして、観光と文化遺産の関係、アジアを中心とした博物館の多様化について概観したいと思います。これらをふまえて博物館と観光を再考し、そこから地域社会のなかで博物館がどのような役割を果たしていくのかを考えたいと思います。

まず観光についてですが、これについては、皆さんご存じのとおり、産業革命以降、急激な発展をとげています。世界的にみられる「観光」という現象の誕生は、その後、限られた人による観光であるエリート・ツーリズムから、マス・ツーリズムへ。さらに、マスツーリズム隆盛化にともなう「負インパクト」問題をうけ、責任あるツーリズム、持続可能なツーリズムへと大きく展開してきたといわれます。そして、観光におけるホストとしての地域、ゲストとしての観光客、というホストとゲストの関係も、社会的変化に大きな影響をうけて、変化してきました。

観光について、ひとつ、日本の事例を申し上げます。スライド5の写真は、京都のある寺院の庭園ですが、紅葉の時期には多くの観光客が訪れます。スライド6のような、庭園におかれたこの石の意味を、日本人の方は御存知だと思います。そっと置かれたこの石は、これから先の立ち入り禁止を意味します。例えば、海外からの観光客、文化が異なる観光客には、この石の意味はわかりません。するとガイドもしくはホスト側からの説明が必要となるわけです。観光というのは、このような文化的背景の違いを理解する交流のツールにもなります。

さきほど、マスツーリズムから持続可能な観光へ、という大まかな流れをあげましたが、現在では、様々な観光の形がみられます。スライド7であげているような、エコ・ツーリズム、コンテンツ・ツーリズム、ヘルス・ツーリズムなど、多様です。日本だけではなく、アジア、世界において展開するような観光の形の多様化がいえると思います。

観光については、観光の専門機関であるUNWTOがありますが、UNWTOは、1999年に策定、2001年に国連総会でも採択された「世界観光倫理憲章」を掲げています。全10条で構成されるこの憲章には、「文化遺産の価値向上への貢献」もあげられています。

文化遺産と観光は、多くの研究者により、各国で研究が行われていますが、国際的な枠組みで考えた時、すぐにでてくるのはイコモスによる1976年の文化的観光憲章と、1999年の国際文化観光憲章だと思います。1960年代、70年代は、まさに発展する観光への脅威がとりあげられ、1976年の憲章も、どのように観光を抑制・管理するか、観光による文化遺産への負のインパクトをおさえるか、ということが主になっていました。しかし、1999年には、観光をひとつのツールとして、文化遺産保存活用に利用できるのか、バランスはどのように保たれるのか、ということが主となっています。

日本では2018年に文化財保護法の改正が決定、公布され、2019年から法が施行されています。改正では、地域の文化財の総合的活用がとり込まれていますが、2018年11月17日に「シンポジウム 博物館と文化財の危機－その商品化、観光化を考える」(のちに、出版：岩城卓二・高木博志編『博物館と文化財の危機』人文書院、2020)が開催されるなど、改正は本当に文化財保護につながるのか、という議論もありました。このような文化財保護法改正の動きは、文化財分野独自の変化というわけではなく、日本の観光に関する動きとも連動しています。例えば、2006年に「観光立国推進基本法」、2008年には観光庁が設立されます。発表された「明日の日本を支える観光ビジョン：世界が訪れたい日本へ」には、文化財を保存優先から観光客目線での理解促進、そして活用へ、と示されています。

文化庁からも、本年5月に「文化観光拠点施設を中核とした地域における文化観光の推進に関する法律(文化観光推進法)」が施行されました。これは、文化の振興を、観光の振興と地域の活性化につなげ、これによる経済効果が文化の復興に再投資される好循環を創出することを目的とされています。日本では、近年、このような観光行政、文化行政の両サイドからの動きが連動して、観光と文化遺産の関係は、行政的にもその連携を深めてきました。観光と文化遺産の関係は大きな課題を抱えつつ、日本では、この数年の動きにより、いかに観光の振興を地域の活性化につなげるのか、また、これをどのように文化遺産保存に循環させるのか、そして、制度的な枠組みのなかで現場はどうあるべきか、という議論につながっています。

このような流れのなか、今回シンポジウムでのトピックであるミュージアムを再考し、その多様化についてみていきたいと思います。

私がフィールドワークとしている東南アジアでのミュージアムを考えた時、近代国家の成り立ちとミュージアムの設立は密接な関係にあり、東南アジアの多くの国では植民主義とも大きく関わっています。植民宗主国がとらえたその国の民族や文化というのが展示の中心になったりしますが、独立後も国民国家成立の過程で博物館が重要な役割を果たしてきたことは多くの研究によって指摘されています。スライド13の写真はプノンペンにある王立カンボジア博物館ですが、ここにも当時の宗主国であるフランスがその設立をすすめていった歴史的な背景があります。この国立博物館については、カンボジアからの発表者の方がその歴史について詳細に述べてくださっているので省きますが、世界でも特に各国の首都に位置する国立博物館は、歴史的にその国の近代国家としての成り立ちに深く絡んできました。

ここでは、このような国立博物館から展開して、考古学的遺跡とサイトミュージアムについて考えたいと思います。スライド14の写真は、奈良にある平城宮跡朱雀門の復原建造物になります。この朱雀門南に、2018年「朱雀門ひろば」がオープンしました。観光交流施設に加えて、「平城宮いざない館」が開設されています。平城宮跡には、他にも「平城宮跡資料館」でも訪問者が平城宮跡全体の歴史、調査研究成果を知ることができます。

私が「平城宮いざない館」を訪れた時の写真をスライド15~17で何点かお見せしますが、平城宮跡のような考古学遺跡では、朱雀門、大極殿のような復原建造物や、サイト・ミュージアムでの展示が、訪問者が地下の埋蔵文化財を視覚的に想像するために大きな助けとなります。例えば、建立当時、人々がどのように平城宮跡の建造物を建立したのか。どのような材が使われたのか。また、発掘により出土する大量の木

簡の削りくず、これがどのように過去に廃棄されたのか、など、このような展示により、訪問者がみるのできない「過去」を視覚化します。このようなサイト・ミュージアムでは、現在「みることのできないもの」を訪問者に見せることを可能とします。

例えば、スライド18のタイのチャンタブリーにある博物館は、水中考古学に特化した博物館でタイ文化省芸術局の水中考古部の拠点でもあります。この博物館でも訪問者は、展示により、実際には訪れるのが難しい海中にある考古学遺跡を「みる」ことができると同時に、出土した船の復元から、沈没船の当時の姿、そして過去を想像することを容易にします。

このように実際にみることができない遺跡、そして想像することが難しい埋蔵文化財などについては、訪問者の想像を容易にする役割がミュージアムにあります。

現場にいけない（現場がみえない）時に機能するミュージアムとは別に、「ビジターセンター」という機能をもったものもあります。アジアからはずれてしまうのですが、スライド19にオランダのヴァウダ蒸気水揚げポンプ場の事例をあげます。この例は、文化遺産（この場合、世界文化遺産でもあるわけですが）としての建造物には手を加えず、すぐ横に新しい建造物を建立する事例です。この場合、「ミュージアム」というよりは「ビジターセンター」としての機能が強くなります。つまり、訪問者は、歴史的建造物よりも先に、まず写真右上のビジターセンターへ訪問し、チケットを購入し、文化遺産についての展示をみます。その後、実際の建造物を訪れ、訪問後は、再度ビジターセンターに戻ってきて、ショップとカフェを利用することもできます。歴史的建造物訪問をうまく管理するための仕組みで、この場合、歴史的建造物のみを訪問することはできなくなっています。このビジターセンターを博物館のカテゴリーのなかにいれるかどうかは疑問ですが、センター内の展示コーナーでは、ポンプ場の歴史のみならず、オランダがどのように低地を開墾してきたかの歴史が概観でき、オランダの開墾と技術史のなかでのポンプ場の位置づけが展示ではなされています。

さらに、これは、文化遺産という定義がどんどん広がってきたことにも関係しますが、スライド20のベトナムのホイアンのように、町全体がミュージアムとして機能しており、町の入り口で入場券が販売され、町中に点在する小規模のミュージアム、それは元商家であった歴史的建造物であったりしますが、それらを訪問者は訪れていく、という形もあります。

スライド21は、2019年に世界文化遺産として登録されたインドネシアの西スマトラ州に位置するサワレントという炭鉱の町の写真です。「サワレントのオンビリン炭鉱遺産」の構成資産として世界文化遺産に登録されたこの町は、町全体が炭鉱のために19世紀末から20世紀に作られた町で、労働者のために建設された巨大な台所と食堂、家族、独身者用などに分けられた宿舎など、炭鉱業の発展を示す町全体をめぐるツアーが展開しています。

町全体を文化遺産としてとらえ、観光の対象とする事例は現在では多くみられます。例えば日本の伝統的建造物群保存地区、スライド22では鳥取県の倉吉をとりあげますが、地区内に限らず、比較的広い地域全体で観光客をよびこむ試みがなされています。町中では、写真のような国の登録有形文化財を利用した町家の文化を紹介する住宅の公開（有料）があります。また、観光案内所では、まち歩き地図を配布し、ボランティア・ガイドによるツアーも随時催行しています。スライド24の写真は市指定有形文化財で、無料公開され、トイレの使用も可能です。観光客は、町全体を歩きながら、トイレや食事に困ることなく、町や建造物の歴史を学ぶことができる工夫がなされています。ボランティア・ガイドにより主要な場所をめぐる後に、個人で好きな場所をもう一度歩く人、そのまま次の観光地へ行く人、お土産を買いに行く人、など様々です。

インドネシアでは、現在の大統領ジョコ・ウィドドのもと、彼がジャカルタ首都特別州知事であった時

から、ジャカルタのコタ地区の観光開発がすすめられてきました。この数年で急激に進んだオランダ植民地期の建造物を中心とした観光の動きは、日本の伝統的建造物群保存地区と観光の関係に似ているようですが、もちろん、大きな違いもあります。

スライド27は、そのコタ地区中心の広場にある、ジャカルタ歴史博物館です。蘭領東インド時代は、市庁舎として使用され、この前の市庁舎前広場といわれる広場を中心に、コタ地区には、オランダ時代の歴史的建造物が残ります。実は、このコタ地区の建造物群については、町並みを形成するものとして重要視されている一方、実際にはどのような形で残していくかが課題となっています。これまでは、このような建造物は、町としてどのように保存するかというよりは、ひとつひとつの建造物を保存するための方法として「博物館としての保存」が行われてきました。例えばスライド28の写真右上は、「ワヤン（影絵）ミュージアム」、真ん中は「3Dとアートミュージアム」、左上は「インドネシア銀行ミュージアム」、左下は「美術・陶磁器博物館」、そして先ほどご紹介した、「ジャカルタ歴史博物館」があります。しかしながら、同じコタ地区にこれだけ博物館が乱立されていくと、博物館としての保存活用に限界がくるわけです。

もちろん、町並みとして建造物群を保存した時、そのような建造物をどのような形で活用していくか、という問題は日本も抱えています。スライド29は、函館の例ですが、左下の建造物は、昭和初期の銀行と美術館を改築したホテルです。他にも、登録有形文化財でカフェや、店舗として利用されている建造物も多くありますが、日本の場合は、それぞれ個々の建造物がどのような文化財なのか、つまり登録有形文化財なのか、国の重要文化財なのか、市指定の有形文化財か、などの違いにより、活用の方法に違いが大きくでてくるように思います。函館には、市が管理している国の重要文化財として指定されている旧函館区公会堂もあります。4月から9月は「ハイクラ衣裳館」がオープンし、訪問者は、昔の衣装に身を包み、写真を撮ることができます。ここでは、人々はある時代の衣装を公会堂で着ることで、時間を旅しています。京都でも着物をきて町歩きをする、ということがありますが、この現象は観光研究では非常に興味深いもので、すでにいくつかの研究論文が発表されています。京都の場合、一時期行われていた西陣織を着て京都を散策、というのは京都の文化である西陣織の振興をはかる京都観光だったと思います。一方で、インバウンド観光客が着る着物による観光は、日本文化を経験する意味での着物着用でした。では、最近顕著にみられる（特にコロナ下でインバウンド客がほぼなくなった現在）日本の若者による着物着用の京都観光にはどのような意味があるのでしょうか。彼らが旅しているのは「過去」なののでしょうか。

函館や京都の事例は、訪問者が求める観光経験、文化遺産としての歴史的建造物の活用のあり方を考える際に、非常に興味深い事例だと思います。

文化遺産の保存と観光の関係をみていくと、観光経験のオーセンティシティの問題があります。社会学者マキャネルは、ホストとゲストの関係性について、表をホストとゲストが会合する場所、裏をゲストには閉ざされた場所とし、その裏をみながら観光客に対して組織的に演出された舞台裏としての「演出されたオーセンティシティ」を指摘しました。そこでのオーセンティシティは、建造物分野でのオーセンティシティの議論と深く関係しており、観光と博物館の関係を考えるうえでも重要です。

例えば、野外博物館という例があります。日本では、「北海道開拓の村」や愛知県の「博物館明治村」などが有名ですが、インドネシアには、バガユンという西スマトラ州の事例があります。西スマトラ州は、ミナンカバウ民族文化で代表される建造物が多く存在しますが、このバガユンでは、ミナンカバウ民族の建造物をみることができます。

スライド33の実際に中に入ることもできるこれら建造物は、ミナンカバウ民族を象徴する建造物ですが、日本の野外博物館と違う点は、この多くの建造物が、このために新たに設計建立されたものであるという点です。このため、ジャカルタの建築家によって設計された建造物には、従来のミナンカバウ民族の

建造物にみられない公開建造物としての工夫や変更も多くみられます。では、これはアミューズメントパークととらえられるのでしょうか。ミナカバウ民族の文化を展示する博物館としてとらえられるのでしょうか。そこでの建造物のオーセンティシティと、演習されたオーセンティシティの関係はどのようなものなのでしょうか。

ミナカバウ民族の文化の展示でみられるように、博物館と観光は、さらに博物館と民族の関係ともかわってきます。

私がいる北海道では、先住民アイヌ民族の方々が多く住んでいます。いくつかのグループに分けられますが、例えば上川アイヌを代表する博物館として、日本最古のアイヌ博物館として、川村カ子ト記念館があります。

平取町の二風谷の町立アイヌ文化博物館には、アイヌからはじめての国会議員である萱野茂によるコレクションを中心とした展示だけではなく、コタンといわれる集落の復元建造物群がみられます。

道東の阿寒アイヌ・コタンは、阿寒湖温泉街の観光開発に際してつくられました。アイヌの舞踊がみられるシアター、二十数軒のお土産物屋、レストランがコタン（集落）としてつくられています。

白老には、1984年から「白老ポロトコタン」においてアイヌ博物館が開館していました。ここにもコタンといわれる集落の復元建造物があります。この白老ポロトコタンと統合して、2020年、今年オープンしたのが民族共生象徴空間「ウポポイ」です。

ウポポイには、国立アイヌ民族博物館が新しく設立され、白老ポロトコタンにあった復元建造物群もあり、屋内シアターも設置されています。これまでの地域ごとのアイヌ民族に関する博物館と違うひとつの特徴は、このウポポイが、アイヌ民族全体を代表するナショナル・センターであるということです。しかしながら、もちろんそこで、どのように各地域のアイヌの人々が培ってきた文化の多様性を維持していくかという課題もあります。

これまでみてきましたように、アジアにおいては、博物館の多様化と同時に、観光、民族文化を含めた文化遺産の関係も複雑化しています。観光と地域社会について、いくつかまとめたいと思います。例えば、これまでの「非日常を旅する」とされた観光の形態のなかでは、「他者の日常を旅する」または「暮らすように旅する」というスタイルの流行もみられます。つまり、ホストにとっての「日常」をゲストが「非日常」としての楽しむ。町歩きは、このようなホスト側の日常を楽しむひとつの形ともいえるのではないのでしょうか。これによって、ホストとしての地域社会も、演出された場から日常生活の場に近いものになってきました。

また、最初に述べたマス・ツーリズムから責任あるツーリズムへの移行とも関係していますが、オルタナティブ・ツーリズム、つまりCBT(Community Based Tourism)に代表されるような観光では、地域社会と観光の関係性がより重要となっています。さらに、これを管理する地域のDMOの存在も日本でできました。

観光と地域を考えた時、日本では、フェノロジーカレンダーという取り組みがあります。エコツーリズム研究者の真板昭夫を中心とし、日本エコツーリズム協会からは『みんなで作るフェノロジーカレンダー』という本が出版されていますが、もともと生態学の考え方を利用したこの取り組みは、地域の人々が集まって、自分たちの宝さがしをする活動でもあります。スライド41では二戸市の事例をもってきましたが、このように、食や自然について観光客はカレンダーでいつ何を楽しめるかが一目でわかります。一方で、このカレンダーを作成することが、地域の人々にとっては自分の地域を学ぶことも意味し、何を「みせたいか」ということの整理にもなります。

私としては、このフェノロジーカレンダーは、フランス起源のエコ・ミュージアムや観光と教育の要素ももち、地域全体を「みせる」、かつ地域で活動していくことにより教育的要素ももつものであり、ミュー

ジウムとして地域をとらえることもできる取り組みだと思っています。

このフェノロジーカレンダーは、博物館（もしくは観光対象）としての地域というものを示していますが、スライド42の左に示したのは、本学院で修士の学生が北海道大学総合博物館のミュージアムショップと共同開発したマップでぬぐいになります。この手ぬぐいでは、博物館のショップから外に出ていく仕組みとしての、マップです。つまり、博物館からみる地域をまとめ、それを博物館を中心としてまとめたものになります。博物館と地域社会を考える時は、この手ぬぐいのように「博物館からみる地域」と、地域全体を博物館としてとらえる「博物館としての地域」という動きがみられると思います。

まとめとなりますが、これまで、多様化する観光、観光と文化遺産、また多様化する博物館の形をみてきました。このような観光と博物館の多様化、そして、文化遺産との関係から、博物館と観光、地域社会を考えた時、「博物館からみる地域」と、地域全体を博物館としてとらえる「博物館としての地域」という大きいふたつの動きがみられるように考えます。この動きを整理しつつ、コロナ後にどのようなようになっていくのか、博物館関係者とともに、検討していく必要があるのではないかと考えています。

Rethinking of Museum and Tourism: Cases from Asia

TASHIRO Akiko

I'm Tashiro Akiko, from the Research Faculty of Media and Communication at Hokkaido University. Today, I would like to talk about "Rethinking of Museum and Tourism: Cases from Asia".

First of all, let me introduce myself. As I mentioned just now, I teach at Hokkaido University. I belong to the Research Faculty of Media and Communication, but I am also concurrently affiliated to the Center for Advanced Tourism Studies and the Center for Ainu and Indigenous Studies. I have been working at Hokkaido University since 2015, and before that I worked at the Tokyo National Research Institute for Cultural Properties and the Nara National Research Institute for Cultural Properties as a research fellow and associate fellow, respectively.

As museums are not my field, and nor do I work for one, I will be taking a look at what I study: that is, monument conservation and local communities, as well as from the perspective of tourism, the relationship of museums with tourism and with local communities. In terms of regions, I will focus on Southeast Asia, where I have been conducting fieldwork, and also include examples from Japan, and Hokkaido in particular.

Today's talk will be structured as follows (slide3). I would like to give an overview of the diversification of tourism, the relationship between tourism and cultural heritage, and the diversification of museums, especially in Asia. Then, in light of these issues, I would like to reconsider the relationship between museums and tourism, and from there, think about what role museums can play in local communities.

As you all know, tourism has developed rapidly since the Industrial Revolution, and the birth of the worldwide phenomenon of "tourism" was followed by a shift from elite tourism, which is tourism by a limited number of people, to mass tourism. In response to the "negative impact" problem associated with the rise of mass tourism, it is said that there has been a major shift toward responsible tourism and sustainable tourism. The relationship between the local area as "host" and the tourist as "guest" has also been affected by social changes.

In this regard, I would like to discuss the example of Japan. This is the garden of a temple in Kyoto, which attracts many tourists during the autumn foliage season (slide5).

I think the Japanese people here will be familiar with the meaning of this stone in the garden (slide6). This unobtrusively placed stone signifies that no one is allowed to pass beyond this point.

However, tourists from other countries and cultures, for example, will not understand the meaning of this stone. This means that the guide or the host needs to explain the situation. Tourism can also be a tool for exchange to understand these differences in cultural backgrounds.

I mentioned earlier the general trend from mass tourism to sustainable tourism, but today, tourism comes in a variety of forms. These include ecotourism, contents tourism, health tourism, and many others.

As such, I think we can say that tourism is diversifying in form, not only in Japan but also in Asia and around the world.

The UNWTO exists as a specialized agency for tourism, and in 1999, it drew up a Global Code of Ethics for

Tourism, which in 2001, was also adopted by the UN General Assembly. One of the Code's ten articles discusses its contribution to enhancing the cultural heritage of mankind.

Cultural heritage and tourism have been studied in many countries by many researchers, but when we think about it in an international framework, I think what immediately comes to mind is ICOMOS's 1976 Charter of Cultural Tourism and 1999 International Cultural Tourism Charter.

In the 1960s and 70s, the threats to developing tourism came under scrutiny, and the 1976 Charter was mainly concerned with how to control and manage tourism and reduce the negative impact of tourism on cultural heritage.

However, in 1999, the main question was whether tourism could be used as one tool for the conservation and utilization of cultural heritage, and how the balance would be maintained.

In Japan, an amendment of the Law for the Protection of Cultural Properties was approved and promulgated in 2018, and has been in effect since the following year. The amendment incorporates measures for making all-round use of local cultural properties, but there was some debate as to whether the amendment would actually result in their protection, as evidenced by the symposium "Museums and the Crisis of Cultural Properties: Considering Their Commercialization and Touristization" (later published as "Museums and the Crisis of Cultural Properties," edited by Takuji Iwaki and Hiroshi Takagi, Jimbun Shoin, 2020) held on November 17, 2018.

This amendment of the Law for the Protection of Cultural Properties is not a development unique to the field of cultural properties, but is also linked to developments in tourism in Japan.

For example, the Tourism Nation Promotion Basic Law was passed in 2006, and the Japan Tourism Agency was established in 2008. Government of Japan positioned tourism as a major economic growth area. And based on the Law in 2006, the Tourism Nation Promotion Basic Plan was approved in 2012. Those governmental policies for tourism have influenced on conservation of cultural properties in Japan.

In May of 2020, the Agency for Cultural Affairs enacted the Cultural Tourism Promotion Act. It aims to link the promotion of culture to the promotion of tourism and the revitalization of local communities, thereby producing a virtuous cycle in which the economic effects of these efforts are reinvested in culture.

In recent years, these kinds of interlinked efforts, from both cultural and tourism agencies, has produced a deeper relationship between tourism and culture in terms of public administration as well. While the relationship between tourism and cultural heritage is facing major challenges, developments in Japan over the past few years have led to discussions on how to tie in the promotion of tourism to regional revitalization, how to channel this back to the preservation of cultural heritage, and what place the front lines should take within institutional frameworks.

In this context, I would like to reconsider the topic of this International Workshop —the museum—and look at its diversification.

When I think about museums in Southeast Asia, where I am doing my fieldwork, I realize that the formation of "nation" and the establishment of museums are closely related, and in many Southeast Asian countries, they also have a close relationship with colonialism. Although the focus of on the exhibits is often that country's ethnic groups and cultures as viewed by the colonial power, many studies have pointed out that museums have played an important role in the process of establishing nation-states even after independence.

The photo (slide13) shows the National Museum of Cambodia in Phnom Penh, and this too was established by the former colonial power, in this case France. National museums, especially those located in countries' capitals, have historically been deeply intertwined with the origins of those countries as modern nation states.

Here, I would like to expand the discussion from these national museums to think about archaeological sites and

site museums.

The photo (slide14) shows the reconstructed Suzaku-mon gate at the Nara Palace site in Nara. In 2018, “Suzaku-mon Hiroba Square” opened to the south of this gate. As well as facilities for tourism and exchange, it also features the “Heijokyu Izanai-kan” guidance center. The center and the Nara Palace Site Museum are where visitors can learn about the history of the palace site as a whole and the research findings on the palace site.

Here, I will show you some photos (slide15-17) from my visit to the guidance center in archaeological sites such as the Nara Palace site, reconstructed structures such as Suzaku-mon Gate (Southern gate of the palace) and Daigoku-den Hall (main audience hall), as well as exhibits at site museums, are a great help for visitors to be able to visualize the cultural assets buried underground. The exhibits let visitors imagine a past that cannot be directly seen. In other words, these site museums can show people things that are now invisible.

As another example (slide18), there is a museum in Chanthaburi, Thailand, that specializes in underwater archaeology and is also home to the Underwater Archaeology Division of the Fine Arts Department of the country’s Ministry of Culture. The exhibits allow visitors to “see” underwater archaeological sites that are difficult to visit in person, while reconstructions of excavated ships allow them to imagine what the sunken ships used to look like more easily.

As such, one function of museums is helping visitors to imagine archaeological sites that they cannot actually see, and buried cultural properties that are difficult to imagine.

As well as museums including guidance center or site museum that play a role when it is not possible to go to (or see) the site itself, there are also those that serve the function of “visitor center.”

Although outside Asia, I will use the example of the D.F. Wouda Steam Pumping Station in the Netherlands (slide19). This is an example of building a new structure right next to a cultural heritage property (which in this case is also a world cultural heritage property) without making any changes to it. In this case, it functions more as a “visitor center” than a “museum.” In other words, visitors must first visit the visitor center (the top right photo) to purchase a ticket and view the cultural heritage exhibition before visiting the historical building. They can then visit the actual building before returning to the visitor center to use the gift shop and café. This forms a system for properly managing visits to the historical building, and in this instance, it is not possible to visit just the building itself. Although it is questionable whether this visitor center can be included in the category of museums, the exhibition in the center gives an overview of not only the history of the pumping station, but also the history of how the Dutch reclaimed the lowlands, and how the pumping station fits into the history of Dutch land reclamation and technology.

Furthermore, and this is related to the fact that the definition of cultural heritage is becoming wider and wider, there are cases like Hoi An in Vietnam (slide20), where the entire town functions as a museum. Admission tickets are sold at several entrances of the town, and people visit small museums scattered throughout the town, some of which are things like historical merchant houses.

This is a photo of the coal mining town of Sawahlunto (slide21), located in West Sumatra, Indonesia, which was listed as a World Cultural Heritage in 2019. This town, which was registered on the World Cultural Heritage List as a part of “Ombilin Coal Mining Heritage of Sawahlunto,” was built entirely for coal mining in the late 19th to 20th centuries. The huge kitchens and dining rooms built for the workers, and the separate quarters for single workers and workers with families, are all part of a tour of the entire town that shows the development of the coal mining industry in Indonesia.

There are now many examples where entire towns are regarded as cultural heritage sites for tourism. Let us look

at the example of Kurayoshi in Tottori Prefecture (slide22), one of Japan's "Preservation Districts for Groups of Historic Buildings." Here, attempts are being made to attract tourists not only to the district itself, but also over the wider area. In the town, there are open houses (with a fee payable on entry) that give an introduction to the culture of machiya townhouse, using a nationally registered tangible cultural property like the one in the photo. The tourist information center, which was renovated from a historic building, also provides maps for walking around the town, and tours from volunteer guides are available at any time as well. This is a city-designated tangible cultural property, open to the public free of charge, and the toilets are available for use (slide24). Tourists can walk around the entire town and learn about its history and that of its buildings without having to worry about toilets or meals. After visiting the main sites with a volunteer guide, some people go back to their favourite spots on their own, some go directly to the next tourist attraction, and some go shopping for souvenirs.

In Indonesia, the development of tourism in the Kota Tua district of Jakarta has been underway since now-president Joko Widodo's time as the Special Capital Region's governor. The rapid development of tourism in the last few years, focusing on buildings from the Dutch colonial period, resembles in some ways the relationship between tourism and the Preservation Districts for Groups of Traditional Buildings in Japan. However, there are of course substantial differences too.

This is the Jakarta History Museum (slide27), located in the central square of Kota Tua. When Indonesia was ruled as the Dutch East Indies, this building was used as the City Hall, and the square in front of it, known as the Stadhuisplein (now Fatahillah Square), forms the center of the Kota Tua district, where historical buildings from the Dutch period remain.

As a matter of fact, while the buildings in Kota Tua are considered important as part of the townscape, the actual issue is in what form they should be preserved. In the past, rather than preserving the buildings as part of the town, "preservation as a museum" has been used as a method for preserving each of the buildings individually.

For example (slide28), in the upper right corner of the photo is the Wayang (shadow puppet) Museum, in the middle is the Magic Art 3D Museum, in the upper left is the Museum Bank Indonesia, in the lower left is the Museum of Fine Art and Ceramics, and as I mentioned earlier, the Jakarta History Museum. However, when there are so many museums in this one district of Kota Tua, there is a limit to the number of buildings that can be preserved and used as museums.

Of course, Japan also faces the problem of how, when a group of buildings is preserved as a townscape, to make use of each of the buildings. This is an example from Hakodate (slide29). The building on the lower left is a hotel that was converted from a bank and art gallery. There are also many registered historic buildings that are used as cafés and shops, but in Japan, it appears that the way each building is used differs greatly depending on what kind of cultural property it is, i.e., whether it is a registered tangible cultural property, a national important cultural property, or a city-designated tangible cultural property.

Hakodate is also home to the Old Public Hall of Hakodate Ward, which is designated as a national important cultural property and managed by the city. From April to September, it hosts the "Haikara (Western) Costume Hall," where tourists can dress up in old-fashioned costumes and have their pictures taken. Here, people travel through time by wearing costumes from a particular era in the public hall. In Kyoto, too, people wear kimonos to walk around the town. This phenomenon is of great interest in tourism research, and several papers on it have already been published. In Kyoto's case, this was part of a tourism project to promote Kyoto's culture of Nishijin-ori textile making, in which people wore clothes of Nishijin-ori cloth to stroll around the city. Conversely, kimono-wearing by tourists from

overseas is done as a way to experience Japanese culture. So, what is the significance of kimono-wearing in Kyoto by young Japanese people, something that has been particularly noticeable recently (especially now that inbound tourists have almost disappeared as a result of COVID-19)? Perhaps for them, it is a trip to the past?

I think the cases of Hakodate and Kyoto are very interesting examples for considering what kind of tourism experience visitors want and how to make the best use of historical buildings as cultural heritage.

When looking at the relationship between cultural heritage conservation and tourism, there is the issue of “authenticity” of the tourism experience. The sociologist Dean MacCannell pointed out the relationship between host and guest, where the front is the place where the host and guest meet and the back is a place closed to the guest, and the “staged authenticity” of the backstage that is systematically performed to those tourists who wish to see it. Authenticity in this context is closely related to the discussion of authenticity in terms of buildings, and is also important in considering the relationship between tourism and museums.

One example is that of outdoor museums. Famous Japanese examples include the Historical Village of Hokkaido and Aichi Prefecture’s Meiji Mura, while in Indonesia, there is one in West Sumatra called Pagaruyung. The province of West Sumatra is home to many buildings representing the culture of the Minangkabau ethnic, and these can be seen at the Pagaruyung Palace.

These buildings, which visitors can actually enter, are symbolic of the Minangkabau (slide33). However, the difference of this from the Japanese examples is that many of these buildings were newly designed and built for this purpose. Therefore, these buildings, designed by architects in Jakarta, feature many innovations and changes that are not found in historical Minangkabau structures. So, should this be seen as more of an amusement park, or can it be seen as a museum that showcases the culture of the Minangkabau? What is the relationship between the authenticity of the buildings there and staged authenticity? As can be seen in the exhibits of Minangkabau culture, the relationship between the museum and tourism is also connected to the relationship between the museum and the ethnic group.

Hokkaido, where I am based, is home to many indigenous Ainu people. They can be divided into several groups. For example, the Kamikawa Ainu are represented by the Kawamura Kaneto Ainu Memorial Museum, the oldest Ainu museum in Japan.

At the Nibutani Ainu Culture Museum in Biratori, you can see not only the collection of Shigeru Kayano, the first Ainu member of the Japanese Diet, but also the reconstructed buildings of an Ainu village, or *kotan*.

The Akanko Ainu Kotan in eastern Hokkaido was created when the Lake Akan hot spring resort was developed for tourism. There is a theater where visitors can watch Ainu dances, more than 20 souvenir shops, and restaurants, all arranged as a *kotan*.

In 1984, a museum called Shiraoi Porotokotan was opened in Shiraoi. This too featured the reconstructed buildings of a *kotan* settlement. 2020 saw the opening of a symbolic space for ethnic coexistence “Upopoy,” which merged with the Shiraoi Porotokotan.

Upopoy contains the newly opened National Ainu Museum, as well as a group of buildings from the Shiraoi Porotokotan and an indoor theater. One feature that sets Upopoy apart from other regional museums on the Ainu people is that it is a national center representing the Ainu people as a whole. However, there is of course the issue of how to maintain the cultural diversity that the Ainu people have developed in their respective regions and groups.

As we have seen, as museums in Asia diversify, the relationship between cultural heritage, including tourism and ethnic cultures, is also becoming more complex. Here, I would like to outline a few things regarding tourism and

local communities. For example, among the traditional forms of tourism, which used to be considered “traveling through the unfamiliar,” there has been a trend toward “traveling through the everyday lives of others” or “traveling as if living there.” In other words, guests enjoy the “everyday” of the hosts as the “unfamiliar.” Walking around town, it can be said, is one way to enjoy the daily life of the hosts. This makes the local community as “host” something closer to everyday life, rather than a staged venue.

Further, and related to the transition from mass tourism to responsible tourism that I mentioned at the beginning, in alternative tourism, or tourism as represented by CBT (Community-Based Tourism), the relationship between local communities and tourism becomes more important. In Japan, regional Destination Management Organizations (DMOs) have emerged to oversee this.

On the topic of tourism and communities, there is an initiative in Japan called the Phenology Calendar. Led by Akio Maita, an ecotourism researcher, the Japan Ecotourism Society has published a book titled “A Phenology Calendar made by All.” This initiative, which originally used concepts from ecology, is also an activity in which local people come together to search for their own treasures. As shown in the example of Ninohe City (slide41), tourists can see with a glance at the calendar when and what they can enjoy in terms of food and the natural environment. On the other hand, creating these calendars is also a way for local people to learn about their own community, and to set out what they want to “display.”

The phenology calendar includes elements of tourism, education, and the “ecomuseum” which origin in France. By “displaying” the region as a whole and conducting community activities, it also has an educational aspect. As such, I believe it is an initiative that can also be used to view an area itself as a museum.

This phenology calendar shows a region as a museum (or an object of tourism). On the left (slide42), meanwhile, is a map tenugui (hand towel) developed by master course students at my university in collaboration with the Hokkaido University Museum shop. This towel provides a map as a mechanism for going from the museum shop to the outside. In other words, it gives a summary of the local area as seen from the museum, with the museum at the center.

When we think about museums and local communities, I think we can see a movement toward “the community as seen from the museum” as in this hand towel and “the community as a museum.” In summary, we have looked at the diversification of tourism, tourism and cultural heritage, and the diversifying forms of museums. When we think about museums, tourism, and local communities from the perspective of the diversification of tourism and museums and their relationship with cultural heritage, we can see two major trends: “the community as seen from the museum” and “the community as a museum.” As we analyse these trends, I think it is important that we work alongside those involved with museums to consider how things will develop in the post-COVID era.

Rethinking of Museum and Tourism: Cases from Asia

Akiko TASHIRO
Research Faculty of Media and Communication, Hokkaido University
tashiroa@mc.hokudai.ac.jp

1

Akiko TASHIRO

Associate Professor,
Graduate School of International Media, Communication and Tourism Studies
add: Center for Advanced Tourism Studies / Center for Ainu and Indigenous Studies



- MA & Ph.D. in Area Studies, Sophia University
- 2006-2010 Tokyo / 2010-2015 Nara National Research Institute for Cultural Properties, Japan.
- Archaeology / Anthropology / Tourism Studies
- Research Topic: Heritage Studies / Monument Conservation and Tourism / Garden Tourism



2

- Diversified Tourism
- Tourism and Cultural Heritage
- Diversified Museum



Museum and Area / Local Community

3

Tourism

- Rapid development after Industrial Revolution
- Elite Tourism - Mass Tourism - Alternative Tourism - Responsible Tourism
- Interaction between Host and Guest

4



5



6

Diversified Tourism

- Eco Tourism
- Contents Tourism
- Health Tourism
- Heritage Tourism
- Sustainable Tourism
- Community Based Tourism
- Dark Tourism.....



7

Global Code of Ethics for Tourism

- Adopted in 1999 by the General Assembly of the World Tourism Organization, (i) 2001 acknowledged by UN
- 10 articles: Tourism's contribution to mutual understanding and respect between peoples and societies / Tourism as a vehicle for individual and collective fulfillment / Tourism, a factor of sustainable development / Tourism, a user of the cultural heritage of mankind and contributor to its enhancement / Tourism, a beneficial activity for host countries and communities / Obligations of stakeholders in tourism development / Right to tourism / Liberty of tourist movements / Rights of the workers and entrepreneurs in the tourism industry / Implementation of the principles of the Global Code of Ethics for Tourism.

UNWTO, http://www.unwto.org/pdf/tourism/tourism_ethics.pdf
(Access: Nov 2020)

8

Tourism and Cultural Heritage



ICOMOS

1976 Charter of Cultural Tourism

1999
International Cultural Tourism Charter
Managing Tourism at Place of
Heritage Significance

9

- Law for the Protection of Cultural Property (1950) Amendment 2019

- 2006 Tourism Nation Promotion Basic Law 「観光立国推進基本法」 → positioned tourism as a major economic growth area.

- 2008 Establishment of Japan Tourism Agency

- 2012 Tourism Nation Promotion Basic Plan was approved.

→ Conservation of Cultural Heritage should be planned with Tourism vision

10

- May 2020 Cultural Tourism Promotion Law 「文化観光拠点施設を中核とした地域における文化観光の推進に関する法律（文化観光推進法）」

→ Promote regional culture and tourism. And its economical benefit should contribute to promotion of regional culture as a cycle.

11

Diversified Museum

12



National Museum of Cambodia

1905 Division Khmer ancient art at Indochina museum.

1920s
First Director George Groslier

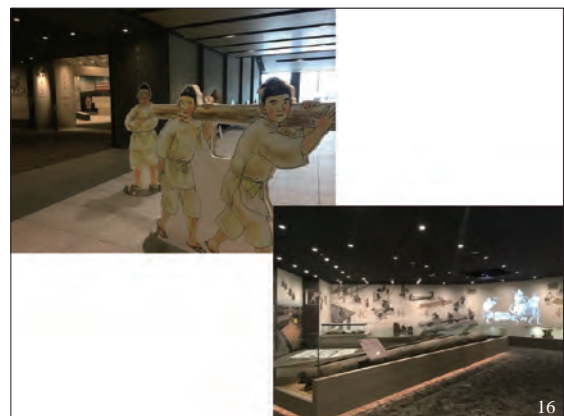
13



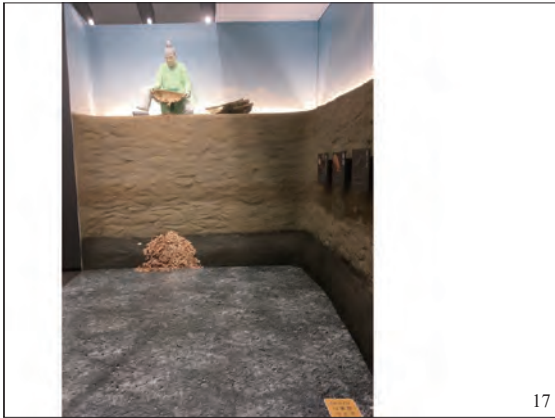
14



15



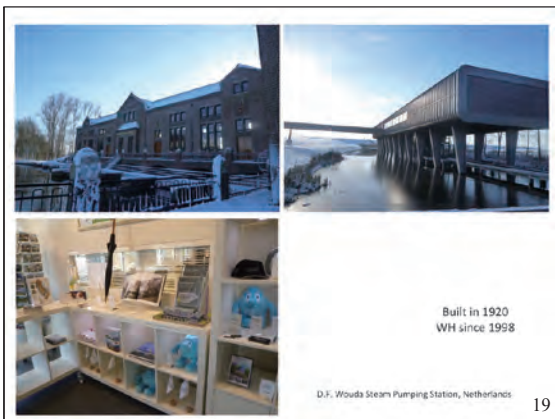
16



17



18



19



20



21



22



23



24

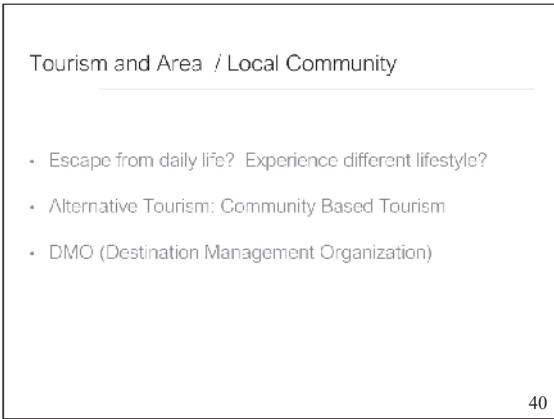
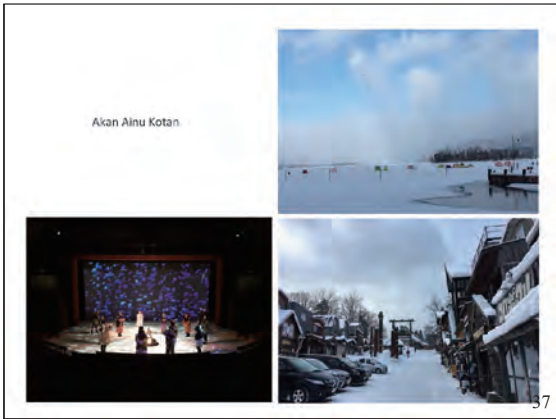
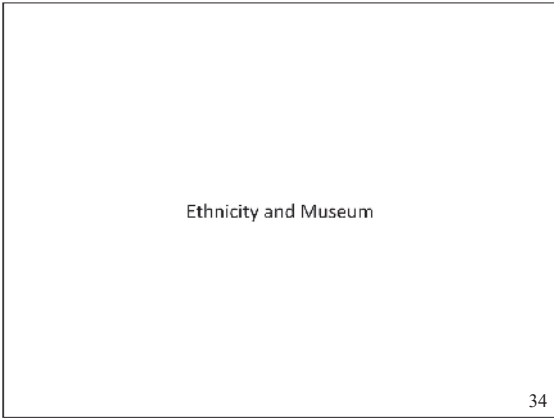


• Authenticity in touristic experience (MacCannell 2013)
 • Tourist need authenticity ?

MacCannell, Dean. 2013. *The Tourist: A New Theory of the Leisure Class*. Revised version. University of California Press.

31





Phenology Calendar

with Eco-museum concept

with educational component

日本エコツーリズム協会『みんなで作るフェノロジーカレンダー』旬報社、2017

© Ninohe city

41

Area through museum & Area as museum

Discussion of tourist map@Hokkaido University Museum Museum Shop Potolo

42

Conclusion

- Diversified Tourism / Tourism as cultural exchange tool/ The past is a foreign country?
- Tourism and Cultural Heritage
- Diversified Museum
- See, Do, Know, Experience [吉兼 2016: 12]

Area through museum & Area as museum

吉兼秀夫『地域創造のための観光マネジメント講座』学芸出版社、20143

京都文化博物館と地域コミュニティ －まちづくりを担う博物館－

村 野 正 景

京都文化博物館の学芸員で村野正景と申します。

私の勤務する京都文化博物館は京都府の設置した博物館で、京都市の真ん中に位置します。今回は当博物館における事例報告として、京都文化博物館と地域コミュニティが協働で取り組んでいるまちづくり活動を紹介します。

さて、都市の中にある博物館には、何が期待されているのでしょうか？最初にややネガティブな側面を紹介します。実は日本語には、「博物館行き Hakubutsukan-iki」という言葉があります。「Hakubutsukan」は Museum、「iki」は become a part of collection という意味なので、become a part of collection in the museum という言葉なのですが、裏の意味があります。それは「Out of date」あるいは「Useless」という意味です。日本では少し前まで、博物館は単なる収蔵庫で、今は使えなくなったものが行き着くところ、とされていた節があります。誤解をおそれず単純化して言えば、博物館は、現代社会の中で、必ずしも必要でないとわかってしまうようなところでした。しかし、一般社会のこのような意識は最近変わってきているように思いますし、京都文化博物館も、現代社会において不可欠な博物館へと一つ一つステップを踏んで、進化していくことを目指しています。博物館がそうなるには、いったいどうすればよいのでしょうか。

この問いに対する京都文化博物館の回答を以下では示していきます。まず博物館のごく簡単な紹介をいたします。

京都文化博物館は1988年に、(1) 歴史博物館、(2) 美術館、(3) フィルム・アーカイブスの3つの顔をもつ、京都の歴史文化を総合的に紹介する博物館として開館しました。本館が展覧会をおこなう展示室や収蔵庫をもつ建物で、別館が国の重要文化財に指定されている近代洋風建築物です。この別館はあとで紹介するように、地域のシンボルともなっています。

京都文化博物館は、これまで、博物館法に示されているような、資料の収集、保存、調査、教育、展示などにかかわる、非常に多岐にわたる活動をおこなってきました。



京都文化博物館外観

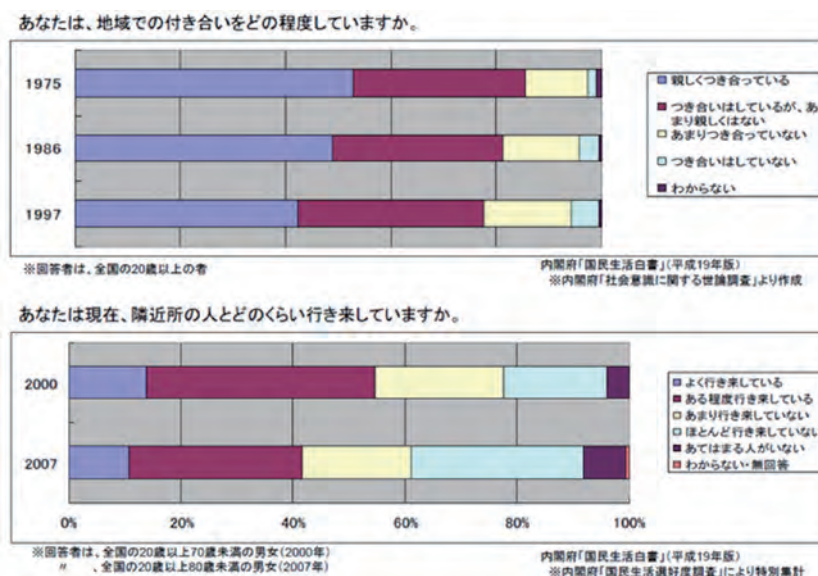
しかし、これらだけではなく、近年は、都市にある博物館として新たな役割を果たしてほしいと期待されています。それが、「まちづくり」への貢献です。まちづくりとは、日本の都市政策や地域開発の根幹の一つであるコミュニティ・プランニングのあり方を理解する上で、鍵となるコンセプトです。

「まちづくり」という用語の意味は、時代によって少しずつ変わっていますが、近年は次のように理解されています。つまり「まちづくり」は、都市計画に地元住民が参加し、都市を改善し維持していく試みとして理解することができます。まちづくりの活動には、集会や住民の政策立案への関与などがあります。政府だけでなく、地元の人々も都市の計画を担当します。博物館の活動を、こうしたまちづくりの一環に位置付けるようにすることが、いま期待されていることです。言い換えれば、博物館はこのまちづくりにコミュニティの主要メンバーとして参加することを期待されています。それではどのようにして博物館はこの期待に応えていけばよいのでしょうか？

まちづくりへの貢献の期待に応えるためには、博物館のもつ力をどの領域に向けていけばよいのかを明確にすること、言い換えれば、現在のコミュニティにおいて、どのような社会的問題があるのかを把握し、その中から博物館が扱うことができる課題を把握することです。そこで、京都文化博物館がどのような課題に向き合おうとしているのか、京都の事例を紹介しましょう。

京都は国内外で非常に有名な文化都市です。世界遺産にもなっている文化遺産を数多くもち、それらは多くの人々によく知られています。約1000年にわたって日本の首都であった京都の主な魅力は、文化力や歴史力にあります。私の働く博物館は、京都を観光する人々が行きたいと思う、神社、城、天皇の住まいなどまで、歩いていける場所にあります。これらは非常に魅力的な場所で、観光のガイドブックなどに多数掲載されています。

しかし、ガイドブックに象徴されるように、そうした外部の声が魅力的だとして挙げている文化遺産が多くの人々に注目されているのに対して、もっと幅広い歴史や文化を形作る基礎であり、これらを支える力であるはずの生活者、いわば地域住民が見逃されがちです。文化遺産観光の事業で、地域住民が大事にしている日々の文化やアイデンティティがいわゆる観光地と同じように大事にされているのでしょうか。それらが大事にされなければ、京都の文化や歴史は、消費されるばかりで、継承されなくなる危険すらあるのです。当館は、都市の中央に位置し、住民とも後で述べるように近い距離にあるため、地域コミュニティの声、すなわち内側からの声を聞ける位置にあり、実際そのような危惧をよくうかがいます。



さらに困ったことが起きています。前ページの表は、日本全国を対象にした調査ですが、コミュニティの中での人間関係がどの程度深いかを調べた結果です。見ての通り、関係が深いと答えた割合が、1975年は半数を超えていたのに対し、2007年では非常に少なくなっています。つまり、コミュニティの中で人間関係が希薄になってきてしまっています。これは京都にもあてはまります。

これによって何がおきるでしょうか。コミュニティの中での人間関係が希薄になった結果、内側からの声は散発的なものにならざるをえず、集団としてまとまった強い声を発することができなくなってしまう。こうしてますます、本来地域コミュニティが、観光客を含む多くの人々に伝えたいと思っていることが、伝わらなくなるのです。そこで、このようなコミュニケーションの危機に対し、住民や関係者によって作られたまちづくり協議会が、地域マネジメントを円滑におこなうため、さまざまな努力をおこなっています。

このように問題分析を踏まえると、博物館はこうしたまちづくり活動に加わっていけば良いと考えられます。では具体的にどのように加わっていけばよいのでしょうか？

京都文化博物館の事例を紹介します。私たちの取組は大きく3つあります。

1つ目が、協力しようとしている対象のまちづくり協議会がもつ「まちづくり」のコンセプトを博物館が共有すること。

2つ目に、コンセプトの理解の上で、まちづくり協議会とともに行動をおこすこと。

3つ目に、まちづくりの次のアクションに向けて、アイデアやプランを提案することです。

以下では、それぞれについて、具体的な活動内容を紹介します。



まちづくり協議会との定例会

1つ目のコンセプトの共有のため、具体的におこなっているのは、地域組織（まちづくり協議会）との定例会です。毎月1度、第3金曜日の午前10時半から12時まで、定例会を開き、意見交換をおこなっています。これまでに、当館では60回以上、地域定例会を開催してきました。現在おもに協力関係を築いているのは、2つのまちづくり協議会です。それは京都文化博物館の北にある姉小路通のまちづくり協議会、それに南にある三条通のまちづくり協議会で、両者と主に活動を展開しています。これらのまちづくり協議会では、地域住民間の親睦を図り、人間関係を新たに構築していけるように、気軽に楽

しめ、アトラクティブな催しを実施しています。たとえば、路上での花火、行灯会、祇園祭に関係するイベントなどです。

こうしたイベントに、普段から忙しい博物館スタッフが積極的に関与することは一般論としては難しく、また仕事としても認められにくいでしょう。しかし当館では、こうしたイベントの目的は、地域の課題解決のためにあることを、地域定例会を通じて把握しています。そのため当館では、こうしたまちのイベントも、博物館スタッフが手伝ったり、博物館のスペースを利用してもらったりしながら、積極的に関与することになっています。博物館が主体的に主催する事業ではなく、あくまで地域のお手伝いですが、こうした活動をきちんと仕事として位置付けることが重要と考えています。

ところで、定例会を通じて、さきほどの地域催事への協力に



博物館の空間を利用してもらうイベント

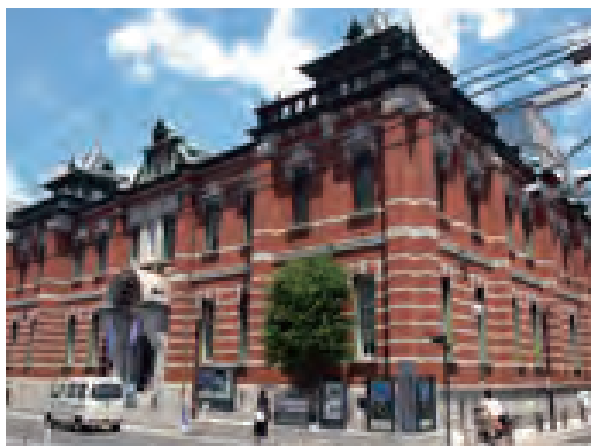
関するようなことだけではなく、地域の人々がそのつながりを再構築していくためにもっと重要視していることを、私たちは認識できました。とくに優先順位の高いのは、次の3つです。

まず、地域の文化資源をもっと発掘したいと思っているということ。次に、この地域の文化的景観とその構成要素の価値をもっと普及したいと考えていること、それは「外部の声」では聞くことができていない領域のものであるため、もっと多くの人々をそれに引きつけ、関心をもってもらい、景観とその構成要素が今後も保護されていってほしいと考えていること。最後に、地域の人々の中に、場所への愛着や意識を高めてもらいたいこと、それはまちづくり活動に地域の人々がもっと参加をうながすためであること。ほかにもあるのですが、この3つについては、とくに博物館が貢献できる分野ではないかと考えました。

このように定例会を通じて、具体的に取り組むべき課題や対象が明確になっていきます。そうして具体的な行動をはじめました。その一つが、地域の文化資源を発見・把握するための調査です。地域の人々が大切にしたい文化的景観とその構成要素について調べるのですが、現在はとくに、近代建築をテーマにして、この地域にある近代建築の歴史や現状、将来計画をインタビューなどを通じて、把握しようとつとめています。こうした調査は、博物館スタッフと地域組織のメンバーが同道しています。

次に調査によって把握できた情報や新しいアイデアを、共有します。

その方法は2つあり、一つはカフェ・スタイル(10人から40人程度の小規模な勉強会ないしワークショップ)、もう一つはシンポジウム・スタイル(100人以上を迎え入れた比較的大規模な形式)です。さらに発見した情報をより広くの方々と共有するため、紙媒体の報告書やデジタル媒体の冊子を公開しています。



地域の文化資源を発見・把握するための調査



まちづくり協議会と作成した観光用冊子

左の写真は、姉小路通のまちづくり協議会と作った冊子で観光用のものです。しかし一般の観光ガイドブックと異なり、この冊子には、地域で大切にしたい文化資源、それに加えて、この地域を観光する際に守ってほしいマナーなど、地域の人々からの、つまり「内側の声」が記されています。さらに、メッセージを伝えるために、この地域では、店先や家の前に、メッセージボードを設置しています。ここのボードに記されている内容はさまざまです。この取り組みを、「まちかど

ミュージアム」と呼んでいます。

それから、発見した情報や伝えたい内容を共有・公開していく際に、自分たちだけのことしか知らないと、独りよがりな行動になってしまうかもしれません。そこで、博物館スタッフと地域組織のメンバーは、他地域の取組の実例やアイデアを相対的に考え、比較検討できるように、実際に他の地域へ訪問し意見交換を実施しています。下の写真は、山口県の萩市を訪問した際のものです。



店先のメッセージボード（まちかど博物館）



山口県萩市での勉強会

さてここまで、(1) コンセプトの共有、(2) 実際に行動をおこす、ということの具体的な中身の説明をしてきました。最後に (3) 未来のアクションのための情報収集や提案に関する取り組みを紹介します。

昨年の事例を具体的事例として紹介します。昨年度、文博界隈の近代建築と地域事業という展覧会をおこないました。この展覧会は、文字どおり、この地域の近代建築の歴史や魅力を伝えるもので、これまでの地域組織との協働の取り組みの成果発表のような場でもありました。そこで展覧会の一部は、地域組織がこれまで大切にしてきたことや、どんな活動をおこなってきたのかを紹介してもらいました。この展覧会は一般によくあるような学芸員のみでつくりあげるような形ではなく、地域組織のメンバーが展示品選択や展示作業にも加わる、いわば参加型でおこないました。こうして地域の声を来場者にダイレクトに伝えようとしたのです。

次ページの写真は地域組織の方が展示作業をおこなっているところです。左下の写真では来館者の意見ノートがあります。展示をご覧になった人たちに、自由な感想や意見を言ってもらうためのものです。何に対して意見を言ってもらったかという、三条通の景観にふさわしい建物、言い換えると、もっとも三条通らしいと思う建物は何かを、展示してある写真や資料、およびこの連続立面、あるいは実際に三条通を歩いて見て経験をもとに感想や意見を述べてもらおうとしたのです。右下の写真のように、建物の写真の下には、シールを貼るスペースを設けました。もっとも三条通らしいと思う建物に、シールを貼ってもらうのです。ある種の人気投票のようなものです。これを通じて、地域組織の人々も、私たち博物館スタッフも、自分たちとは異なる、普通の観光客などがもつ意見やイメージを知ることができます。こうした意



地域組織メンバーによる参加型の展示

見を聞くことは、路上インタビューやアンケートなどの方法があるかもしれませんが、たいへん手間です。しかし博物館の展覧会に、こうした調査の場を設けることで、貴重なデータを比較的容易に収集することができます。このデータは、地域組織に還元され、今後の景観保全などのまちづくり活動のための、基礎データとして活用されるのです。

将来のアクションにかかる取り組みは、これだけではありません。当館別館を、文化庁と筑波大学のプロジェクトの一環として、ライカジオシステムズやエリジオン株式会社などの協力によって、3D スキャンをおこない、VRで見られるようにしてもらいました。正確なレーザー計測による3D デジタルデータは、もしもこの建物に何かあった場合、その修復や復元に役立つでしょう。またVRは理論上、ここに来られない人々も見ることができ、ヴァーチャル空間上で遠隔地と情報共有をおこなうこともできます。

このように博物館が新しい技術やアイデアのショーケースとなることで、未来の地域活動のイメージづくりに役立つことができます。それにショーケースとは言っても、単に技術を示すだけではなく、どう使えるかを具体的に経験できる場ともなります。これは、文化遺産の持続的活用の新しいモデルを生み出すかもしれません。

改めて強調したいのは、博物館は、多様な声をお互いに交換し、表現する場となることができることです。普段つきあいのなかった人々の間の交流機会ができ、普段は埋もれている声を発信する場となることができます。博物館の展示を通じて、各資料が地域にとってどんな意味を持つかをみんなで議論できる、そして地域における価値を発見できるでしょう。博物館は、いわば、対話の場となることができます。そして、先ほど述べたように、博物館が新たな技術や考え方のショーケースになることができます。これは地域の活動にとって、新たなインスピレーションやアイデアの源となるでしょう。こうして、博物館は「まちづくり」に貢献できると考えています。

The Museum of Kyoto and Local Communities: The New Museum Developed Together with the Community

MURANO Masakage

My name is Murano Masakage, a curator at the Museum of Kyoto in Japan.

The Museum of Kyoto was established by the prefecture of Kyoto, and it is located centrally in the city of Kyoto. In this case study report, I will be introducing some activities in which the Museum of Kyoto and the local communities collaborate, to illustrate how they work together in *machizukuri*, which is “city planning and community management .”

So what do people in Japan expect from museums in cities? Let me first start off with a slightly negative example. In Japanese, there is a term called “*Hakubutsukan-iki*.” *Hakubutsukan* means “museum.” *Iki* means “to become part of a collection.” So, together the term literally means “to become a part of the museum collection.” However, people usually use the term to refer to something being “out of date” or “useless.” Not so long ago in Japan, people thought of museums simply as warehouses where things that have become useless end up. In other words, museums were considered non-essential in a modern society. However, the image of museums as held by the public recently seems to be changing. We at the Museum of Kyoto are taking steps to become a museum that is indispensable to our modern society, aiming to evolve continuously. What can museums do to realise this?

The way that we, the Museum of Kyoto, have answered this question will be shared here. But let me first start with a brief introduction to the museum. The Museum of Kyoto opened its doors to the public in 1988 as a comprehensive facility to introduce Kyoto’s history and culture. It has three features: (1) a history museum, (2) an art museum, and (3) a film archive. The Main Building houses exhibition rooms and a repository. The Annex is a modern, Western-style building designated by the government as a National Important Cultural Property. The Annex, which I will introduce later, serves as a symbol for the local community.



Exterior of the Museum of Kyoto

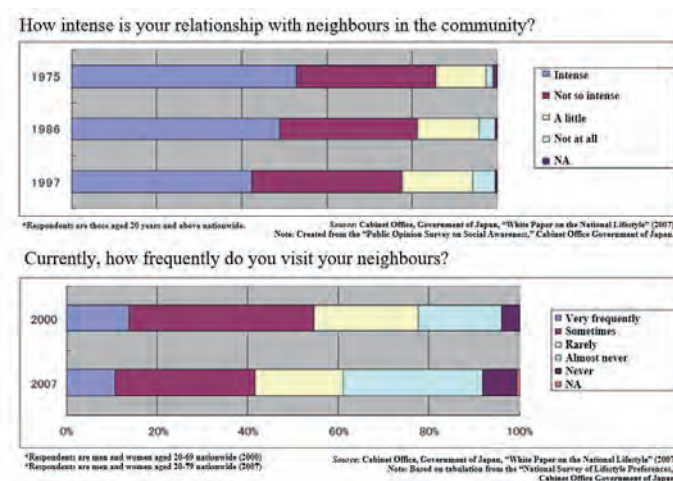
The Museum of Kyoto has been engaged in a wide variety of activities related to the collection, preservation, research, education, and exhibition of materials, as indicated in the Museum Act. However, in recent years, the Museum of Kyoto has been expected to take on a new role as a city museum. That is, to contribute to *Machizukuri*. *Machizukuri* is a key concept for understanding the ideal form of community planning, which is one of the core elements of Japanese urban policy and community development.

The meaning of *Machizukuri* has changed slightly over the years, but nowadays, it is understood as follows: “*Machizukuri* can be understood as an attempt to improve or sustain the city, involving local residents in the planning process. The activities of *Machizukuri* include: meetings, involving residents in policy making, and so forth. Not just the government is handling the planning of the city, but also the locals.” Now, the activities of the museum are expected to be a part of this planning process. In other words, the museum is expected to participate in *machizukuri* as one of the important members of the community. How can the museum meet those expectations?

To meet expectations that we contribute to *Machizukuri*, we have to clarify the areas to which the museum’s resources should be directed. In other words, we have to understand what sort of issues exist currently in our community, and from there, we have to identify which of those issues can be addressed by the museum. I would like to now introduce some of the issues the Museum of Kyoto is working on through some cases from Kyoto.

Kyoto is a well-known cultural city, recognised by many people both inside and outside of Japan. The city is home to many cultural heritage sites, some of which are designated as World Heritage sites and well known to many people. The main attractions of Kyoto, which was the capital city in Japan for around 1000 years, are the city’s culture and history. The museum that I work for is located within walking distance of major tourist attractions, including shrines, a castle, and the Imperial Palace. These spots are particularly appealing to tourists and are listed in various guidebooks.

While cultural heritage sites such as those represented in the guidebooks gain much attention because of the “voices of people outside” that dictate their appeal, the local residents who form and have the power to sustain the basis of cultural heritage in a much wider sense, which includes the site as well as the history and culture behind it, tend to be overlooked. Is the everyday culture and identity cherished by the local residents valued as much as tourist sites in cultural heritage-focused tourism? If they are not valued, the culture and history of Kyoto will only be consumed, possibly leading to the danger that they will not be passed on. Our museum is located at the centre of the city, physically close to local residents, so we are in a position to listen to the voices of residents, and in fact, we often hear concerns such as those that I have described.



Then, there is another issue. The graphs show the results of a nation-wide survey that measured the intensity of relationships within communities. As you can see in 1975, the proportion of responses, saying that a relationship is intense, made up more than half of all responses. By 2007, it had shrunk significantly. In other words, relationships are becoming weaker in communities. This is very true for Kyoto.

What happens as a consequence of this? As a result of these weakened relationships in the community, the voices of residents became scattered, and the community was unable to speak with a strong, unified voice as a group. In this way, it has become increasingly difficult for the members of the local community to communicate what they want to say to the public, including tourists. From such sense of community crisis, efforts for *Machizukuri* are being made by community planning associations organised by residents and other stakeholders.

On the basis of analysis of these issues, it can be said that the museum should become involved in these community planning activities. How specifically should it be done?

Let me introduce some cases from the Museum of Kyoto. We are involved in three major activities.

First, sharing the concept of *Machizukuri*, with the local *Machizukuri* associations we intend to collaborate with.

Second, after having understood the concept, taking actions with the local *Machizukuri* associations.

Third, proposing ideas and plans for action.

Let me elaborate on each of these.



Regular meetings with local *Machizukuri* associations

As for the first point of sharing the concept, we have been holding regular meetings with the local *Machizukuri* associations. We hold meetings once a month on the third Friday, from 10:30 in the morning until noon, to exchange opinions. We have held more than 60 meetings to date. At the moment, we work mostly with two local *Machizukuri* associations. They are the local *Machizukuri* association of Aneyakoji Street, representing the community located just north of the museum, and the local *Machizukuri* association of Sanjo Street, representing the community located just south of the museum. In these meetings with the local *Machizukuri* associations,

we host informal events for all such as fireworks in the street, traditional lighting events, and others related to the Gion Festival, so that people in the communities can get to know each other and build new relationships.

Generally speaking, it is difficult for busy museum staff to actively participate in such events on a regular basis; moreover, this may not be seen to be part of their job. Nevertheless, through discussions in local association meetings, the museum has identified and understood that the purpose of hosting these events is to resolve issues within the communities. Therefore, the museum staff members are actively involved in helping out in these local events or allowing the association to use the museum space for such events. These events are not museum-led initiatives and the museum staff are there to support local efforts, but it is important to recognise this support function is part of their work.

Besides the need for the museum to be involved in local events through regular meetings, we have come to understand community members' concerns that are important for reconstructing people's



Events held using Museum space

ties within the community. The three top priorities are as follows:

First, the community members are interested in finding the cultural resources of the area. Second, they are interested in promoting the value of the cultural landscape and its components within the community. Given this aspect is often not included by the “voices of people outside”, the members want more people to be attracted and interested, so that the local cultural landscape and its components will continue to be preserved in the future. Lastly, they want to improve the residents’ sense of place or belonging to the community to encourage participation in *Machizukuri* planning. There also are other concerns, but we believe that these are the three areas in which the museum can make a significant contribution.

Through the regular association meetings, our focus and issues that we should be working on became clear and we started taking action. Conducting research for discovering and identifying cultural resources in the area is one of them. We are seeking to identify in particular, the cultural landscape and its components that community members value. At present, we are focusing on modern architecture in the area and finding out about the history and the current status of such buildings and their future plans by conducting interviews and so on. Both the museum staff and local association members are present when conducting such research.

Next, we share the information gathered from the research as well as our new ideas.

We have two ways of doing this. One is to share it café style (a small workshop/study group of 10 to 40 participants) and the other is symposium style (larger scale with 100 or more participants). In order to share the information we discovered with as many people as possible, we publish printed reports and make digital booklets available online.



Research to find and understand the local cultural resources



Tourist guides compiled with local *Machizukuri* associations

On the left are booklets for tourists created jointly with the local *Machizukuri* association of Aneyakoji Street. What makes these booklets different from general tourist guides is that they contain information about the cultural resources valued by the community, as well as some of the rules that the tourists are requested to follow when visiting the area, in other words, the “inner voices” of community residents. To convey further the stories and messages from the community, message boards are placed in front of shops

and houses in this area. We call this activity “*Machikado* (street corner) museum.”

When sharing information we have discovered or communicating messages, there is a risk of becoming biased if we have only our own point of view. Therefore, the museum staff and local association members visit areas outside Kyoto to exchange opinions with organisations in other areas and compare their ideas and activities with ours. The photographs shown below are of when we visited the city of Hagi in Yamaguchi Prefecture.



Message board at shop entrance (*Machikado* museum)



Study group in Hagi, Yamaguchi

Up to this point, I have described the (1) sharing of concepts and (2) specific action taken. Now I would like to introduce the last component, (3) collecting information and proposing ideas for future actions. I will be introducing an example from last year.

Last year, we held an exhibition, *Modern Architecture and Community Projects of the BUNPAKU Neighborhood*. This exhibition, as the title suggests, aimed to convey the appeal of modern architecture in this area, and it also served to showcase the fruit of collaborative work between the local communities and the museum up to that point. Part of the exhibition introduced what the local community cherishes and what sort of activities have been pursued. The exhibition, unlike typical ones in which only the museum curators are involved in developing, took on a participatory approach in which local association members took part in selecting the exhibits and displaying objects. In this way, we tried to convey the voices of the local community directly to the visitors.

The photos next page show members of the local association working on an exhibit.

The bottom left photo shows a visitor’s book. This is for the visitors to write freely their opinions and comments after viewing the exhibit. What we wanted to collect from the visitors were their opinions and comments about which buildings they thought were appropriate for or representative of Sanjo Street, based on the photographs and materials in the exhibition, the street elevation shown here, or even from actually walking down Sanjo Street. As in the bottom right photo, we provided a space for visitors to place stickers below the photographs of the buildings. We asked visitors to place stickers on the building that they thought was most representative of Sanjo Street. It was, in a way,



Participatory exhibit by members of the local association

like a popularity poll. Through this activity, the members of the local association as well as the museum staff could learn about the different impressions and images held by other people, such as tourists. Such information can be gathered through street surveys or conducting questionnaires, but they require a lot of effort. Creating an opportunity for this kind of research in an exhibition is a relatively easy way of collecting valuable data. The data collected will be passed on to the local association to serve as basic data for future *Machizukuri* activities such as landscape preservation.

This is not the only effort we are putting into future action. As a part of the collaborative project of the Agency for Cultural Affairs and the University of Tsukuba, we conducted a 3D scan of the Annex in cooperation with Leica Geosystems and Elysium so that it can be viewed in VR. If anything should happen to the Annex, accurate, laser-measured 3D digital data will become useful when repairing or restoring the building.

Theoretically, VR allows people who cannot physically visit the museum to see it and enables sharing of information remotely in a virtual space.

If the museum could “showcase” new ideas and technologies, we believe that it can help paint the future picture of local activities. By “showcasing,” we mean not just presenting the technology, but also offering an opportunity for people to actually experience how the technology can be used. This may become a new model for the sustainable use of our cultural heritage.

I would like to emphasise again that the museum can be a place for people to exchange and express diverse views. It offers an opportunity to interact with people you have never interacted with before, and it can be a place where voices that are usually unheard can be heard. Through exhibitions, people can discuss the significance of an exhibit

or discover the value of an exhibit for the community. A museum can serve as a platform for dialogue. It can also showcase new ideas and technologies, as I just mentioned. It can be a source of new ideas and inspiration for local activities. In these ways, museums can contribute to *Machizukuri*.

博物館と地域社会

－カンボジア国立博物館における地域連携の課題と展望－

チャプ・ソフィアラ

チャプ・ソフィアラと申します。カンボジア国立博物館の教育・出版室の室長を務めております。本日は私たちの博物館についてお話しする良い機会をいただき、大変嬉しく思います。本日お話しさせていただくのは、私たちの博物館におけるコミュニティ開発の課題と展望についてです。まず、自己紹介をしたいと思います。

私は2002年にカンボジア王立芸術大学(RUFA)で考古学の学士号を取得しました。卒業後、陶磁器保存修復の訓練を受け、RUFAで陶磁器保存修復士の仕事に就きました。2008年に国立博物館に陶磁器修復室が創設され、RUFAから国立博物館陶磁器修復室長に異動しました。2018年にロンドン大学東洋アフリカ学院(SOAS)でアジア芸術ディプロマを取得、2019年には同大学で美術・考古学史の修士号を取得しました。カンボジアに帰国後、陶磁器修復室長に復帰しました。最近、2020年7月に、国立博物館の教育・出版室の室長に任命されました。

今日は4部に分けてお話しします。まず国立博物館の沿革、次に博物館の主な仕事、そして博物館が地域のコミュニティを促進するにあたっての課題、最後にコミュニティ開発の展望です。

まず、私たちの博物館の沿革をご紹介します。

国立博物館は1917年に創立され、フランス極東学院(EFEO)の管轄下で1920年に正式に開館し、アルベール・サロー博物館の名称でカンボジア美術学校と併設されました。1952年に美術学校が西側の新しい建物に移転しました(現在のRUFA)。1966年に初めてカンボジア人が館長に就任しました。クメール・ルージュ体制下で博物館は閉館され、1979年に再開しました。1992年にカンボジア国立博物館と名称変更されて現在に至ります。新型コロナウイルスのため、2020年3月から6月まで3カ月間休館しました。現在、新型コロナウイルスが再拡大しているため、政府から新たな発表があるまで博物館は再び休館します。国立博物館はクメール文化を体現した国の宝です。博物館の建物は伝統的なクメール建築で、クメール様式の僧院や寺院を模した華美なデザインとなっています。4つのメインギャラリーと、4つの池を配した美しい中庭があります。

この博物館には、クメール文化遺産最大のコレクションが収蔵されています。そのほとんどは、石、木、金属、陶磁器、織物などの考古学・民族学的遺産です。合計1万7763点のコレクションがあります。それらは先史時代、プレアンコール期、アンコール期、ポストアンコール期と、6世紀から20世紀に及びます。

博物館には4つのメインギャラリーがあります。東ギャラリーには青銅器を展示しています。これらは宗教や儀式に関するもの、日用品、宝飾品です。南ギャラリーには宗教的な彫像や建築装飾が展示されています。これらのほとんどは砂岩でできています。砂岩でできた展示物は西ギャラリーにもあります。これらも宗教的な彫像と建築装飾です。北ギャラリーには木製の宗教的な彫像と建築装飾、さらにその他の陶磁器、織物、絵画、日用品の展示があります。

博物館には石材修復室、金属器修復室、陶磁器修復室、織物修復室、絵画修復室の主要な保存修復室があります。

博物館には書庫と図書室もあり、古文書、古写真、ガラス乾板、目録文書、その他博物館の仕事に関係する、考古学、保存修復、美術史の書籍があります。

では、第2部に移りましょう。第2部では、国立博物館の4つの主な仕事について簡単にご紹介します。博物館には、保存修復、展示、目録・文書作成、教育・出版という4つの大切な仕事があります。

- 博物館は、博物館自体のコレクション、州のコレクションの一部、その他の外部プロジェクトによる対象物を保存修復します。
- 展示については、2種類の展示があります。常設展示と特別展示です。博物館や他の団体が運営する特別展示の中には、他の組織や研究機関、他の個展との協力プロジェクトもあります。
- 目録・文書作成は、すべてのコレクションの目録管理、データベースへの登録、すべての重要文書の研究と保全を目的としています。
- もう一つの重要な仕事は教育と出版です。パネル情報の研究・作成に取り組み、ソーシャルメディアに投稿する記事を執筆し、書籍やカタログを刊行し、教育プログラムを作成して学校との連携を図ります。オーディオガイドやガイドツアーも提供しています。

博物館は、地域コミュニティの理解を促進するため、展示、出版、ソーシャルメディア、学校との連携という4つの主要な活動を行っています。

先ほどもお話ししたように、博物館には常設展示と特別展示という2つの展示があります。コレクションを展示する際は、種類、材質、美術史における年代、芸術様式によって分類します。小型の金属製品のほとんどは、東メインギャラリーのガラスキャビネットに展示されています。砂岩でできたプレアンコール期とアンコール期の展示物は、南ギャラリーと西ギャラリーにあります。木製品、陶器、織物は北ギャラリーに展示されています。さらに、北ギャラリーには仏教の祭壇があり、東ギャラリーのそでにも僧院のようにしつらえた仏間があって、人々が祈りを捧げ、果物、花、飲み物を供えに来ることができます。

展示ホールでは様々な特別展示が行われます。そのほとんどは、考古学研究、美術史、現代アートに関わるものです。それらの多くは他の機関によって運営されています。

出版については、博物館のリーフレット（英語版のみ）、ガイドブック、国立博物館の名作コレクションカタログ、中高生向けガイドブック、失われたバタワンバン州ミュージアムコレクション集等を刊行しています。

博物館では、ウェブサイトとフェイスブックの2つのソーシャルメディアを使っています。ウェブサイトは2013年に開設されました。博物館のすべてのコレクションに写真と情報付きでアクセスできます。ただし、英語版のみです。

フェイスブックは2016年に開設されました。博物館はこのメディアに力を入れており、博物館の古写真、博物館で行われた儀式、ギャラリー内の展示物の配置換えや研修コースなどの重要な活動について投稿しています。また、国の行事やその他の発表も投稿しています。

博物館は、公立や私立の学校と連携しています。多くの生徒が団体で博物館を訪れます。博物館のコレクションに関する高校生向けのワークショップやガイドブックもあります。博物館のスタッフは、RUFAの考古学の学生向けに保存修復の授業も行っています。学生には修復を実践する機会が与えられます。

では、第3部に移りましょう。第3部は、コミュニティとの連携を促進する主な活動の課題についてです。

国立博物館は、前述の主な活動を通じて重要な役割を果たしています。しかし、その仕事にはまだ多くの不十分な点があります。私は次のような課題があると考えます。

- 1- パネル情報が不十分：名品コレクション、各時代の歴史、展示図、その他コレクションに関する詳細情報のパネルがありません。

- 2- 展示物のほとんどは一般的な知識レベルのものです。しかし、特別なものや学校の生徒向けのものはありません。
- 3- 博物館を訪問する教育プログラムについて、学校との連携や管理が不十分です。博物館を訪れる団体の生徒数が多すぎます。生徒にすべてを説明するのではなく、生徒がもっと積極的に自己表現し、目で見た体験を掘り下げられるような課題を博物館が提供できていません。学生向けのワークショップがありません。
- 4- オーディオガイドやAVメディアが限られています。ギャラリーで上映するスライドショー、映画、ビデオやテレビが十分ではありません。
- 5- 特別な教育や活動を行う部屋がありません。
- 6- 博物館のコレクション、美術史、その他の文化遺産の話題に関する刊行物が不十分です。
- 7- 博物館の仕事や博物館のイベントに関する宣伝が不十分です。
- 8- 博物館の教育活動を宣伝するアウトリーチプログラムが不十分です。

第4部はコミュニティ開発の展望についてです。地域コミュニティからの訪問数を増やすため、博物館を発展させるビジョンをいくつか提案します。

- 1- 観客はとても重要です。観客の教育水準、年齢、嗜好、関心に合ったパネル情報をもっと作成するべきです。
- 2- 展示物のコンセプト、デザイン様式、材質、設置についてもっと発展させるべきです。展示物だけでなく美術作品を選び、もっとカタログやガイドブックを作成するべきです。
- 3- 博物館は、学校向けプログラムを管理し限定するべきです。それには、公立や私立の学校と共に年間の計画やプログラムを設定し、1団体の生徒数を20～30人とし、博物館訪問時に何らかの筆記作業を提供します。特に、博物館に特別展示がある期間は、実地見学を提供します。
- 4- 学生や地元住民には無料または低料金でもっとオーディオガイドを提供し、デジタルタッチスクリーンでAVメディアを提供します。
- 5- コレクションのレプリカや本物の工具を使用する体験型実習室を設置します。例えば、古代文字の筆記用具や、伝統工具を使ったり、伝統衣装を着たり、考古学調査実習、その他競争ゲームなども含まれます。来館者は、実際に体験することで様々な展示品とのつながりを感じることができ、博物館はこの活動を通して観客と深く関わるができます。
- 6- 専門家(職人、芸術家、技術者、修復士)を招待し、彼らの技術を紹介するイベントを増やします。製作した作品や創作物を周知し、美術館で展示販売するよう彼らに依頼します。これは彼らの作品を紹介し、収入増につなげる機会を支援することにもなります。
- 7- 博物館は、多様な知識レベルに応じたコレクションや美術史に関する刊行物を増やすべきです。博物館はそれを学校、図書館、他の州立博物館と共有できます。
- 8- バスやバンを使ってアウトリーチプログラムを促進します。移動展示、移動図書館などの博物館活動を促進し、博物館を訪れることができない人々に提供します。

ここで提案した展望のうち、3、5、6、8は特に地域コミュニティの参画を促すだろうと考えています。

スライド23では、日本の沖縄県立博物館の体験室の例をご紹介します。この部屋には、伝統的工芸品のレプリカがあります。伝統衣装を製作するための絹素材や、子ども向け伝統工芸品、様々な地層の発掘作業の紹介、パズルゲーム、伝統食などがあります。道具のほとんどは子どもたちが試してみることができます。

スライド24のように、地元の職人を博物館に招へいし、オーガニックマットの手織り、オーガニックかご、絹、土器製作、銀製品の製作などの実演を依頼したいと考えています。

これで本日のプレゼンテーションを終了します。ご静聴ありがとうございました。

Museum and Local Community: Challenges and Prospects for Community Developing of the National Museum of Cambodia

CHAP Sopheara

My name is Chap Sopheara. I work as the Chief of Education and Publication Office at the National Museum of Cambodia. Today, I am very happy that I have a chance to talk about my museum. The presentation I am going to give today focuses on the challenges and prospects for community developing in my museum. Before I start my topic, I would like to introduce myself to all of you.

I received my BA in Archaeology at the Royal University of Fine Arts (RUFA) in 2002. After I graduated, I got ceramics conservation training and worked as a ceramics conservator in RUFA. In 2008, after the National Museum created a new ceramics lab, I moved from RUFA to work as the head of the ceramics lab at the museum. I received a Diploma in Asian Arts from SOAS, University of London, in 2018. In 2019, I received my MA degree in History of Art and Archaeology at the same university. After I returned to Cambodia I became the head of the ceramics lab again. Recently, in July 2020, I was selected as Chief of Education and Publication Office in the museum.

My talk today has four sections. They are: my museum's background, the main functions of the museum, the challenges faced by the museum in working with the local community, and proposals for community development.

First, I am going to start with my museum's background.

The National Museum was created in 1917 and was officially opened in 1920 under the control of EFEO, and was named Museum of Albert Sarraut. The museum was created along with a school of Cambodian arts. In 1952, the school of arts moved to a new building to the west (now RUFA). In 1966, the first Cambodian director was appointed. During the Khmer Rouge regimes, the museum was closed down, but it reopened in 1979. In 1992, the museum was renamed the National Museum of Cambodia. Because of COVID-19, the museum was closed for three months from March to June 2020. Nowadays, the COVID-19 spread seems to be increasing again, so the museum will remain closed again until a new announcement from the government.

The museum is a national treasure of Khmer culture. The museum building features traditional Khmer architecture with rich designs copied from Khmer monasteries and temples. There are four main galleries and beautiful courtyards with four ponds.

This museum houses the largest collection of Khmer cultural heritage objects. Most of them are archaeological and ethnographical objects, including stone, wood, metal, ceramics, and textiles. In total, there are 17,763 objects. They are from the Prehistoric period, Pre-Angkor period, Angkor period, and Post-Angkor period, which range from the 6th to 20th centuries.

There are four main galleries in our museum. The eastern gallery exhibits bronze objects. Those are objects related to rituals and religion, common daily use objects, and jewelry. The southern gallery displays religious statues and architectural ornamentation; most of these objects are made from sandstone. The sandstone objects are also exhibited in the western gallery. They are religious statues and architectural ornamentation. The religious statues and

architectural ornamentation made from wood, and other ceramics, textiles paintings, and everyday objects are placed in the northern gallery.

We have major conservation laboratories, such as the stone lab, metal lab, ceramics lab, textiles lab, and painting lab.

And we also have archives and a library with old documents, old photos, glass films, inventory documents, and other books related to the museum's work, archaeology, conservation, and art history.

Now, let us move on to the second section. In this section, I am going to talk briefly about the four main functions of my museum. There are four important areas of work in the museum, which are: conservation, exhibition, inventory and documentation, and education and publication.

- The museum conserves its own collection, some provincial collections, and other objects from external projects.
- Regarding exhibitions, we have two kinds of exhibitions. They are permanent and temporary exhibitions. Some temporary exhibition projects of the museum are initiated in cooperation with other organizations, research institutes, and other private exhibitions.
- Inventory and documentation focuses on the control and management of the inventory of all collections, registration in the database, and study and preservation of all important documents.
- Another important area of work is education and publication, which includes doing research and writing panel information, writing articles for posting on social media, publishing books and catalogues, creating education programs, and school-related work. We also provide audio and human guides.

To encourage the appreciation of local community, the museum has four main activities: exhibition, publication, social media, and school connection.

As I mentioned before, the museum has two types of exhibitions—permanent and temporary. We display the collections by grouping objects according to type, materials, chronology, and art style. Most of the smaller metal objects are displayed in glass cabinets in the main eastern gallery. The Pre-Angkorian and Angkorian objects made from sandstone are kept in the southern and the western gallery. Wooden objects, ceramics, and textiles are exhibited in the northern gallery. Moreover, in the northern gallery we have a Buddhist space, and there is a Buddhist room in a wing of the eastern gallery; it is designed like a Buddhist monastery where people can come to pray and offer fruits, flowers, and drinks.

We have many temporary exhibits in the exhibition hall. Most of them are related to archaeological research, art history, and contemporary art. They are processed mostly by the other institutes.

Regarding publication, the museum publishes leaflets, but they are only in the English language. Other publications are guidebooks, catalogues of the collection of masterpieces in the museum, a guidebook for high school students, and objects missing from museums in Battambang Province.

The museum uses social media on two platforms, the museum website and Facebook. Our website was created in 2013. On the website, users can access all the museum collections with photos and information. However, the website is only in English.

The Facebook profile was created in 2016. The museum is active on this platform; we post old photos of the museum and updates about ceremonies in the museum and important activities such as changes of the objects on display and training courses. We also post about national events and other announcements.

The museum has connections with the government and private schools. Many students come to visit the museum in large groups. We also have a workshop and a guidebook about the museum collection for high school students. The museum staff also teaches the conservation course to archaeology students from RUFA. The students have a chance to practice in the labs.

Now, in the next part, I will tell you about the challenges related to the main activities undertaken for community outreach.

The national museum plays an important role through the main activities that I mentioned above. However, there are still many gaps in these efforts.

Some of the challenges I have found include:

- 1– Lack of panel information: We don't have a panel for the masterpieces collection and history in each period, display plan, and other specific information related to the collection.
- 2– Exhibitions mostly provide a general level of knowledge. However, there are none special or suitable exhibitions for schoolchildren.
- 3– Lack of school connections and management of education programs for school children visiting the museum. There are too many students in the groups visiting the museum. The museum does not give assignments to students that allow them to be more active, express themselves, and explore the experience of what they saw, instead of explaining everything to them. There are no workshops for students.
- 4– Limited supply of audio guides and audiovisual media. We do not have enough slideshows, films, and video/TV to show in the gallery.
- 5– There is no special education and performance room.
- 6– Not enough publications about the museum collection, art history, or other cultural heritage topics.
- 7– Lack of promotion of museum services and events.
- 8– Lack of outreach programs to promote the museum's educational offerings.

The last section is about proposals for development.

I propose a vision for developing the museum in order to attract more visitors from the local community.

- 1– The audience is very important. We should create more panel information that can be understood by visitors of different ages, having different education levels, tastes, and interests.
- 2– The exhibition and display should be further developed in terms of concepts, design system, materials, and installations. We should exhibit not only objects but also works of art and write more catalogues or guidebooks.
- 3– The museum should manage and limit the school programs by setting up and arranging the plan or program for a year with government and private schools. It must arrange the student visitors into groups of 20 to 30 students and provide them some paper works during the museum visit. We should schedule field/study trips especially when we have special exhibitions in the museum.
- 4– Provide more audio guides with no or low charges for students and local people. Provide audiovisual media on digital touchscreens.
- 5– Create a hands-on and performance room with either replicas or authentic versions of tools and objects from the collections, such as ancient letter writing material, traditional craft tools, and traditional clothes. Archaeological research conservation practices and other competitive games should also be

included. Hands-on experience will provide visitors with a sense of connection with different objects and help the museum engage deeply with the audience.


- 6— Organize more educational demonstrations by inviting experts (craftspeople, artists, technicians, restorers) to show their skills and products from the village to display and sell in the museum. This will give them a chance to present their work and increase their family income.
- 7— The museum should have more publications related to the museum collections and art history with different levels of information. The museum can share them with schools, libraries, and other provincial museums.
- 8— Use buses or vans to promote museum activities such as mobile exhibition and mobile library. Provide transportation service to people who are unable to visit the museum.

Out of all the ideas that I have proposed, I think numbers 3, 5, 6, and 8 could be the most successful in empowering the local community.

In this slide²³, I would like to show an example of the hands-on room in Okinawa Prefectural Museum in Japan. In this room, you will find replicas of tools and objects from traditional cultures; there are silk materials to produce traditional clothes, traditional craft work for children, archaeological excavation shows with different soil layers, puzzles, games, and traditional food. Most of the tools can be used by the children.

In this slide²⁴, I want to show some objects made by local Cambodian craftsmen. We invite them to show their products and their craft skills such as weaving organic mats, creating organic storage, producing silk, making pottery, and making silver objects in the museum.

This is the end of my presentation. Thank you.



Museum and Local Community

Challenges and Prospects for Community Developing of the National Museum of Cambodia

Ms. Sopheara Chap
 Chef of Education and Publication Office
 National Museum of Cambodia
 November 2020

1




Sopheara Chap
 Chef of Education and Publication Office
 National Museum of Cambodia
 Contact details: chhsopheara@yahoo.com
 Tel: (855) 12 956 454

2

- 2002: BA in archaeology from the Royal University of Fine Arts (RUFA).
- 2002 - 2003: Received training in ceramics conservation
- 2004 - 2007: Ceramics conservator in RUFA.
- 2008 - 2016: Head of ceramics Conservation laboratory in the National Museum of Cambodia.
- 2016 - 2018: Diploma in Asian Arts at SOAS, University of London.
- 2018 - 2019: MA in History of Art and Archaeology at SOAS, University of London.
- 2019 - June 2020: Head of ceramics Conservation laboratory in the National Museum of Cambodia.
- July 2020 - Present day: Chef of Education and Publication Office in the National Museum of Cambodia.

3




The eastern in front view of the museum.

National Museum of Cambodia

4

- 1917: French governor general of Indochina arranged George Groslier set up and managed a new museum along with a school of Cambodian Arts.
- 1920: Official inauguration, named Museum of Albert Sarraut, under the control of the École française d'Extrême-Orient (EFEO).
- 1952: The School of Art moved to a new building to the west (now the Royal University of Fine Arts).
- French controlled the Museum until 1966, the first Cambodian director was appointed as a head of Museum.
- 1975 - 1979: Museum closed in the Khmer Rouge regime.
- 1979: Museum reopened renaming Museum of Art and Archaeology.
- 1992 - 2020: Museum changed to the name National Museum of Cambodia
- March - June 2020: Museum closed, the COVID-19 widespread, reopened in June. Museum is going to closed from today until the new announcement.

5



The inside view seeing from the west to the east.

- National treasure of Khmer Culture, traditional Khmer architecture with in rich designs: beautiful interior courtyard with 4 ponds, beautiful designs on the doors and windows in the principal hall copied from Khmer monasteries and temples. It has four permanent galleries exhibition.
- House the greatest in the thousand collections of Khmer cultural heritage: archaeological and ethnographic objects (stone, wood, metal, ceramics and textile), in total 17,763 objects. The objects are from the prehistoric period, Pre-Angkor period (6th - 8th Century), Angkor period (9th - 15th Century) and Post-Angkor period (16th - 20th Century).

6

- Collection display: 1- Eastern gallery (Bronze objects: religious, everyday life, jewelry and ritual objects)
- 2- Southern gallery (religious statues and architecture ornamentation made from sandstone)
- 3- Western gallery (religious statues and architecture ornamentation made from sandstone)
- 4- Northern gallery (religious statues and architecture ornamentation made from wood. Textiles, ceramics and everyday life objects)



7

- Conservation laboratories: stone, metal, ceramic, textile and painting.



1 & 2 : Stone lab
 3 & 4 : Metal lab
 5 : Ceramic lab
 6 : Painting lab
 7 : Textile lab

8

Archive and Library:

house the old documents, old photos, glass film, inventory documents, books involved with museum's work, archaeology, conservation and art history.



The archive room



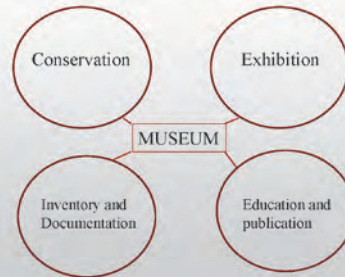
The library



The reading table

9

Main works of Museum



10

- **Conservation:** museum collection, provincial collections, other objects from outside museum.
- **Exhibition:** permanent and impermanent exhibition (museum, cooperation and private exhibition).
- **Inventory and Documentation:** control and manage the inventory of all collections, register in database, research and preserve all the important documents.
- **Education and publication:** research, develop the panel information, writing the articles for posting in social media, publish some books and catalogues, school connection, audio guides and human guides.

11

Museum activities to encourage the appreciation of local community

- Exhibition
- Publication
- Social media
- School connection

12

Exhibitions: permanent and impermanent



The eastern gallery



The southern gallery



The western gallery

Permanent exhibitions



The northern gallery



The Buddha place for pray and offer some fruit and drinks



The room with many of Buddha statue display in the original context as in the monastery

13

Impermanent exhibitions



14

Publications: leaf flat, catalogues collection and guide books.



The Museum's leaf flat



Guide book



The catalogue of master collection in the Museum



The guide book for high school student



The missing objects from museums in Battambang province

15

Social media: Website and Facebook



www.cambodianmuseum.info
Created in 2013.



National Museum of Cambodia
Created in 2016

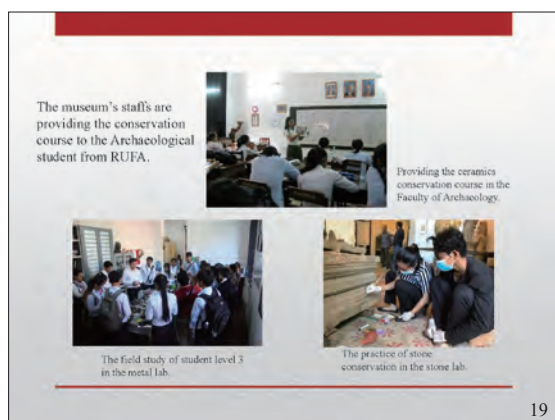
16



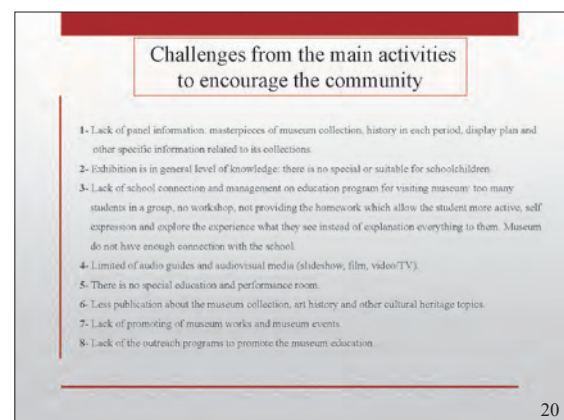
17



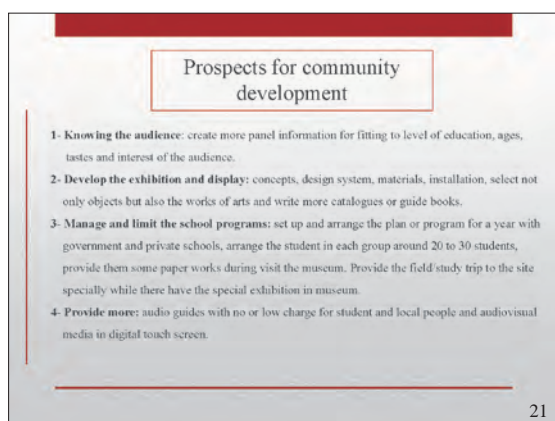
18



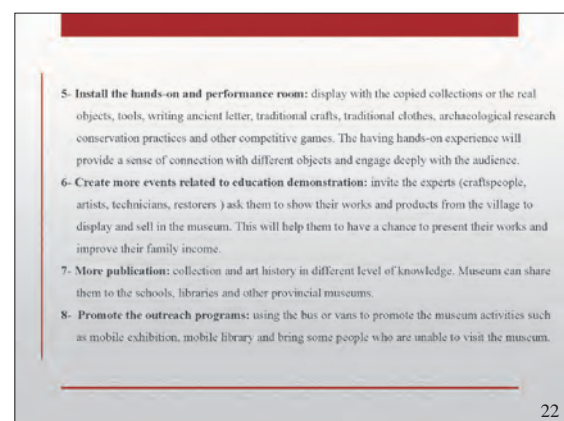
19



20



21



22



23



24

សូមអរគុណ
Thanks

25

エコミュージアムのローカライゼーション －地扨侗族人文生態博物館の17年間の実践－

レン・フーシン

本日はこのような講演の機会をいただき嬉しく思っています。「エコミュージアムのローカライゼーション－地扨侗族人文生態博物館の17年間の実践－」と題して、お話しさせていただきます。

私はレン・フーシン（任和昕）と申します。地扨侗族人文生態博物館の創設者であり、館長を務めています。また、中国西部文化生態スタジオ（香港）で事務局長、復旦大学の国土と文化資源研究センター村落遺産と生態博物館研究所で客員教授も務めています。

2002年に貴州省に戻り、中国の西部地域における文化保護と農村発展に目を向けるようになりました。私のこれまでの約20年にわたる主な足跡をスライド2にまとめています。

取り組みのスタートは2003年に遡ります。

- －「文化保護および農村発展」に関する黎平県人民政府の公式顧問に就任。
- －地扨侗族人文生態博物館を創設。地扨侗族人文生態博物館は、中国において唯一の非営利かつ民間のエコミュージアムであり、農村コミュニティの保護、活用、発展を促進する機能を果たしています。
- －貴州省における農村の景観と建築に関する研究機関を創設。この機関は、農村における建造物建築技術、広大な農村地域におけるコミュニティ、および近代社会における農村の持続可能な実践事例の調査研究を目的としています。

2013年以降では、

- －中国国家文物局公認の、伝統的な地扨村の包括的な保護と利用に関する地元専門家という立場から、一つのモデルとして、「農村の有形・無形遺産を再度見出し、体系的に収集、再評価することによる現場での包括的な保護。そして、都市部の人々と広大な農村地域の住民間の双方向のコミュニケーションと交流の促進。その過程で生じた価値の交換によって、経済的効果がもたらされ、精神的支えの強化につながる」という点を示しました。

2018年に開始した活動は次の通りです。

- －エンパワーメント：伝統的知識を保存し、何世代にもわたり継承させていくことを目的とした地扨村学校を共同設立。侗族の共通知識の文書化や記憶の記録などによって、急速に広がる近代化やグローバル化の中でそれらを消滅させることなく、再生・発展させる能力を与える活動。
- －3つに体系化：地元固有の知識、生活の知恵、精神的世界に体系化。
- －ムーブメント：大学生や独立したデザイナーを中心に、農村に関するテーマに関心のある都市部の若者世代に対して、地扨村学校で学び、様々なプロジェクトに携わるよう促す活動

地扨侗族人文生態博物館は、従来型の博物館とは全く違います。厳密に言うならば、現存する侗族文化コミュニティ全体が博物館であるといえます。スライド3にその区域の全体地図を示しました。エコミュージアムは、

- 2005年1月8日に設立、正式発表されました。
- 地元コミュニティが中国西部文化生態スタジオ（香港）と共同設立した共有資産です。
- 中国初となる民間のエコミュージアムです。
- 指定場所や建物などの枠を定めていません。侗族文化保存地区全体が地塹侗族人文生態博物館です。侗族文化保存地区は、15の行政村、46の自然村を含んでおり、総面積172平方キロメートルで、総人口2万人です。
- 非営利組織で、文化遺産を管理するためのドキュメントセンターとして機能しています。
- 地元コミュニティは現在も、良好な状態の侗族の文化遺産を維持しています。有形文化遺産としては、鼓楼、花橋（風雨橋）、穀倉、古代の井戸、古代の道、伝統的な住居と樹木など、また、無形文化遺産としては、侗族の方言、侗劇、侗族大歌、手すき紙、染色布、刺繍、食文化、伝統的な祭りなどが挙げられます。

1970年代に誕生したエコミュージアムの概念は、博物館の新たな概念というだけでなく、新しい管理の在り方を示しています。自然景観、生活、生産方式、そして民間伝承を包括的な形で保護するために、人、生態系、文化が調和した環境の中での、あるがままの、地元住民による精力的な保護を重要視しています。

エコミュージアムと従来型の博物館の主な違いは、従来型の博物館では、特定の建物や場所に特定の古代文化遺産を保存していますが、エコミュージアムにそのような縛りはまったくありません。エコミュージアムは、文化遺産だけでなく、文化を生み出した環境も保護するため、管理への地元住民の参加が極めて重要となります。中国国家文物局が示している定義では、「エコミュージアムとは新たな博物館の形である」とされています。

さらに、「特定の地域の伝統的文化と生活環境を、現地の景観、村の構成、生活および生産慣行を通して紹介する。これにより、その地域の人々の文明化の発展過程を現地で確認・理解することができる。保護と徹底した管理には、地元住民の参加が必要不可欠となる。農村におけるエコミュージアムは、文化遺産の保護、そして地元コミュニティの発展に、より重点が置かれる」とされています。

中国とノルウェーとのエコミュージアムの設置に関する共同プログラムの中で、考案されたのが次の「運営ガイドライン」です。

1. 村民がその村の文化の真の所有者である。村の文化を解釈し、自ら実証する権利を有する。
2. 文化の意義とその価値は、知識を基にした理解と解釈によってのみ、明確に定めることができる。文化能力の向上を図らなければならない。
3. エコミュージアムにとって、公衆の参加が極めて重要である。文化は共有される民主的な資産であり、民主的な形で管理されなければならない。
4. 観光と文化保護の間に利害の対立が生じた場合には、文化保護が常に優先されなければならない。文化遺産自体は売り渡してはならないが、伝統工芸を基にした質の高い工芸品の生産は奨励すべきである。
5. 長期的観点からの包括的な計画が極めて重要である。長期的に見て文化を損なわせる短期的な経済利益は、回避しなければならない。
6. 文化遺産の保護は、全体的な環境保全への取り組みに組み入れなければならない。この点において、伝統的技術と材料が極めて重要である。
7. 訪問者には、敬意を払った行動をとる道徳的義務がある。訪問者に対して行動基準を示さなければならない。

8. エコミュージアムに関しては絶対的な指針とすべきものはない。対象地域の独自の文化と状況に応じて、対応していく。
9. 社会発展は、現存するコミュニティの中にエコミュージアムを設立する際の必須条件である。伝統的価値を損なわない形で、住民の福祉を向上させなければならない。

それでは最初に、地扨侗族村の景観などを写真で簡単にご紹介したいと思います。(スライド6～28)

さて、地扨侗族人文生態博物館の日常業務は、スライド29に示すような8つの部門で構成されています。記録、情報の保存、研修と共有、調査、地域でのエンパワーメント、コミュニケーションと情報発信、活用と再生、コミュニティの発展促進です。

エコミュージアムを説明する際、3つの点からお話することがあります。1つ目は、新しい概念であり、新しい管理の在り方であるということ。2つ目は、自然環境、文化的環境と、住民の生活および生産方式を伴った現存する生活の場としての地域全体が博物館であるということ。3つ目は、非営利であり、地元コミュニティを対象とした公益組織であるということです。

現在、地扨侗族人文生態博物館には、スライド30に示すような主要な役割を担う5つの部門があります。

1. 村落文化コミュニティ：地扨村と登岑 (Dengceng) 村を中心とした近隣農村で構成されている侗族コミュニティ
2. ドキュメンテーションセンター：コミュニティのアーカイブ (記録保存所) / 情報データベースの管理
3. 文化継承センター：侗族大歌と侗劇の研究 / 地扨村学校 (地扨教育機関)
4. リサーチ・コミュニケーションセンター：指導・学習の実践 / リサーチ・コミュニティブース
5. コミュニティ開発研究所：地元の特色あるアグリビジネスの育成と促進

です。私たちが取り組んでいるこれらの役割から、地扨侗族人文生態博物館の使命を次の3点にまとめることができます。すなわち、

保護－農村文化の保護と育成。具体的には、記録、文書化、継承、調査、発信や促進など。

活用－農村の再活性化。コミュニティの自然および文化資源を基に、共同経済グループを組織し、特色あるアグリビジネスを育成すること。

発展の促進－農村の整備 / 修繕。地元住民の生活および生産状況の改善に基づいた、コミュニティの維持・管理、環境改善、インフラ整備と建造物の再建など。

です。

私は、長年の実践経験から、コミュニティの文化保護と育成における基本原則を、次のように考えています。

1. 持つべき視点：農村の発展と移行を促進するというエコミュージアムの役割は、農村地域の原景観の保全、再生可能な農業開発、地元の伝統技法・技術の継承を前提とする。また、農村の整備は、少数民族コミュニティの原風景や伝統的な生活様式および生産活動、そして、その土地独特の美しい自然環境に重点を置くべきである。
2. スローライフと生活の質を両立：いつの日か、スローライフと質の高い生活が両立した田舎暮らしを満喫するという考えは、中国人の誰しもが追い求める人生の理想の一つである。したがって、観光者と地元住民の双方を対象とした生活の質の向上を考慮することが非常に重要となる。同時に、環境への配慮、自然の尊重、中国の伝統文化の向上が必要とされている。

3. ホスト（所有者）を尊重する：農村コミュニティこそが、その生活様式や文化の主体（所有者）である。自分たちの文化をどう発展させていくのかを決めるのは、彼らの有する当然の権利である。外部のいかなる者も、その所有権を尊重するとともに、千年もの間、何世代にもわたって継承されてきた農村住民たちの文化に対し、敬意を払わなければならない。
4. 変化に対して合理的に対応する：生活様式と文化は、人々の生活状況から生まれるものである。現在の近代化とグローバル化の波の中、変化は不可避である。元来の不変の伝統を残していくことは、さらに議論が必要な課題ではあるが、現実に対して合理的で適切な姿勢をとるべきである。
5. 権利と利益：地元住民にもまた、理想である近代的で質の高い生活を追求する権利がある。地元農村住民が最優先されなければならない。包括的な発展と住民の幸福が極めて重要である。
6. 観光に依存および期待しすぎない：再生可能な経済発展は、自然生態系を基盤としている。技能や技術だけでなく、自然に配慮したアグリビジネスを育成する。

エコミュージアムの取り組みの目的は、地元住民を対象としていますが、そこには3つのビジョンがあると考えます。「認識、承認、自尊心」です。このビジョンを達成するために、4つの機関を設置しました。

1. 村落ドキュメントセンター：情報データの収集・保存
2. 歴史アーカイブ：村の歴史、一族の言い伝えと系譜図の保存
3. 地扨村学校（地扨教育機関）：村に関する知識、先人の知恵、精神的体系を学ぶ
4. 創造的活動のための村落協会：見だし、再評価し、交換する

「村落ドキュメントセンター」には、3つの役割を与えています。すなわち、

- －情報データベース：オフラインのハードウェアとオンラインのクラウドストレージでの保存
- －コミュニティの公共ファイル：村落ファイル、学校ファイル、村落クリニックファイルの保存
- －コミュニティの家族ファイル：家族と一族の活動に関する記録の保存

です。

「歴史アーカイブ」では、村の歴史－村およびコミュニティの歴史、一族の歴史－一族および各家族の歴史、の文書化に取り組んでいます。

スライド36の写真は地扨村学校です。別称で地扨教育機関とも呼ばれています。ここでは、

- －侗族大歌および侗劇の継承計画：侗族大歌と侗劇の継承のため、週に1日の練習
- －侗族の技術と伝統的手工芸の習得計画：伝統的技術実践のワークショップ
- －主要な祭りの支援計画：祖先をあがめ敬う日、旧暦6月6日の新米お食い初め祭、などの祭事の支援
- －地元の風習継承計画：例えば、侗族の言葉で「YUE HAI」という地元の社会的営みの継承

といったことに取り組んでいます。

「創造的活動のための村落協会」について興味をもたれた方もいらっしゃるのではないかと思います、これから詳しくご説明していきます。これは、スローライフのスタイルを促進するもので、中国の伝統的な生活方式を取り入れるよう人々に提案するものです。これによって、農村地域の生活環境のみに基づいた、新しいタイプのコミュニティを生み出します。これを実現させるために、ここでは3つのプロジェクトを行っています。

1. 地方マーケット：都市部の家族と農村の家族が手を取りあうことにより、これまでのホスト（もてなす側）とゲスト（もてなされる側）の関係性をより良いものにしていくプロジェクトです。
2. 農業従事者と職人：農産物、オーダーメイドの手工芸製品とサービス、デザイナーの限定製品な

どを生み出していくプロジェクトです。

3. 理解を深める農村ツアー：伝統文化の学習と地元フォークロア体験（伝統音楽、民俗衣装、伝統工芸などに関わる体験）の機会を提供するプロジェクトです。

はじめに「地方マーケット」についてお話いたします。主に下記の3施設に分別されます。

1. 村の地場産品取扱所：地元の生産物売買に関する販売プラットフォームを作成
2. 村の共同施設：製品の注文を受けるアグリビジネス協会
3. 村の個人店舗：自営業者と個人のオンラインショップ

また、都市と農村間の共同取り組みとして、「Hands Together プログラム」があります。

- －地塀侗族村の住民は、自然の恩恵を受けた生活様式で暮らしています。「ファーム・トゥ・テーブル（農場から新鮮な野菜が直接食卓へ）」、「自然の恩恵を受けた素材から作られた織物を大切に使う」など、シンプルでありながら意義のある考え方が、ペースの速い生活スタイルを余儀なくされる都市部の人々に徐々に受け入れられています。
- －自然の恵みを受けた食料や素材、生産品を都市に住む人々も享受できる機会を提供するための場を作る取り組みです。
- －関係者による相互の取り組みによって、このプログラムから得られる農村の住民の収入が、都市部の労働力として得られる収入を上回るようになり、それを受けて徐々に、若年層が故郷の農村に帰ってきたいとの思いを持つようになることを期待しています。そうなれば、侗族文化保存地区の包括的な保護を継続することが十分可能となります。
- －エコミュージアムは、現地住民が都市部のニーズに応えられるよう、全プロセスのモデルを示し、トレーニングを実施し、指導役を務めること、そして、地元の知識を適切に紹介することにより、都市部の関心と深い認知を得ることによって、都市部の家族と農村の家族を結ぶ懸け橋となります。

次に、2つ目の「農業従事者と職人プロジェクト」についてお話いたします。これは、オーダーメイドの手工芸製品とその販売サービスに関するプロジェクトです。下記3種類の製品で構成されています。

1. 農産品
2. 地元職人の伝統工芸品
3. デザイナーの独創的な作品：デザイナーの創造性と伝統的な要素を組み合わせた製品

エコミュージアムは、村外の人々に対し、伝統的オーセンティックな面が多く残る村のすべての側面へ深くアクセスできる機会を提供しています。そのため、村落協会では、政府部門、専門職団体や個人からの支援を受けて、利害関係者間での相互交流の促進を目的とする活動拠点を設置しました。優先されるのは、伝統的な製法と技術です。

環境に配慮した手法や精神は、近代社会における農村の持続可能な発展を実現しようとしています。地元コミュニティに対して、その固有の技能や伝統的な技術を最大限にクリエイティブ産業に活かすよう奨励しています。

地元手工芸ワークショップは、生産技術に関連する保護プロジェクトであり、伝統的手すき紙製作技術、機織り技術、紡績・布の染色の技術など、住民の技能と技術に焦点を当てています。村の住民に対し、自宅に製作場所を確保し、最新のデザインと伝統技能を組み合わせた「オーダーメイド」の製品を作るよう奨励します。

国際的デザイナーラボは、国内外のデザイナーがコミュニティを訪れ、十分に視察できるよう支援するとともに、現地で高い技術を持つ地元住民と緊密に作業できるよう促すことで、デザインと技術の両面に

刺激を与えることができます。デザイナーが訪れることにより、村側は実用面を高めることやコンセプトなど最新のファッション情報に通じることができます。一方、デザイナーは、素材についてその性質や特質に至るまでを知ることができます。価値の交換は地元のクリエイティブ産業の育成につながり、コミュニティ全体の収入を向上させます。

近年、私たちが実践してきた事例を、スライド42~50で紹介します。

これまでの説明でお分かりかもしれませんが、現在に至るまでずっと自問している問いがあります。地塀村で活動を始めたその日から答えを求め続けている「ホスト（所有者）は誰なのか」という問いです。

1. その文化のホスト（所有者）は誰なのか：農村は都市化され、その両者が同化されつつあります。都市の文化の影響下に置かれ、行楽地・観光地化や商業化が進み、そして農村としての機能が失われていっています。
2. 離村と都市からの帰郷：農村の住民は村の外の世界に出ることに関心を持ち、都市に住む人々の中には故郷の村に帰りたいとの思いを持つものもいます。
3. 近代化 対 地方性（ローカライゼーション）：近代化はすべての人の環境を変えます。地方性の喪失は、伝統的村落やそれらが包括する様々な記憶（伝統技術、行事、宗教、音楽、自然など）の消失を意味します。

17年が過ぎた今でも、「その文化のホスト（所有者）は誰で、誰がその文化を創り出すのか」という問いの答えは見つかっていません。

スライド53の写真は、2005年1月8日、地塀侗族人文生態博物館の開館式の壇上で、村を代表する長老20人が、エコミュージアムの開館を発表する場面です。

ジレンマを感じる課題は、村の住民と村外に住む人々の間の相互影響です。村の住民は大都市に行きたいと考え、都市に住む人々は帰郷し伝統的な生活様式で暮らしたいとの考えを持ちます。村の住民は都市の経済的に豊かで消費する生活に強いあこがれを持ちます。そして、外の世界に出たいと考えるのです。都市に住む人々は昔の田舎の風景をイメージとして頭の中に思い描きます。そして、故郷に戻りたい、その文化や精神的世界に戻りたいと考えるのです。

また、近代化と地方性の相反する関係性の影響は、エコミュージアムにとっても課題です。農村は急速な変化の影響を受けており、生活のペースが加速することは避けられません。近代化はすべてを変えます。都市に住む人々は、スローライフの生活スタイルを追い求めますが、実際には不可能といえます。結果、地方性を喪失し、そこに備わっていた記憶が失われ、歪曲した記憶が生じます。

最後に一言申し上げます。「だれにも、どのように現在の姿になったのか、過去100年の変遷について詳細に記すことはできない。しかし、エコミュージアムの取り組みによって、取り組み開始時点から100年間にわたる変遷を記録に残し、理解していくことはできる。村落の記録保存に終わりはない、あるのは始まりのみ。」

ご清聴ありがとうございました。

Localization of Ecomuseum: 17 Years Practice of Dimen Dong Ecomuseum

REN Hexin

I am happy to share this presentation with you.

My topic today is “Localization of ecomuseums in China: The 17-year practice of Dimen Dong Ecomuseum.”

My name is Ren Hexin, I am the founder and director of Dimen Dong Ecomuseum. I am also the Secretary General for Western China Cultural and Ecology (Hongkong) Studio, and a Guest Professor at the Institute of Village Heritage and Ecomuseum, in the Center for Land and Cultural Resource Research, Fudan University.

I returned to Guizhou Province in 2002, where I started paying attention to cultural preservation and village development issues in western China. The key milestones of my nearly two decades of work are detailed in this presentation (slide2).

Starting in 2003

- Official consultant at the Liping county government, focused on “cultural conservation and village development”
- Founder of the Dimen Dong Ecomuseum, which is the only non-governmental, nonprofit organization of its kind in China. Its purpose is the conservation, utilization, and development of village communities.
- Founder of the Institution of Rural Landscape and Construction Research in Guizhou province. Its aim is to study the construction knowledge of villages and communities in vast rural areas and its sustainable practice in the modern society.

Since 2013

- The official local expert, acknowledged by the National Cultural Heritage Administration, on the subject of holistic protection and utilization of the traditional Dimen village.
- Gave the following statement regarding in-situ and dynamic conservation: By “re-finding and systematically collecting a village’s tangible and intangible assets, the re-evaluation can encourage a two-way communication-exchange process between cities and vast rural areas. This exchange process can economically support the reinforcement of a kind of “spiritual sustenance.”

Beginning from 2018

- Empowerment: Established and co-founded the Dimen village school, with the purpose of preserving and spreading traditional knowledge across generations. By documenting the common knowledge, recording memories, etc., we can empower the preservation, recreation, and growth of this knowledge and skills, rather than allowing them to vanish in the wave of rapid urbanization and globalization.
- Three Systems: Native or traditional knowledge; wisdom of life; and the spiritual world.
- Movement: To encourage the younger generation, mainly university students and independent designers, or anyone from cities interested in rural subjects, to study in village schools and become involved in different projects.

The Dimen Dong Ecomuseum is not a traditional museum. It is a dynamic living cultural community of the Dong ethnic group (slide3). Some facts about the ecomuseum are given below.

- It was established by official announcement on January 8, 2005.
- It was co-founded by, and is a shared asset with, local communities and the Western China Cultural and Ecology Studio (of Hongkong)
- It is the first ecomuseum in China to be a non-governmental organization.
- It is no longer housed in a designated space or building. The Dimen Dong Ecomuseum is a Cultural Conservation Zone of the Dong ethnic group. It covers an area of 172 square kilometers and has a population of 20,000, which includes 15 administrative villages home to 46 natural communities.
- It is a non-profit organization and serves as a document center to manage cultural assets.
- The local communities still process the Dong ethnic-minority group's tangible cultural assets, which includes: drum towers, flower bridges, rice barns, ancient wells, ancient roads, traditional residences and trees. The intangible culture is visible in their language, Dong drama, Dong songs, hand-made paper, dyed cloth, sewing, food and beverage, traditional festivals, etc.

The concept of the ecomuseum originated in the 1970s. It is not only a new concept in museology but also a new way of management. In ecomuseums, the in-situ, dynamic preservation of local people themselves is achieved in a harmonious environment consisting of human beings, ecological systems, and culture. This is a holistic approach to preserving natural landscapes, lifestyles, and production methods, as well as folklore. The major difference between ecomuseums and traditional museums is: Traditional museums keep certain ancient remains in specific buildings or spaces, while an ecomuseum is not bound by such limitations. It preserves not only the cultural heritage, but also the environment the culture comes from. The participation of local residents in management is vital. I now share the definition suggested by the Chinese National Cultural Heritage Authority Ecomuseum, which is a form of new museology:

Presenting traditional cultures and ecological environments of certain communities, through the indigenous landscape, village layout, living and production habits, to observe and understand those groups on-site in their own surrounds. The participation of local residents is a must for protection and management. Ecomuseums in villages emphasize the preservation of cultural heritage, as well as the development of the local communities.

The joint-program experience in Norway and China on the practice of ecomuseums lies in the following “LIU ZHI Principle” (slide5):

1. The people of the villages are the true owners of their culture. They have the right to interpret and validate it themselves.
2. The meaning of culture and its values can be defined only by human perception and interpretation based on knowledge. Cultural competence must be enhanced.
3. Public participation is essential to ecomuseums. Culture is a common and democratic asset, and must be democratically managed.
4. When there is a conflict between tourism and preservation of culture, the latter must be given priority. The genuine heritage should not be sold out, but production of quality souvenirs based on traditional crafts should be encouraged.

5. Long-term and holistic planning are of utmost importance. Short-term economic profits that destroy culture in the long term must be avoided.
6. Cultural heritage protection must be integrated into the total environmental approach. Traditional techniques and materials are essential in this respect.
7. Visitors have a moral obligation to behave respectfully. They must be given a code of conduct.
8. There is no bible for ecomuseums. They will all be different according to the specific culture and situation of the society they present.
9. Social development is a prerequisite for establishing ecomuseums in living societies. The wellbeing of the inhabitants must be enhanced in ways that do not compromise traditional values.

Now, I would like, first, to invite all of you to have a quick look of Dimen Dong village's landscape (slide6-28).

Eight different sessions make up Dimen Dong ecomuseum's daily work.

1. Record: We record and collect all information regarded as culture.
2. Information storage: Every piece of information that is recorded is sorted and stored properly.
3. Training and Sharing: According to the local traditions and the information recorded. Share those with visitors, as well as activities held on a weekly basis for local people.

The above three aspects belong to one direction. The next group starts at:

4. Research: Based on 17 years of recording and documentation. We, our volunteers, or anyone interested, can come and study.
5. Creativity encouragement programs based on local knowledge, the needs of the modern world, and sustainability.
6. Spreading this knowledge we worked on and promoting the philosophy guiding these behaviors.
7. Utility and Recreate: Making it fit into the modern world. For example, as modernization grew, locally-made paper lost its function, but with our help of us and volunteers' support, items such as diary books, tea leaf wrappers, and package wrap were created again and found a new use.

The above points represent another major part of the work.

8. Finally, our singular purpose, for over 17 years, has been to conserve local culture and find a new way of dynamic living.

I often share three levels of meaning for ecomuseums:

1. It is a new concept and a new way of management.
2. It is a living space, consisting of the natural environment, cultural surroundings, and people's living and production habits.
3. It is a public service organized for the local community, and is not-for-profit.

Our museum currently contains 5 main functional parts (slide30):

1. The Village Cultural Community: which includes the Dong Communities, Dimen village and Dengceng village at its core with other surrounding villages
2. Documentation Centre: which stores the community's archive and information database

3. The Cultural Inheritance Center: where Dong song and Dong drama is studied/and where the Dimen village school (part of the Dimen Institution) is located
4. Research and Communication Center: A place for teaching and learning practice/where the research and communication booth is located
5. Community Development Lab: which cultivates and promotes local agribusiness

Therefore, based on the functions we perform, the mission of the Dimen Dong Ecomuseum is summarized into three elements (slide31).

1. Preservation: of village culture, conservation and cultivation. It includes but is not limited to: recording, documentation, inheritance, research, communication and promotion.
2. Utilization: This refers to restoring the vitality of the village. It is Based on the community's natural and cultural resources. It involves organizing economic collectives and helping develop characterized agribusinesses.
3. Development: This refers to the construction and repair work carried out in the village for the improvement of local people's living and production conditions. It includes but is not limited to: community maintenance and management, environmental improvement, infrastructure construction, and architectural renewal.

Key principles for the communities' cultural preservation and cultivation that I have learned in my years of practice are as follows (slide32).

1. Standpoint: An ecomuseum's function is to promote village development and transition through conservation of the countryside's original landscape, sustainable agricultural development, and the inheritance of local traditional arts and techniques. Village construction should emphasize the uniqueness of a community's indigenous landscapes, the people's own traditional way of living and producing, and the distinctive nature of the ecological environment.
2. Slowdown but qualified: The longing for a slow-paced life in the countryside exists in every Chinese person. Therefore, making improvements for visitors and locals is of great importance. The principles of being environment-friendly, respecting nature, and enriching Chinese traditional culture are emphasized.
3. Respect the host: The hosts of village communities create their own lifestyle and culture. They have the right to decide the direction of their own culture. Visitors must respect that ownership and appreciate the villager's continuous culture, handed down through the generations.
4. Rational shifts towards change: Lifestyle and culture is a product of living conditions. Nowadays, due to urbanization and globalization, change and transition are inevitable. Holding on to original, unchanged tradition is an argument for further discussion, but a rational and reasonable attitude towards reality should be adopted.
5. Rights and benefits: Local villagers also have the right to pursue the modern life of their dreams. Their rights and preferences should be given priority. Holistic development and people's well-being are vital.
6. Limit the reliance on and expectation of tourism: Sustainable economic development is based on the natural ecological system. Cultivate environment-friendly agribusiness, arts and techniques.

The single purpose of an ecomuseum's effort is towards the local community. I conclude with three objectives. They are: Recognition, Acknowledgement, Self-respect. Four spaces and projects help to fulfill our vision (slide33):

1. Village Document Center: information data
2. History Archive: village history, clan legend and family tree
3. Village School (Dimen Institution): village knowledge, ancient wisdom and the spiritual system
4. Village Alliance for Creativity: find out, re-evaluate and exchange

In the Village Document Center project, we applied three main functions. They are (slide34):

- Information database
- Community's public file
- Community's family file

For the History Archive project, we focused on the documentation of (slide35):

1. Village history: the history of various villages and communities
2. Clan history: the history of clans and families

The following projects are being carried out at the village school of Dimen Institution (slide36):

- Inheritance plan for Dong songs and Dong drama
- Study plan for Dong techniques and handicrafts
- Supporting plans for major festivals such as Ancestor Worship Day, and the Lunar festival held on the sixth day of June to celebrate the first batch of fresh rice
- Local folkways success plan

You may be interested in the Village Alliance for Creativity that I mentioned in slide 33. I am about to explain the details. It promotes ways of slowing down. It suggests that people adopt a traditional Chinese way of life, which will lead to a new type of community. It is based on living conditions in rural areas. There are three projects to help put this idea into practice (slide37).

1. Countryside Market
2. Farmer and Craftsman
3. In-depth Village Tour

First, I would like to talk about the first project: The Countryside Market. This is divided into the following three types.

- Village Agency: which creates a local sales platform for selling and buying
- Village collective plant: an agribusiness association taking orders for products
- Village individual store: a self-running business plus an individual online shop

This slide (slide39) lists some of the programs that support the Countryside Market project.

- People of Dimen Dong village lead a traditional, natural way of life. "From farmland directly to the dining table," "turning materials gifted by nature into clothes we treasure," which are simple but meaningful concepts gradually accepted by city people due to the pressure of a fast-paced life.

- Attempt to create a platform to allow villages to share the motherland's blessings, i.e., food, material and products, with cities.
- Through the joint effort of shareholders, we expect that income for villagers from this kind of programs will surpass the income they earn from serving as laborers in big cities. Gradually, the younger generation will gain enthusiasm to return back to their homeland.
- The ecomuseum serves as a bridge between city and village families.

Next, I would like to talk about the second project, Farmer and Craftsman, which is a tailored, handmade product and service. It consists of three items:

- Agricultural products
- Featured products and services provided by local craftsmen
- Exclusive designer pieces: designer's creativity combined with traditional elements

The ecomuseum encourages the local community to focus their natural skills and traditional techniques towards their potential use in creative industries to provide a sustainable livelihood in a modernized world. The main projects are the Local Hand Craft Workshop and International Designer Lab (slide41).

- Local Hand Craft Workshop: By focusing on traditional skills and techniques, villagers are encouraged to produce "tailored orders" that combine modern design with traditional skills.
- International Designer Lab: Assists domestic and international designers to visit village communities, which can inspire design and technique. Designers can help to innovate functions and provide the latest fashion concepts, while also benefiting from learning the local traditions and characteristics. The exchange can help create a local creative industry and provide a substantial income for the entire community.

The Following cases are examples we have practiced through the years (slide42-50):

I still ask myself the same question over and over again: Starting from the very beginning here in Dimen, we try to answer the question: Who is the host?

1. who is the host of the culture?

Villages are assimilated by cities. They have been culturized, touristed, commercialized, become entertainment, and abandoned

2. Escape from the village and return back from the city

Villagers are keen on going out into the world, while city people want to go back to villages.

3. Modernization vs Localization

Modernization changes everyone's surroundings. The loss of localization leads to losing memories of the traditional countryside life.

After 17 years of the ecomuseum's existence we are still asking: Who is the real host of their culture, and who creates their culture? (slide52)

Twenty elderly representatives were on stage for the opening ceremony of Dimen Dong Ecomuseum, held on

January 8, 2005 (slide53).

The dilemma is the interaction between the villager and the visitor; while the former wants to leave for the major cities, the people from the city intend to return and pick up the traditional way of life.


The conflict between modernization and localization is a challenge for the ecomuseum. Villages face rapid changes and modernization can change everything.

With the effort of the ecomuseum, we can record and understand how traditional village life has been undertaken over one hundred years. The memory—keeping cause toward villages—has no closure, but is only the beginning.

Thank you very much again for your attention today.

LOCALIZATION OF ECOMUSEUM

— 17 Years Practice of Dimen Dong Ecomuseum



REN JIEXIN
 Founder & Director, Dimen Dong Ecomuseum
 Journey Studio, Western CHINA Cultural and Ecology (Hongkong/Studio)
 Guest Professor, Institute of Village Heritage and Ecomuseum, Center for Land and Cultural Resource Research, FUDAN University

1

Key Milestones

May 1995

- Official committee of Loping county government, focus on "cultural conservation and village development"

Founder: Dimen

Dimen Ecomuseum, which is the one and only non-governmental, non-profit organization in Guizhou CHINA, founded for the purpose of conservation, utilization and development of the ecomuseum in villages.

Focus: Restoration of rural landscape and construction of ecomuseum in Chinese villages, aims to study the conservation knowledge of village conservation in east Asia and to promote practice in the modern society.

May 2003

- Official local expert, acknowledged for the national cultural heritage administration, on the model subject of holistic protection and utilization of traditional Dimen village, made the following points: in arts and dynamic conservation, by "in-field and systematically collect village's tangible is intangible assets, to evaluate which, encourage the two-way communication and exchange in between cities with rural areas, the value exchange during the process will successfully support spiritual ecomuseum's development"

Begin with 2010


- Engagement: Initiate and establish **Dimen village school**, to preserve and spread traditional knowledge through generations. By documenting the ecomuseum knowledge, recording experience, to improve the ability to create and grow (all) the things standing in far rural urbanization and globalization world.
- Effective: culture, knowledge, wisdom of life and the spiritual world.
- Movement: Exchange young generations, nearby university student and independent designer, anyone interest in rural subjects, from cities, study in the village school and involved in different projects.

1 ecomuseum in each village in Guizhou

2

Introduction of Dimen Dong Ecomuseum

- Established and official announcement made on 8th January 2005
- Co-found and a shared asset by local communities with Western CHINA Cultural and Ecology (Hongkong/Studio)
- The first non-government organization of the Ecomuseum kind in China
- No longer framed in designated space or a building, Dimen Dong Ecomuseum is a Cultural Conservation Zone of Dong ethnic group, covering 15 administrative villages, 46 natural communities with an area of 172 square kilometers, covering a population of 20,000
- non-profit and served as a document center to manage the cultural assets
- The local communities still process sound Dong minority group cultural. Tangible asset such as drum tower, flower bridges, rice barn, ancient wells, ancient road, traditional residency and trees, while the intangible remain in their language, dong drums, dong song, hand made paper, dye cloth, sewing, food, beverage, traditional festivals.



Cultural Conservation Zone of Dimen Dong Ecomuseum

3

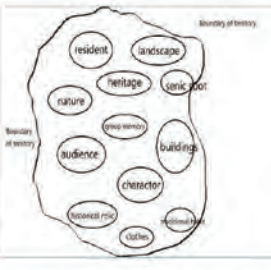
Definition* of Ecomuseum

Ecomuseum is a form of new museology.

Present the traditional culture and ecological environment of certain community through its indigenous landscape, village layout, living and producing habits, those which the civilization track of certain group can be observed and understood in-site.

Local resident participation is a must to protection and through management.

Ecomuseum as village emphasize more on the preservation of cultural heritage, as well as the development of local community.



* by Chinese National Cultural Heritage Authority

Graphic representations of the ecomuseum (after Rivard, 1996)


4

Liuzhi principle, the guideline for Chinese Ecomuseum

- The people of the villages are the true owners of their culture. They have the right to integrate and utilize it themselves.
- The meaning of culture and its values can be defined only by human perception and interpretation based on knowledge. Cultural acceptance must be enhanced.
- Public participation is essential to the ecomuseum. Culture is a common and democratic asset, and must be democratically managed.
- When there is a conflict between tourism and preservation of culture, the latter must be given priority. The genuine heritage should not be sold out. Introduction of quality tourism based on traditional culture should be encouraged.
- Long term and holistic planning is of utmost importance. Short term economic profits that destroy culture in the long term must be avoided.
- Cultural heritage protection must be integrated in the total environmental approach. Traditional techniques and materials are essential in this respect.
- Vision has a moral obligation to behave respectfully. They must be given a code of conduct.
- There is no bible for ecomuseum. They will all be different according to the specific culture and situation of the society they present.
- Social development is a prerequisite for establishing ecomuseum in living situation. The well-being of the inhabitants must be enhanced in ways that do not compromise traditional values.


5

Community Cultural Landscape of Dimen village | A glance of village




6

Community Cultural Landscape of Dimen village | Residents' house



7

Community Cultural Landscape of Dimen village | Resident Drying Rice



8

Community Cultural Landscape of Dimen village | Rice Barn and local's Coffins Underneath



9

Community Cultural Landscape of Dimen village | Typical Functional Unit of Dong Village: Drum Tower and Flower Bridge



10

Community Cultural Landscape of Dimen village | Traditional Wooden Bridge, aim to lock up the "feng shui" of its village



11

Community Cultural Landscape of Dimen village | Ecological system to plant rice, raise duck and fish Together



12

Community Cultural Landscape of Dimen village | Villager taking care of his cow, while teasing his pet bird



13

Community Cultural Landscape of Dimen village | Farmer carefully harvest local Sticking Rice



14

Community Cultural Landscape of Dimen village | Carrying Fresh Grass For Goat And Cow



15

Community Cultural Landscape of Dimen village | Traditional Dong Festival



16

Community Cultural Landscape of Dimen village | Perform Dong Songs During Festival



17

Community Cultural Landscape of Dimen village | Dong Drama Performer



18

Community Cultural Landscape of Dimen village | Villager spin or weave Dong cloth



19

Community Cultural Landscape of Dimen village | Knotting Dong Belt



20

Community Cultural Landscape of Dimen village | Old lady dying cloth in a traditional way



21

Community Cultural Landscape of Dimen village | Traditional Plant Dying Technique



22

Community Cultural Landscape of Dimen village | Traditional way of drying cloth



23

Community Cultural Landscape of Dimen village | Making Traditional curly Skirts



24

Community Cultural Landscape of Dimen village | Hand Made Paper



25

Community Cultural Landscape of Dimen village | Processing the paper Material



26

Community Cultural Landscape of Dimen village | Dying The Fresh Hand Made Paper



27

Community Cultural Landscape of Dimen village | Making Grass Curtain



28



29

Dimen Dong Ecomuseum Structure

Village Cultural Community
Dong, Conservation, Dimen Village And Dengrong Village At Its Core With Other Villages Surrounding

Documentation Centre
Community's Archive / Information Data Base

Cultural Inherit Centre
Dong Song & Dong Drama Study / Dimen Village School (Dimen Institution)

Research And Communication Center
Teaching And Learning Practice Research And Communication Base

Community Development Lab
Culture And Product Local Featured Agriculture



Dimen Dong Ecomuseum
Community Research & Communication Center

30

Dimen Dong Ecomuseum Mission

Preservation
- Village Cultural Conservation & Cultivation, Include But Not Limited To Record, Documentation, Inherit, Research, Communicate And Promote

Culture
- Restore Village's Vitality, Base On The Community's Nature And Cultural Resource, Organize Collective Economic Through, Culture Characterized Agriculture

Development
- Village Conservation / Rejuvenation, On The Basis Of Improving Local People's Living And Producing Condition, Include But Not Limited To: Community Maintenance And Management, Environmental Improvement, Infrastructure Construction And Architectural Renew



Dimen Dong Ecomuseum
Documentation Centre

31

Dimen Dong Ecomuseum

Key Principles for the communities' cultural preservation and cultivation

1. Sustainability

Documentation function to preserve the village development and transition is premised on the conservation of the countryside's original landscape, recreation agriculture development, and inheritance of the local tradition and way of life.

Village conditions should emphasize on the uniqueness of community's indigenous landscape, people's own traditional way of living and producing, as well as the abundance of primary ecological environment.

2. Shared benefit principle

The sharing being after enjoy is also just but qualified community life more day - culture events (Chinese's folk festival). Therefore, the quality improvement for well-ordered local into a system of joint improvement.

3. Sustainable principle

Development should respect village life, protect its Chinese traditional and way of living, and living together.

4. Respect for life

The face of village community control and having their own life style and culture. The face the have to be right to decide what they were culture given.

Any outsider must respect their community and take the village's autonomous culture that had been thousand year through generation to live.

5. Economic system change

With its way and its culture into village life's living condition, therefore, under the urbanization and globalization trend, change and transition are inevitable.

6. Inherit the original, exchangeable tradition is no exception to be further discussed, but not and maintain its value to make quality shared, their stage.

7. Respect for history

People also have the right to present their dream modernity and quality life. History might be being the local village's.

Historical development and people's well-being are vital.

8. Local the only way to improve the future, it is possible - economic development is on the basis of nature ecology system.

Culture the landscape, history, agriculture, as well as its ecological landscape.

32

Localization of Ecomuseum in Dimen Local Community's Recognition, Acknowledgement, Self-respect

1. Village Document Centre: Informative Data
2. History Archive: Village History, Clan Legend And Family Tree
3. Village School (Dimen Institution): Village Knowledge, Ancient Wisdom And The Spiritual System
4. Village Alliance: For Creativity (Production, Re-evaluation and Packaging)

33

Village Document Centre

- Information Database
Offline Hardware + Online Cloud Storage
- Community's Public File
Village File + School File + Village Clinic File
- Community's Family File
Autobios Of Family And Its Clan



Dimen Dong Ecomuseum
Community's Public File centre

34

History Archive

- Village history
Village's + its environment
- Clan history
Clan's + families



Dimen Dong Ecomuseum
History Archive

35

Village School - Dimen Institution

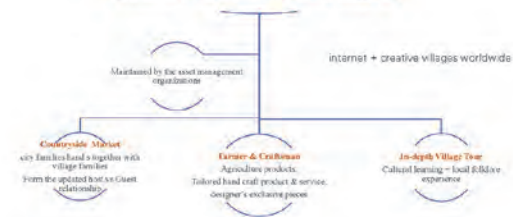
- Inherit plan for doing songs and doing dramas
Practice day every week for school doing song and drama
- Study plan for Dong's technique and hand craft
Module workshop for traditional practice
- Supporting plan for major festival
Ancient's workshop day - Lunar year's birth day of Dimen to celebrate the first birth of Dimen
- Local fellows succeed plan
e.g. YUE HAI (by Dong's postmaster's) local's social activity



Dimen Dong Ecomuseum
Dimen Institution

36

Village Alliance For Creativity (Return back to the old fashioned Chinese village life)



37

Countryside Market

- Village Agency: local sales platform, purchase and selling
- Village collective plan: Agribusiness association, taking orders into products
- Village individual store: self running business + individual online shop

38

City and Village's Joint Effort -- Hands Together Programme

- People of Dimen Dong village had a traditional nature-blending way of life
'From farmland directly to the dining table', from nature's blessing material to the clothes we treasured. Simple but meaningful concept gradually accept by the city under fast pace pressure.
- Attempt to set a platform to provide the possibilities for cities to sharing the motherland's blessing food, material and products.
- Through the joint effort of shareholders, we respect the income for the villagers from this kind of programme will bypass their income served as a labor force in big cities. Gradually, young generation will gain the enthusiasm return back to their hometown. Their life distance conversation can be truly alive.
- Ecomuseum served as a bridge to foster city families with village families
by providing the entire process, training and supervise local families to fix the city needs
by introducing local knowledge properly, bring the cities' attention and in-depth acknowledgement.

39

Farmer & Craftsman



40

Local Hand Craft Workshop / International Designer Lab

• The museum provides the possibilities for visitors to access deeper into the village's every aspect in its authentic surroundings. Therefore, the village alliance, with the support by government sector, professional organizations and individuals, set up a creativity-enhanced base, to promote the rural activation among stakeholders. Priority goes to the traditional way of processing and its technique.

• The individual creativity stems from the ecology-friendly method and its duration spent will derive the village's sustainable mission in the globalization world.

• Encourage the local community to involve their own skill and traditional technique as much as possible into the creative industry.

• Local Hand Craft Workshop - productivity-oriented program growth, focusing on their skill and technique, such as handmade paper, knitting, silk spinning and dyeing skills, etc. Encourage village set up home-based brands, to produce "valued items" which combined modern design with traditional skills.

• International Designer Lab - Invite domestic and international designers to a thorough visit of the community, encourage them to work closely with local Lab-on-site, can involve into the design and the technique. Designer can help to improve the practical function, keep up with fashion consumption while benefit from the learning of material and its nature, or even its character. The exchange value can enhance the local creative industry, also increase the income of the entire community.

41

Village Alliance For Creativity | Plant and herbal dyeing and colouring



42

Village Alliance For Creativity | handmade paper with local plants



43

Village Alliance For Creativity | Designer work with local villager



44

Village Alliance For Creativity | Designer clothes made out of Dong cloth and herbal dyeing



45

Village Alliance For Creativity | Customized products, a joint effort of village and designer



46

Village Alliance For Creativity | Handmade farm goods displayed in the village agency

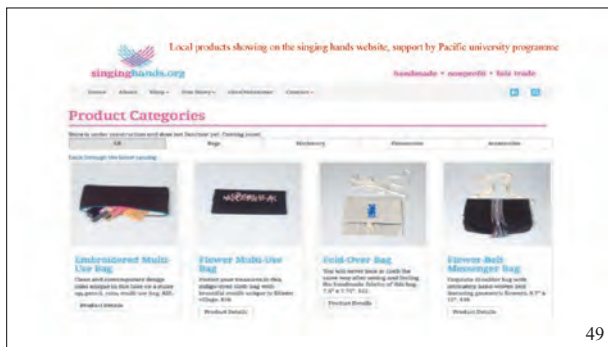


47

Local products showing on the singing hands website, support by Pacific university programme



48



49



50

Further Thinking | Challenge

1. Who is the host of the culture?

Villagers are essential to cities, been culturalized, been commercialized, been entertainment, been abandoned.

2. Escape from village and return back from city

Village's attraction of going out to the world, while city people wants to come back to villages.

3. Modernization vs. Localization

modernization changes everyone's surroundings, lost of localization culture, but the memory, lost of traditional countryside.

51

Who is the host of the culture

- Local villagers speak for themselves on stage. 3rd January 2005 on the opening ceremony of Duan Ding Ecomuseum.
- However, 17 years have passed, we still asking: who is the real host of their culture, and who trade their culture?
- We evident that process, villages are dominated by cities, cities' taste, cities' ideology, been culturalized, been commercialized, been entertainment, been abandoned.

52



53

Leave & Return

- Leave the village.
Villagers held wishes about the wealth and consumption of cities.
They want to move for the outside world.
- Return to hometown.
City people pick up the imagination of ancient countryside.
They want to turning back, back to culture and its spiritual world.

54

Modernization vs Localization

- Village under right change, the fast pace of village is unappreciable.
Modernization changes everything.
- City people present the slowdown life style, but impossible.
Lost of localization / new memories, created memories.

55

To be Continue

No one can specify, how they become what they are right now, for the past 100 hundred years, with the single effort of Ecomuseum, we can record and understand how the under-taken 100 hundred years goes.

The memory keeping cause toward villages has no closure but only the beginning.

56

Thank you for the attention...

中央消防署の展示施設 ー マレーシアの世界遺産都市ジョージタウン ー

ミン・チー・アン

こんにちは。マレーシアから来ましたミン・チー・アンです。ジョージタウン世界遺産公社のゼネラル・マネージャーを務めています。私たちの組織は、ユネスコ世界遺産であるジョージタウンのサイトマネージャー（現場管理者）であり、今回 ACCU より、私たちの町の中央消防署の事例についてご紹介する機会をいただき、非常に嬉しく思います。

ペナン州はマレーシア半島の北部に位置し、ジョージタウンはペナン州の島部分にあります。ペナン島は小さな島で、美しい山々と歴史ある町を擁し、周囲にはマラッカ海峡が広がっています。ペナン島の北東端に位置するジョージタウンは、少なくとも千年の間、地域と世界の貿易において重要な役割を果たしてきた歴史ある中継港です。現在は、ペナン州の行政、文化、政治の中心地となっています。

スライド6は、私たちジョージタウン世界遺産公社 (GTWHI) のオフィスの写真です。私以外に35人の職員がいる GTWHI は、世界遺産の「顕著な普遍的価値」を管理、保存、維持することを目的として、ペナン州政府によって設立されたサイトマネージャーです。ジョージタウンは、古都マラッカとともに、2008年に世界遺産に登録されました。スライド7は美しいジョージタウンの全景です。世界遺産都市ジョージタウンのうち、世界遺産地区として登録されているのは総面積259.42ヘクタールです。コアゾーンは109.38ヘクタールで、150.04ヘクタールのバッファゾーンによって守られています。世界遺産地区内には約5,013の遺産建造物があり、そのうち82がカテゴリー I、3,771以上がカテゴリー IIとなっています。各機関および建造物の所有者と利用者の協力を得て、これらの建造物を適切に管理することがGTWHIの責務です。

世界遺産地区の一つとして、私たちはしばしば「顕著な普遍的価値 (OUV: Outstanding Universal Value) の陳述」を参照します。ジョージタウンは3つの基準で登録されています。まずは登録基準 (ii)。「マラッカとジョージタウンは、マレー・中国・インド文化と、約500年続いた欧州の3宗主国との貿易と交流によって作り出された、東アジアおよび東南アジアの多文化貿易都市の際立った例であり、多様な建築様式、都市構造、技術および芸術的建造物にその影響が見られる。長期にわたる様々な発展段階と継続的变化が見られる両都市は、互いに補完し合っている」というものです。

次は登録基準 (iii)。「マラッカとジョージタウンは、アジアの多文化遺産と伝統、そして欧州の宗主国からの影響をまざまざと示す証拠である。この有形・無形の多文化遺産は、多様な宗教建築、各民族地区、多言語、信仰や宗教の祭り、踊り、服飾、芸術・音楽、料理および日常生活の中に現れている」というものです。

そして最後になりましたが登録基準 (iv)。「マラッカとジョージタウンには様々な影響が交わって反映され、他の東アジアおよび南アジアでは見られない独特な建築、文化および町並みが生み出された。特にその特徴が現れているのが、非常に珍しいショップハウスやタウンハウスである。これら建築の様式は種類も発展段階も様々で、中にはオランダやポルトガルの植民地時代にさかのぼるものもある」というものです。

すでにお分かりかもしれませんが、遺産都市を守っていく上で、サイトマネージャーである私たちには

多くの課題があります。ジョージタウンで採用している戦略の一つが、地域住民を基盤としたプロジェクトを立ち上げるというものです。担当省庁の助けを得て住民と協力することは、世界遺産を管理する上で最も持続可能で効率的な方法です。こうしたプロジェクトの一つが、2017年に始まった文化遺産の減災プロジェクトです。

世界遺産の建物の安全を保つため、私たちは多くの記録、修理、修復、メンテナンスの作業に従事するだけでなく、地域に根ざしたファーストレスポnder（初期対応者）の重要性についても強く訴えています。このプロジェクトを通じ、消火器と煙探知器を100セット配布しました。また、消防署と緊密に連携して、地域住民を対象にファーストレスポnder研修を実施し、火災リスクに関する意識向上活動を行いました。参加者には消火器と煙探知器が提供され、初回の研修参加者がインフルエンサーとなって、世界遺産の他の地区がこのプログラムに参加するようになると考えています。研修では、安全についての概略と、消火器の基本知識についての説明が行われ、参加者全員に消火器を使った消火を体験してもらいました。

2017年のプロジェクト始動以来、公共スペースの消火器の設置数が増加しました。スライド15は、ジョージタウン世界遺産のコアゾーンに位置するリン・ジェットイ（林氏棧橋）での設置例です。

さらに、地域住民とGTWHIチームからなる緊急対応チームを設置しました。研修は、理論と実習の両方のセッションから構成されています。スライド17の写真は、消火器の使い方についての実習セッションの例です。さらに、消火ホースを使った消防訓練の機会も設けています。これらのプロジェクトによって、参加者全員が、自分たちの町の安全を守るためにもう少し努力したいという気持ちを抱くようになりました。プロジェクトに参加したチア・コンシー（謝公司、世界遺産カテゴリーIの建物）では、消火器が16台以上も追加されました。

2019年、私たちは、レブ・パンタイ消防署の消防隊員との話し合いを経て、この防火キャンペーンを次のレベルに進めることを決定しました。この消防署はかつて中央消防署と呼ばれ、1908年に設立されたものです。ペナン初の消防署（消防隊員28名）として、ユネスコ世界遺産ジョージタウンのコアゾーン内のカテゴリーIに属しており、設立から112年後の現在も活動を続けています。GTWHIは、この消防署のチームと緊密に連携し、この町をより安全でより良い場所にする方法について常に話し合っています。

2019年、GTWHIはレブ・パンタイ消防署展示室の設立を支援し、資金提供を行いました。これは、消防署の機能を維持しつつ第3消防車庫を展示室に変えるという計画で、現在、消防車は第2消防車庫に置かれ、既存の更衣エリアは第1消防車庫に併合されています。

スライド23の写真は、ケトゥア・バライ（署長）のモハマド・ラフィジ・アラフビン氏です。彼が展示室実現の立役者です。消防署の入り口はスライド24の写真のようになっており、これは多くの人が訪れる消防署のロケーションを利用して、一般の人に火災への備えと意識向上のための知識を提供するというアイデアです。展示室には歴代の消火ノズルが展示されました。一部は現在も使われています。

スライド26の写真は、新たに設置された「中央消防署1908年」の看板の落成式が行われた2019年8月3日に撮影されたものです。歴史上重要な瞬間をとらえた写真が展示されました。ケトゥア・バライと話し合い、現在、これら記者が撮影した写真より解像度の高いものを探しています。今後展示室が拡張され、写真にキャプションが加わる予定です。展示室の一画には、消火に使われる乗り物、消防服、消火器具も数点展示されています。GTWHIは展示室に、OUVを記載したボードと世界遺産地区の地図も寄贈しました。

展示室は、今後第2フェーズを経て完成となります。第2フェーズでは、消防署の位置を示す横長バナーと、この消防署の歴史を学ぶための情報ボードなどが追加されます。また、アーティストに壁画を描いてもらい、消火栓の模型を設置して、訪問者が消火しているような写真を撮ることができるようにする計画

もあります。さらに、この消防署を広く知ってもらうためにフェザーバナーやフラッグを設置する計画もあります。しかしながら、資金不足とコロナウイルス感染の影響により、これらの計画は現在やむをえず保留中です。

とはいえ、この町の火災リスクがなくなることはありません。スライド33は、ジョージタウンで起きた重大な火災の一例ですが、5軒のショッパハウスが焼け落ちました。消火活動のため、10台以上の消防車が出動しました。GTWHIは火災発生から3日後に現場への立ち入りを消防署から許可され、焼け残った文化遺産を持ち出し、修復する作業に取り掛かりました。サイトマネージャーと消防署とがしっかりと連携することで、この遺産都市をより安全にすることが可能だと、私は強く信じています。スライド35の写真は、プトラジャヤの高官が訪問した2019年に撮影されたものです。

現在、各消防署は、GTWHIによる文化遺産保護の取り組みを認識しています。私たちは会議に参加させてもらい、世界遺産としての属性と正当性を守りつつ、建物の安全性を保つための最善の方法について話し合っています。

マレーシアの遺産都市ジョージタウンの中央消防署の事例に関するこの講演で、地域住民の参加と協力の持つ力について多少のヒントが提供できたのであれば、嬉しく思います。最後にスライド37の写真を紹介させてください。GTWHIの通信担当のザハリさん（白いTシャツの男性）が、私たちのオフィスの前で自動車火災の消火活動をしている消防隊を手伝っているところです。

ご清聴いただきありがとうございました。皆さんにとって、2021年が安全で幸せでよりよい年となりますように。

The Central Fire Station: George Town World Heritage City, Malaysia

Ming Chee ANG

Good afternoon. My name is Ming Chee Ang, and I am from Malaysia. I am the General Manager for George Town World Heritage Incorporated, an organisation appointed as the Site Manager for the George Town UNESCO World Heritage Site. I am grateful to ACCU for giving me the opportunity to share a case study of the Central Fire Station of George Town.

Penang is located in the northern region of Peninsular Malaysia, and George Town is located in the island part of Penang. As you may see here (slide5), we are a small island, with lovely hills and a historic city, surrounded by the Straits of Malacca. George Town is at the north-eastern tip of Penang island, and it is a historic seaway that has played a crucial role in regional and global trade for at least a millennium. George Town is currently the administrative, cultural, and political hub for the state of Penang.

This is the picture of my office building (slide6), George Town World Heritage Incorporated (GTWHI). Together with 35 other members in the GTWHI team, we are a site manager entity established by the State Government of Penang for the purpose of managing, conserving, and maintaining our Outstanding Universal Values. Together with the historic city of Melaka, George Town was registered in the World Heritage Site listing in 2008. This is the bird's-eye view of the beautiful city of George Town (slide7). Within the Heritage City of George Town, the total land area of the World Heritage Site is 259.42 hectares. The properties cover 109.38 hectares and are protected by a buffer zone of 150.04 hectares. We have about 5,013 buildings within the World Heritage Site, with 82 of them being Category I heritage buildings, and at least 3,771 of them are Category II heritage buildings. It is the duty of GTWHI to take good care of these buildings in collaboration with the respective agencies, building owners, and building users.

As a World Heritage Site, we often refer to the Statement of Outstanding Universal Values. George Town meets three criteria. The first one is Criterion (ii): Melaka and George Town represent exceptional examples of multi-cultural trading towns in East and Southeast Asia, forged from the mercantile and exchanges of Malay, Chinese, and Indian cultures and three successive European colonial powers for almost 500 years, each with its imprints on the architecture and urban form, technology, and monumental art. Both towns show different stages of development and the successive changes over a long span of time and are thus complementary.

The next one is Criterion (iii): Melaka and George Town are living testimony to the multi-cultural heritage and traditions of Asia, and European colonial influences. This multi-cultural tangible and intangible heritage is expressed in the great variety of religious buildings of different faiths, ethnic quarters, the many languages, worship and religious festivals, dances, costumes, art and music, food, and daily life.

Last but not least, we also have Criterion (iv): Melaka and George Town reflect a mixture of influences that have created a unique architecture, culture, and townscape without parallel anywhere in East and South Asia. In particular, they demonstrate an exceptional range of shophouses and townhouses. These buildings show many different types and stages of development of the building type, some originating in the Dutch or Portuguese periods.

As you may now already understand, there are a lot of challenges that we as the Site Manager must deal with in safeguarding our heritage city. One of the strategies we have adopted in George Town is to launch community-based projects. Working with the community, with help from the respective government agencies, has been the most sustainable and efficient way of managing the World Heritage Site. One such initiative is the Disaster Risk Reduction in Cultural Heritage project started in 2017.

To keep our heritage buildings safe, we not only carry out a lot of documentation, repair, restoration, and upkeep of projects, but also stress the importance of community-based first responders. Through this project, we distributed 100 sets of fire extinguishers and smoke detectors. We also worked very closely with the Fire and Rescue Department for training local community members as first responders and conducting awareness raising activities for the local community on fire risks. Fire extinguishers and smoke detectors are provided as incentives to the participants and the first batch of fire responders are expected to influence other community members within the World Heritage Site to take part in this programme. Our trainings included presentations on safety briefing and fire extinguisher basics. Participants were given the chance to practice putting out fire using fire extinguishers.

Since the launch of the project in 2017, more fire extinguishers have been installed in public areas. This one is at Lim Jetty (slide15), which lies in the core zone of the George Town World Heritage Site.

We have also set up Emergency Response Teams, consisting of members from the local community and the GTWHI team. The training consists of both theoretical and practical sessions. These are pictures taken during the practical sessions on how to use fire extinguishers (slide17). We also conducted hose drill practical training. These projects have inspired all participants to do a bit more to ensure the safety of our town. At least 16 additional fire extinguishers were installed by Cheah Kongsu (one of the Category I Heritage Buildings) that participated in our project.

In 2019, we decided to take the fire safety campaign to the next level following discussions with the firefighters at the Lebuh Pantai Fire and Rescue Station. This station was established in 1908. It was previously known as the Central Fire Station. As the first fire station in Penang (with 28 firefighters), it continues to provide active service to this day, 112 years after its inception. The station is located in a Category I Heritage Building within the area of the George Town UNESCO World Heritage Site. GTWHI has established a very close partnering relationship with this fire station team, and we constantly discuss methods to make the city safer and better.

In 2019, GTWHI supported and funded the establishment of the Lebuh Pantai Fire and Rescue Station Gallery. The plan was to convert Engine Bay 3 into a gallery while maintaining the functionality of the fire station. Today, the fire engine remains at Engine Bay 2 and the existing clothing area has been merged with Engine Bay 1.

This is the Ketua Balai (Head of the Station), Mr Mohamad Rafizi Araffin (slide23). He is the man who made this gallery happen. The concept is to take advantage of the location of the fire station that is surrounded by visitors, and to conduct more fire safety awareness activities for the public. This is at the entrance of the station (slide24). The various generations of fire nozzles are displayed in the gallery. Some of them are still in use.

This picture (slide26) was taken on August 3, 2019, when the new sign board of the Central Fire Station 1908 was inaugurated. Photos of important historical moments were displayed. I had a discussion with the Ketua Balai and we are in the process of finding higher resolution photos taken by reporters. Additional captions will also be added in the later stage of the gallery expansion. In this humble gallery, we have also displayed some of the vehicles, uniforms, and tools used in firefighting.

GTWHI has also donated the OUV board and a map of the World Heritage Site for the gallery.

We still have the phase two of the gallery to be completed. This includes the installation of a horizontal banner with the fire station's logo, and more interpretation boards to educate people about the history of this fire station. There is a plan to hire an artist for a mural painting and install a fake hose so that visitors can take in-action photos. There are also plans to install feather banners or flags as part of the efforts to promote this fire station. However, we have put these plans on hold due to lack of funding, and also the COVID-19 situation.

Despite these efforts, the risk of fire continues to haunt us in the town. This was one very serious fire in George Town (slide33); it burnt down five shophouses. More than 10 fire engines were required to put off the fire. GTWHI was given clearance by the fire department to enter the site on day 3, and we commenced a series of rescue missions for the surviving cultural heritage elements.

I strongly believe that with strong commitments between the Site Managers and the fire department, we will be able to make the heritage city safer. This photo (slide35) was taken in 2019 during a visit by a Putrajaya senior officer.

Nowadays, the efforts of GTWHI in safeguarding cultural heritage were acknowledged by the fire department. We were invited to attend meetings and discuss the best way to keep the heritage buildings safe while conserving their attributes and authenticity.

I hope my presentation on the case study of the Central Fire Station in the heritage city of George Town, Malaysia, has shed some light on the power of community involvement and collaboration. Please allow me to end with this photo (slide37), taken on the day when GTWHI dispatch officer Abang Zahari (the man in white t-shirt) helped the firefighting team put out a fire in a vehicle in front of our office.

Thank you very much, and I wish everyone a safe, happy, and better year ahead in 2021.



International Workshop for Senior Professionals 2020
"Museum and Local Community"
16-22 December 2020

"The Central Fire Station",
George Town World Heritage City, Malaysia

Dr Ming Chee Ang

General Manager
George Town World Heritage Incorporated
angmingchee@gmail.com



1



Ming Chee ANG

洪敏芝

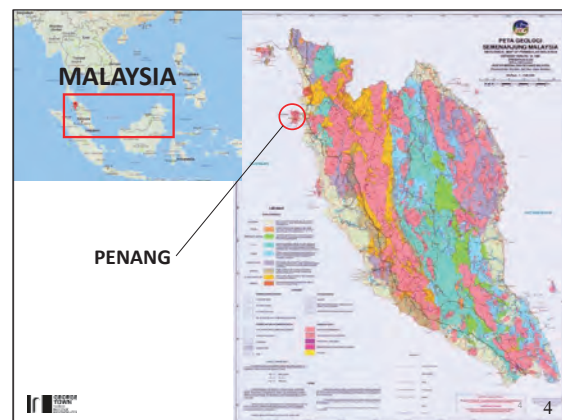
GENERAL MANAGER 2016-Current
George Town World Heritage
Incorporated, Malaysia

- Develop and achieve company strategic plans
- Plan and manage all project and activities operations
- Manage overall operations and resources
- Maintain the World Heritage Site status
- Plan, oversee and lead projects
- Establish strategic national and international cooperation.

2

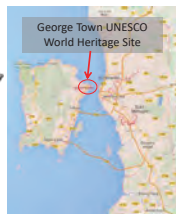
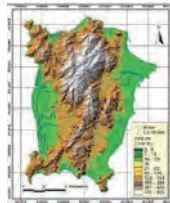


3



4

Penang Island



- Western end of the Straits of Malacca.
- Historic seaway that has played a crucial role in regional and global trade for at least a millennium.
- George Town is the administrative, cultural and political centre for the State of Penang.

5



George Town World Heritage Incorporated
www.gtwhi.com.my



Source: GTWHI Office (2017)

6



7



Land area: 259.42 ha.

Core: 109.38 ha. (42.16%)

Buffer: 150.04 ha. (57.84%)

Category	Number of buildings and sites	%
Category I	82	1.66
Category II	3771	78.54
Infill Development	573	11.43
Replacement	587	11.71
Total	6013	100.00



8

Statements of OUV

Criterion (ii): Melaka and George Town represent **exceptional examples of multi-cultural trading towns** in East and Southeast Asia, forged from the mercantile and exchanges of Malay, Chinese, and Indian cultures and three successive European colonial powers for almost 500 years, each with its imprints on the architecture and urban form, technology and monumental art. Both towns show different stages of development and the successive changes over a long span of time and are thus complementary.



Ir GEORGE TOWN

9

Statements of OUV

Criterion (iii): Melaka and George Town are **living testimony to the multi-cultural heritage** and tradition of Asia, and European colonial influences. This **multi-cultural tangible and intangible heritage** is expressed in the great variety of religious buildings of different faiths, ethnic quarters, the many languages, worship and religious festivals, dances, costumes, art and music, food, and daily life.



10

Statements of OUV

Criterion (iv) Melaka and George Town reflect a mixture of influences which have created a **unique architecture, culture and townscape without parallel** anywhere in East and South Asia. In particular, they demonstrate an **exceptional range of shophouses and townhouses**. These buildings show many **different types and stages of development** of the building type, some originating in the Dutch or Portuguese periods.



11

Disaster Risk Reduction in Cultural Heritage

DISASTER
Bencana / 災難

RISK
Risiko / 風險; 危險



HAZARD
Bahaya / 危險物; 危害物

VULNERABILITY
Kerentanan / 脆弱性

HERITAGE ATTRIBUTES
Ciri-Ciri Warisan / 古跡屬性



- Community-Based First Responders
- Distributed 100 sets of fire extinguishers and smoke detectors.
- Train local community as first responders and awareness raising activities for the local community on fire risks.
- Fire extinguisher and smoke detector are provided as incentive to the participants.
- First batch fire responder will be the influencer to other community within World Heritage Site to take part in this programme.



13



Presentation on safety briefing and basic knowledge on fire extinguisher

All participants were given a chance to try on using fire extinguisher to put out fire.



14



Fire extinguishers are installed in public area at Lim Jetty, Core Zone of George Town World Heritage Site.



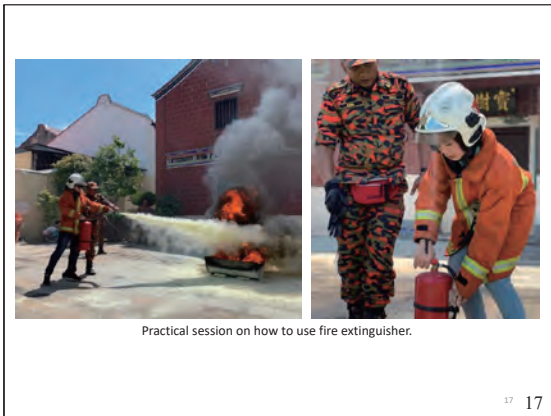
15

Emergency Response Teams (ERT)



On 4 and 5 May 2019, the Emergency Response Team Training were carried out for the local community and GTWHI team. The training consists of both theoretical and practical session.

16



Practical session on how to use fire extinguisher.

17



Hose drill practical training

18



16 nos fire extinguishers at Cheah Kongsi on 2 July 2019.

Site visit on 21 June 2019

19

The Central Fire Station Lebuh Pantai Fire and Rescue Station



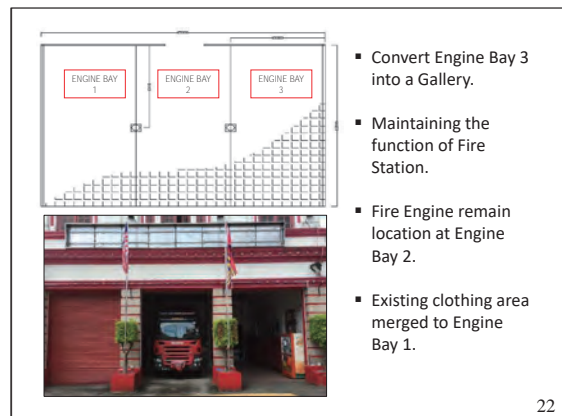
- Established in 1908
- The first Fire Station in Penang (with 28 firefighters).
- Continue active service until today (112 years)
- Located at a Category I Heritage Building within the Property of George Town UNESCO World Heritage Site

20



GEORGE TOWN

21



- Convert Engine Bay 3 into a Gallery.
- Maintaining the function of Fire Station.
- Fire Engine remain location at Engine Bay 2.
- Existing clothing area merged to Engine Bay 1.

22



23



24



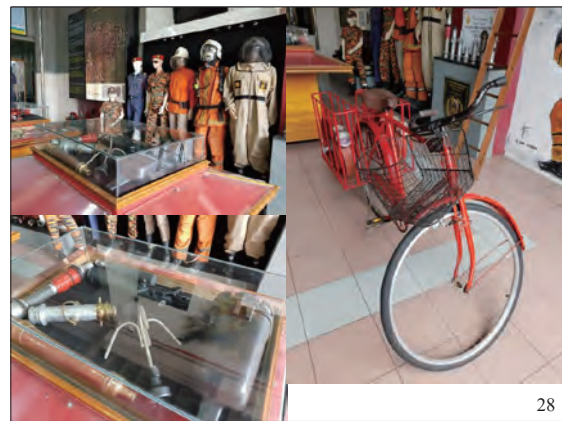
25



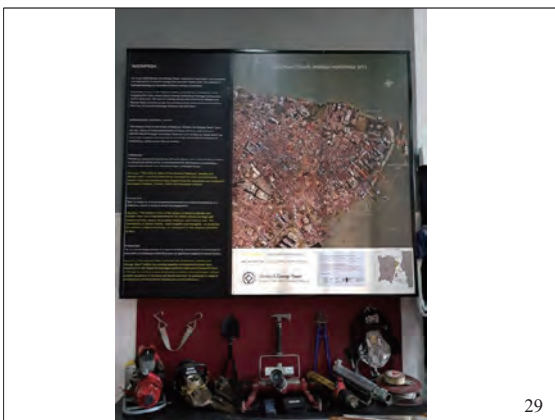
26



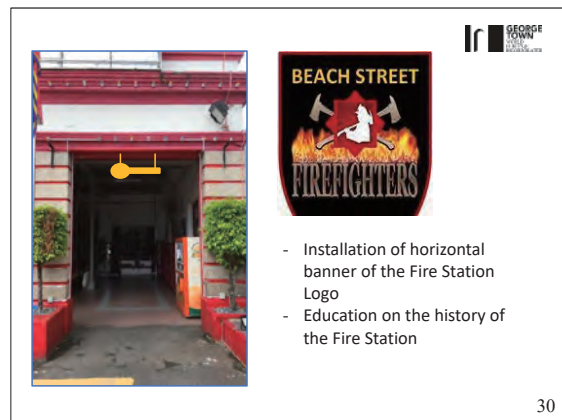
27



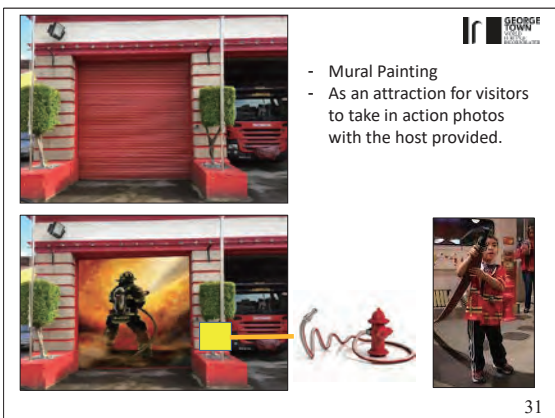
28



29



30



31



32



パタン博物館と地域コミュニティ

カナル・サンディープ

はじめに

私は、これまで15年間ネパールの様々な博物館に勤務してきました。現在は、ちょうどパタン博物館からハヌマンドカ王宮博物館に異動になったところです。その15年の間に、いろいろなタイプの博物館で働くことができました。それによって、私は多くのことを学ぶ機会を得ました。我が国のような途上国ではあらゆる限界に取り組まざるをえない状況にあります。そして、文化財保護に関しては、多くの課題があります。

祖先が遺してくれた極めて貴重な遺産を保存する責任は私たちにあります。私たちは、そうした遺産をそのままの形で次の世代へと継承する必要があります。現状においては、博物館の定義にさえも様々な変化が出てきています。現在、博物館はインフォーマルな教育の場になっているだけでなく、コミュニティに欠くことのできない存在になりつつあります。それに応じて、多くの博物館が変化しています。博物館の主要任務は、多くの有形文化遺産と共に、無形文化遺産を保護することです。そのため、消滅の危機に瀕した無形文化遺産を保護するための素晴らしい取り組みが始まっています。そのように素晴らしい取り組みが行われると、私たちのようにこの分野で働く者は嬉しく、また誇りに感じます。そしてそのことによって、働く意欲が湧いてきます。

最近、ネパールでも立派な博物館が整備されています。そのことによって博物館に対する若者たちの関心や愛着が高まりました。自分の文化を自分たちが保存するべきとの意識が生じています。また博物館はコミュニティに対する責任を感じるようになっていきます。本日は、地域コミュニティと共にパタン博物館が行った有形および無形文化遺産保護の取り組みについてご紹介したいと思います。

パタン市とパタン博物館

パタン市は、ネパールにある文化の都市です。正式名は「ラリトプル」といい、美術の都市を意味します。パタン市は、有形・無形文化遺産をはじめ数多くの文化的魅力を有しています。それら文化遺産の中でも、パタン旧王宮広場は最も貴重で重要な場所の1つです。中世期(14～18世紀)の王宮と、ヒンドゥー教と仏教の寺院など寺院建築が入り混じって立ち並んでいます。パタンの伝統的彫刻師と共に、ネワール族(地域の住民)の素晴らしい職人の芸術的技能と建築技能を伝える中心地です。この広場は史跡が多数あり、近くの地域住民に人気の待ち合わせ場所です。また寺院は、ヒンドゥー教徒と仏教徒にとって重要な信仰の場所です。伝統的なダンスや祭りなどの主な宗教的行事や伝統的文化行事を博物館施設内で開催し、こうした行事を地域コミュニティの住民が国内外からの来館者たちと共に楽しんでいます。カトマンズ盆地には、7つの遺跡群があり、1979年10月にユネスコ世界遺産に登録されました。パタン旧王宮広場はそのうちの1つとなります。また、パタン市は、35番目の世界工芸都市として認定されています。

現在の旧王宮は、1734年にヴィシュヌ・マッラ王によって建設された建物です。古代、この場所に要塞が存在しており、旧王宮の歴史は古くまで遡ることができます。歴史的文献に王宮の記載が登場するのはシッディナラシンハ・マッラ王の時代である1630年で、当時の王宮名「Chaukot」が記されています。王宮

は1674年にシュリニヴァサ・マッラ王、そして1734年にヴィシュヌ・マッラ王によって、改修されました。1997年にMedieval Patan Royal Palace (旧王宮の一部) がパタン博物館に改装されました。

パタン博物館は、様々な理由から、消滅の危機に瀕した文化遺産保護の模範となるような取り組みを始めました。他の博物館も、その取り組みに続いてくれるものと確信しています。

パタン博物館の使命は、保存と展示を通じ、ヒンドゥー教と仏教の宗教美術、文化および図像に対する理解を促進することです。パタン博物館は市の中心部に位置しており、ネパールの伝統的美術とネパール建築に関する世界レベルの博物館です。ネパールの伝統的芸術と建築は、ヒンドゥー教と仏教の2つの宗教に基づいていました。その2つの宗教は、それぞれに独自の美術と建築様式を持っています。パタン博物館は、両方の宗教の彫像や遺物を展示しています。博物館の展示室は、ヒンドゥー教美術、仏教美術・建築、ネパール建築などそれぞれのテーマごとに決められおり、加えて、2015年4月25日にネパールで発生した大地震の被害を受けた遺物がいくつか展示されています。パタン博物館は、地域コミュニティの発展とエンパワーメント、地域文化遺産への理解促進に取り組んでいます。設立以来、博物館エリア周辺の有形・無形文化遺産の広報、保護・保存に取り組んでいます。また、地域の祭りや伝統的なダンスに対し支援・協力も行っています。その伝統的なダンスの1つである「Kartika Nach」は、380年前のマッラ朝時代に始まり歴史的 중요性が高く、ラリトプル（パタン）市だけでなくカトマンズ渓谷の人々にとって重要で文化的価値を持ったものです。このダンスについて、パタン博物館は、世界に向け広く知ってもらい、地域コミュニティの住民に知識を深めてもらうために、企画展を開催しました。このイベントは、すべて博物館と地域コミュニティが連携して開催しました。それに加え、博物館ではパタンで2カ月以上にわたって行われ（おそらく世界的最も長期間行われるチャリオット祭り）、全国的に認識されているラト・マチェンドラナート・チャリオット祭（Rato Mastyandranath chariot festival）の遺物の企画展を開催しました。この祭りには、国のトップも直接参加します。博物館施設で祭りの内容の実演を行ってもらうためにその分野のプロの方を招いています。パタン博物館は、展示と実演によって、地域の伝統的楽器も広く知ってもらえるよう取り組んでいます。また、促進と意識向上のために、地域の祭りに関連したポスターや研究論文を発表しました。パタン博物館は、観光を通じた文化的活動によって文化遺産の重要性に対する意識向上を図るため、展示と地域住民への支援を実施しながらコミュニティ活動を促進しています。

課題

パタン博物館は、財政的に自立した機関です。時に、地域住民との間に誤解が生じることもあります。博物館や博物館に関連するものについての知識が不足しているために、地域住民も博物館の精神や文化的本質に反するような迷信的な考え方を実行しようとします。また一方で、政党も各政党のプログラムを実行するよう強く迫ってきます。非常に残念なことに、政治的リーダー陣が文化的価値の重要性を理解していないことから、博物館や旧王宮敷地内での政治的プログラムの開催を求める圧力があるのです。そのため、多様なプログラムや展示を実施することができない状態にあります。

まとめ

政治指導者や地域の住民に、博物館は、コミュニティにとって発展と伝統的価値の保護に貢献する最高の存在であるということを、納得してもらえるよう全力で取り組むこと。博物館がすべてを行うことはできませんから、地域の住民と政府は、文化遺産の保存について真剣に目を向ける必要があります。そして、そのために、政府は基本的な財政支援と道徳的支援を行う必要があります。こうした状況の中であっても、パタン博物館は、有形・無形文化遺産の保護、そして来館者の集客に、全力で取り組んでいます。

過去の歴史から、地震や伝染病など自然災害によって、長年続いてきた伝統的な祭りが消滅する可能性があることが分かっています。そのため、私たち全員が、意識を持ち、有形・無形文化遺産の保護に一致協力して取り組むことが重要となります。パタン博物館は、地域住民全員が、博物館の最高のアンバサダーであると確信しています。博物館と地域コミュニティは、コインの裏表のように一体であることは間違いありません。パタン博物館とコミュニティの間の隔たりを埋めるためにやるべきことはまだ多くありますが、それらに取り組むことによって、消滅の危機に瀕した文化遺産の保存が大きく前進し、博物館は有意義な存在になると考えられます。

ありがとうございました。

Patan Museum and Local Community

Khanal SANDEEP

Introduction

I have worked in various museums in Nepal in the last 15 years. I was transferred from Patan Museum to the Hanumandhoka Durbar (Palace) Museum by the government. In my career, I have had several opportunities to work in different museums, which helped me learn a lot. There are several constraints to work in any field in a developing country like Nepal. There are many challenges in cultural property conservation and management including museum management.

The responsibility of preserving the invaluable heritage left by our forefathers has fallen on our shoulders, which we have to pass on to the next generation, the way it was handed on to us. In the present situation, there have been many changes even in the definition of museum. Now the museum is becoming not only a place of informal education but also an integral part of the society. Accordingly, many museums are changing themselves due to the changing motions and development in many sectors of society. The main objective of the museum is to protect cultural heritage through museum objects. Due to these developments, many good initiatives have been launched, some of which focus on the protection of endangered properties. Those who are engaged in this field, like us, feel happy as well as proud when good deeds are accomplished, which awakens the motivation to work in ourselves and others as well.

Currently, some excellent museums are being developed in Nepal. The awareness and interest of the Nepalese youth toward this has been increasing. Feelings of cultural identity are being kindled in each ethnic group and every community. Thus, museums have started working in this way, influencing a wide range of people in the society, which is one of its responsibilities towards the community. Today, through this lecture/presentation, I will try to showcase the work done by Patan Museum together with local communities for the protection of tangible and intangible cultural heritage.

Patan City and Museum

Patan is a beautiful cultural town of Nepal. Its official name is Lalitpur, which literally means “city of fine arts.” Patan City has numerous cultural attractions including tangible and intangible cultural heritage. Among all cultural heritage, Patan Durbar Square is one of the most valuable and important traditional spaces. It is a highly diverse mixture of temple architecture, a royal palace of the medieval period (dating from the 14th to 18th century), and Hindu and Buddhist temples and shrines. It is a testament to the artistic and architectural skills of the brilliant Newar (local inhabitants) craftsmen and the traditional carvers of Patan. This square is a rich historical site and a favored meeting spot for locals from the vicinity. The temples, which have been in use for several centuries, provide Hindu and Buddhist community members a place to socialize, have discussions, and practice religious worship. Major religious events including traditional dances, festivals, and traditional cultural functions are still conducted in the museum complex and celebrated by the local communities. Other communities, domestic tourists, and international visitors

also participate in them. The Kathmandu valley has seven monument zones, which were listed in the World Heritage Site by UNESCO in 1979. The Patan Durbar Square is one of them and the city has also been declared the 35th world craft city.

The existing palace is the work of King Vishnu Malla, dating back to 1734 AD. There was a fort in the settlement during the ancient period. Thus, the history of the palace can be traced a long way back. The first mention of *Chaukot* in a historic document was during King Siddhinarasimha Malla's reign in 1630 AD. The palace was renovated by King Srinivas Malla in 1674 AD and also by Vishnu Malla in 1734 AD. In 1997, the medieval Royal Palace of Patan was transformed into Patan Museum.

Patan Museum has launched exemplary projects for the preservation of endangered heritage for various reasons. I can assure you that other museums in Nepal will also follow these initiatives.

The mission of Patan Museum is the interpretation of sacred art, culture, and iconography of Hinduism and Buddhism through preservation and exhibition. The museum is located in the heart of the city. It is categorized as a world class museum for Nepalese traditional art and architectures in Nepal. Nepalese traditional art and architecture are based on two religions—Hinduism and Buddhism. Both religions have their own art and architecture based on their aesthetic values. Patan Museum displays the sculptures and artifacts of both religions. The museum's galleries are organized based on different thematic concepts, such as Hindu art, Buddhist art and architecture, and other Nepalese architecture. A few noteworthy artifacts related to the massive earthquake of April 25, 2015, are also displayed. The museum is dedicated to the development and empowerment of the local community and protection of their cultural property. Since the museum's establishment, it has been working for the promotion, conservation, and preservation of cultural heritages of the surrounding regions. Likewise, it offers support and cooperation in organizing local festivals and events showcasing traditional dance forms, such as the ancient *Kartika nach* (dance), which is a 380-year-old historically important Malla dynasty tradition. *Kartika nach* is important and holds cultural value not only for Lalitpur natives but also for the people of Kathmandu Valley. Patan Museum organized a temporary exhibition for promotion and knowledge enhancement directed toward the community all over the world to connect the museum and the local community. The museum also organized a temporary exhibition of the relics of the nationally recognized Rato Mastyandranath Chariot Festival, which is celebrated in Patan for more than two months (most probably the world's longest chariot festival). In this festival, the head of the country also directly participates. The museum frequently invites artists to perform festival arts in the museum complex. Patan Museum also promotes the local traditional musical instruments through exhibitions and performances. It publishes posters, research articles, and other literature related to local festivals for promotion and awareness. Patan Museum is always promoting the community activities together with performing exhibitions and support to locals to raise awareness about importance of cultural heritages with cultural activities through the tourism.

Challenges

Patan Museum is a financially self-sustainable cultural institution. Sometimes there are misunderstandings with the local people, due to their lack of knowledge about the museum and its associated institutions. Sometimes they want to perform superstitious activities, which goes against the spirit and cultural essence of the museum. At the same time, political parties exert great pressure to carry out their programs. It is very sad when political leaders do not respect the dignity of the cultural heritage and put pressure to hold political programs in the museum and palace premises. Due to such interference, it is impossible to execute all kinds of programs and exhibitions.

Conclusion

Trying our best to convince political leaders and local people, the museum is the best way to develop and protect our traditional values for the community. Since the museum alone cannot do everything, the local and central governments need to pay special attention to the preservation of culture. For this, it is necessary for the government to provide basic financial and moral support. Nonetheless, Patan Museum is doing its best for the protection of tangible and intangible cultural heritage and is attracting visitors as well.

Our past has shown that long-existing traditional festivals may disappear due to natural calamities like earthquakes and epidemics. Therefore, it is important for all of us to be conscious and work together for the protection of the tangible and intangible cultural heritage. Patan Museum believes that the locals are the best ambassadors of the museum. There is thus no doubt that museums and communities are two sides of the same coin. There is still much work to be done to bridge the gap between the museum and the community, which could lead to the significant conservation of endangered property in the days to come and bring the efforts of the museum to fruition.

Thank you.

Patan Museum and Local Community



Sandeep Khanal

Executive Director
sandeepkhnal@gmail.com
Hanumandhoka Durbar Museum, Kathmandu
Department of Archaeology, Kathmandu, Nepal

1

Patan City and Museum



- Patan is city with cultural, traditional arts and 35th world craft city
- Listed in UNESCO world heritage site in 1979
- The existing palace is the work of King Vishnu Malla dated 1734AD. During the ancient period there was fort in that settlement. Thus, the historicity of the palace can be traced a long time back. The first mention of "*Chauko*" in a historic document is from the time of King Siddhinarasimha Malla in 1630 AD. The palace was renovated by King Srinivas Malla in 1674 AD and also by Vishnu Malla in 1734 AD. Since 1997 AD Medieval Patan Royal Palace is transformed to the Patan Museum

2

Patan Museum

- The museum has the collections of more than 1500 artifacts of which some 300 were selected for permanent exhibition and augmented with a few recent additions. The majority of exhibits are sculptures of Hindu and Buddhist deities created in the Kathmandu valley and architectures objects of which many in the nearby workshops of Patan itself. Others originated in India, Tibet, and the Western Himalayas. They are accompanied by written commentary explaining their spiritual and art historical significance as part of the cultural heritage of Nepal. The exhibits are also designed to assist in interpreting the living culture that lies beyond the museum's wall.

3

The mission of the Patan Museum is the interpretation of Sacred Art, Culture and Iconography of Hinduism and Buddhism through preservation and exhibition.



4



•It has most diverse mixture of Temple Architecture, Royal Palace of medieval period (14th to 18th Century)

•The Patan Durbar Square is one of the most valuable and important space regarding its religious, cultural and archaeological value.

5

•Patan museum is open to involve in the promoting traditional culture through the exhibition and oral support to their documentation.

•Patan Museum promote and organize the event for the local community as well as to attract the visitor in the museum. Patan Museum believe that all of the local community are ambassador of Museum.



6

Exhibition and performance of famous *Kartik dance*



7



8

Traditional cultural function were organized in the museum complex and celebrated by local community with other national and international visitors.



9

Locals come to worship the various deities inside the museum premises which shows the close relationship between the museum and the society.



10

Traditional music Performance at Patan Museum Complex



11

Patan city has numerous cultural attraction including tangible and intangible cultural heritages directly related to the museum.



Ghode jatra (horse riding) festival at museum complex

12

Patan museum is the center of reflection of the artistic and architectural skills of the brilliant Newar (*local inhabitants*) craftsmen with traditional carver of Patan.



13

Patan Museum with community



14

The museum complex became safe shelter during the massive earthquake 2015



15

Making process of beaten rice



Performing in front of visitors

16

Challenges

- Major challenge is financial; to organize traditional events to the local community.
- Political pressure
It is very sad when the political leadership does not understand the dignity of cultural value when there is pressure to hold political programs in museums and palace premises.
- Due to the shortage of people with traditional knowledge, it has become a challenge to prepare documents to protect such skills.

17

The Patan Museum is financially self-sufficient, but the current Kovid-19 epidemic has put it in a financial crisis. As a result, government assistance is needed as it is difficult to fully protect and work in the field of the intangible cultural heritage.



18



Thank you
धन्यवाद

19

世界遺産ゴールの要塞 ーコミュニティと歴史を結びつける遺産解説プロジェクトー

ニラン・コーレイ

皆さま、おはようございます。私はニラン・コーレイと申します。現在、スリランカのゴール要塞の復興プロジェクトで、チームリーダー兼保存専門家をしています。

このプロジェクトは戦略的都市開発プロジェクトの一環として、スリランカ政府都市開発住宅省の管轄で行われているもので、私はコンサルタントチームの先頭に立ち、世界遺産であるゴール要塞の保護・紹介を行う役目を担っています。プロジェクトのテーマは「コミュニティと歴史を結びつける遺産解説プロジェクト」です。

本日私がお話させていただくのもこのテーマについてです。世界遺産であるゴール要塞について、それから「コミュニティと歴史を結びつける遺産解説プロジェクト」をテーマにお話したいと思います。

皆さまご存じのように、スリランカは島国で、インド亜大陸の南端の海上に位置しています。そしてゴールはスリランカの一番南にあります。ゴールは港湾都市で、その歴史はかなり古くまで遡ります。16世紀にポルトガル人が到来する以前から既に交易港として栄え、人々が暮らしていました。西暦545年には、航海者であるコスマス・インディコプレウステースが『キリスト教地誌』という著書を出した記録が残っており、この本の中でゴールは港として、そして居住地として記されています。

その後1344年には、イブン・バットゥータというアラブの大旅行家がゴールの港からスリランカに上陸しました。その当時ゴールは石炭港として栄えており、イブン・バットゥータの残した記録にもゴールの港とその近郊のことが書かれています。それから1421年には、明の武将・鄭和がインド洋での遠征の途中にゴールに寄港し、その印として中国語・アラビア語・タミル語の3カ国語で記された石碑が残されています。これを見ると、当時ゴールがいかに重要な場所であったかが分かります。

ですが、ゴールが一躍脚光を浴びたのは16世紀のことです。ポルトガル人が進出してきたのです。彼らは16世紀始めに既にこの島にやって来て、島にある港の各所に要塞を築いていましたが、立派な港を建設したのは1588年のことでした。スライド4は当時の様子を描いた絵です。本土から見た様子を描いたもので、当時ポルトガル人が作った要塞が描かれています。

そして1640年になると、スリランカ人の加勢を得たオランダ人がポルトガル人と激しい戦いを繰り広げた後に要塞を占拠し、1663年に要塞の拡張を完了します。現在の要塞の姿は、このオランダ人が建設・拡張したものが基本となっています。

ですが、オランダ人はポルトガル人の作った要塞を壊したわけではなく、その要塞を拡張して現在の形にしています。その後1796年になると、今度はイギリス人がオランダ人からゴール要塞を奪い取って占拠します。スライド6がその要塞です。小さな岬にあって本土からは離れています。要塞の全景が見えていますが、ここには今も居住地があります。このゴール要塞で最も重要なポイントと言え、14の稜堡とそれらを結ぶ城壁です。

スライド7がその稜堡です。オランダ植民地時代に全部に名前が付けられていたので、今もそのまま同じ名前と呼ばれています。ここに見えるのがオランダ植民地時代に作られた歩道橋で、これが家です。オ

フィスや教会やこういったお店が入っている建物も全部オランダ植民地時代に建てられたもので、今も現役で使われています。

スライド8は要塞の一部で、当時砲火を防いでいたものです。とても歴史を感じさせるもので、この要塞はゴールのランドマークとなっています。ゴール要塞でもうひとつ特に重要な点と言えば、ここが今も居住地だということです。ここは南アジアに今もある要塞化された居住地なのです。今も人々の住むコミュニティがあり、様々な教会があります。モスクもありますし、仏教寺院もありますし、キリスト教の教会もあります。コミュニティも様々で、シンハラ人やイスラム教徒、タミル人、オランダ系スリランカ人のコミュニティがあり、今もみんなこの居住地で暮らしています。こういう場所は他にはありません。このような価値があることから、ここは「歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合体、あるいは景観を代表する顕著な見本である」と定義された、世界遺産の登録基準ivに見事合致した場所となっています。この顕著な普遍的価値が認められ、ゴール要塞は1988年に世界遺産に登録されました。

今回のこのゴールにおけるプロジェクトですが、その主な目的は歴史的な防衛設備に新たな息吹をもたらすことです。要塞であるこの防衛設備を保護・紹介することで、新たな役割をもたらそうというのが狙いです。というのも、今現在この設備は、ポルトガル時代とも、オランダ時代とも、イギリス時代とも違って、防衛目的に使われているわけではないからです。むしろ記念碑的な存在となっており、建築的・歴史的・考古学的・社会的価値があるものとなっています。そこで、この場所を改良して現在の使い方にうまく合わせていこうと思ったのです。スリランカ政府が行っているこの戦略的都市開発プログラムは、世界銀行からの財政支援を受けています。目的は、ゴールの防衛設備が持つ遺産としての価値を伝えることで、住民や一般市民、訪問者が持続可能な形で利用できるように保護することです。

プロジェクトの具体的な内容ですが、まず保存作業に加えて景観保護を行います。それから、稜堡と他の防衛設備を結ぶ歩道や通路網の整備、歩行者が自分で順路どおりに進めるようにするための統一的な標識の設置も行います。また、城壁と稜堡の記念碑的価値や構造についてや、それらの場所が軍事的にどのように利用されていたかをイルミネーションで示す照明設備も設置します。それからこれは当然ですが、特定の稜堡について訪問者向けの解説も設置します。ここにある稜堡はすべて防衛目的に使われただけでなく、地下には火薬庫や丸天井の空間もあります。今は使われていないので、それを保存して解説用に使う予定です。どの稜堡にも、それから城壁沿いにも砲床がいくつもあるので、砲床については、その特徴を捉えていて相互関連性のあるテーマを採用しようと考えています。歴史的な防衛設備についても同様です。火薬庫や守衛室、地下の大円通路、沿岸砲台の砲弾貯蔵庫などがあるので、こういったものを適応的再利用して、解説用の場所として新たな役割をもたらしたいと思っています。

ここを解説場所にうまく変えるにはどうすればいいか、つまり、解説プログラムをどう準備すればいいかということについてですが、これについて私たちは地域コミュニティや関係者の方々の考えを聞くため、会合を何度か開いて検討してきました。そして最終的に、地域コミュニティを中心に全関係者からの同意を得ることができたわけですが、そういった方々からのご意見はとても貴重なものでした。スライド13の黄色い線が散策ルートです。これがぜんぶ稜堡でして、こういった各稜堡に設けようとしているテーマがここに書いてあります。例えば、ムーン稜堡は子供向けの博物館として使う予定で、サン稜堡ではイギリス植民地時代のことを紹介する予定です。それからオールド・ゲート、古い門のことですが、ここは港と接していて巨大な倉庫があります。ですので、ここでは貿易品や貿易について取り上げる予定です。それから、ブラック・フォートではポルトガル植民地時代を、アッカースロート・フォートでは湾と港の眺望を、そしてポイント・ユトレヒト稜堡では国際航路や大陸間航路をそれぞれテーマにする予定です。

フラッグ・ロック稜堡はとても興味深い場所です。ここには植民地時代、ポルトガルが占領していたと

きもオランダが占領していたときもイギリスが占領していたときも、旗が掲げられていました。ですので、ここで掲揚式を毎日行おうと考えました。ライオンがシンボルのスリランカの国旗を儀式的形式で掲揚して、夜間はそれを降ろします。

トリトン稜堡ですが、ここは当時の技術を伺い知ることができる重要な場所です。ここでは風車を使って水、ここでは海水でしたが、その水を汲み上げて居住地に引き入れたり、当時は埃っぽい道でしたので、その水を道に撒いたりしていました。その風車の写真は今も残っています。こういった風車の再建は今回のプロジェクトに組み込まれてはいませんが、今後再建できるよう、発掘調査を行ってその遺構が埋まっている場所も既に確認しています。

ネプチューン稜堡では航海や船との通信について、クリッペンバーグ稜堡ではオランダ式の下水設備について、アイオロス稜堡では地域の生活について、スター稜堡では次々と入れ替わった各植民地時代の軍人の生活について、それぞれ扱います。これは言うてみれば、ゴールという街が持ついくつもの物語をつなぎ合わせて巡っていくようなものです。これによって生き生きとした街になり、こういった場所に息づく記憶を前面に打ち出すことができます。これはなにも地域コミュニティが楽しめるということだけではありません。特に、学校に通う子どもたちや訪問者にとっては、この世界遺産の背景を理解するうえでたくさんの方の気づきを与えてくれます。すべての稜堡が城壁の遊歩道で結ばれているので、訪問者はゴールの要塞都市を隅々まで散策することができます。こうしたプロジェクトは、現在使われていなかったり、十分に活用されていなかったりする歴史的な防衛設備に新たな活用をもたらすだけでなく、訪問者や地域コミュニティを18世紀やそれ以前の時代にタイムスリップさせてくれる大きな可能性を秘めていると思います。

スライド10には色々な種類の砲床がありますが、ここに見えているのはポルトガル植民地時代とオランダ植民地時代に作られたもので、この円形になっているものはイギリス植民地時代に作られたものです。ご覧のように時代によって違ってきています。世界遺産で大事なものは、こういった歴史の様々な積み重ねを見せることです。ですから私たちは今こういった積み重ねがすべて見えるような形で保存をしています。ご覧のように、ここにある砲床は全部種類が違いますし、使っている技術も異なります。

スライド14はゴール港を撮影した昔の写真ですが、ここに木のレールに載ったカノン砲が見えます。回転式で、これに似ています。そこで今考えているのが、こういったカノン砲や大砲のレプリカの作成です。そうすることで、地下にある火薬庫内のスペースを博物館や資料館として使うだけでなく、城壁全体やこのゴール要塞全体も屋外博物館として使うことができます。これは、人々が日々の暮らしの中で関わっていく博物館です。それこそがこのプロジェクトの一番大事な点です。当時使われていた他のカノン砲や砲架がないかも詳しく調査を行いましたので、こういったカノン砲についてもすべてレプリカを作る予定です。レプリカは単に博物館の展示品として作るわけではありません。人々や地域コミュニティ、学校に通う子どもたちにも見てもらい、その動かし方を知ってもらうことも目的としています。

これは一種の体験型博物館で、こういったとても興味深い物を実際に触ることができる場所である一方で、大半の稜堡の地下にあるスライド16のような丸天井の火薬庫を保存するという側面もあります。これがその火薬庫のひとつです。ご覧のように有効に活用されていません。イギリス植民地時代に行われた修復作業が元々の構造にそぐわなかったため、考古学省も持て余していました。そこで私たちは、そぐわないこういった要素を全部撤去して漆喰をはがしてしまいました。そして今は、元々のオランダ植民地時代の姿になるように漆喰を塗り直しているところです。

こういったスペースでは、この場所に貯蔵されていた火薬の入った樽など様々なアイテムを置いて当時の姿を紹介するほか、各時代の日常生活を取り上げた視聴覚プログラムも用意します。この要塞が攻撃を

どのようにくぐり抜けてきたのか、どのように占領されたのか、ここでどのような戦いが行われてきたのか、植民地人が築いた場所でありながらも地域の人々との交流が盛んであったこの要塞で、地域の人々はどのような役割を果たしたのか、といったことを視聴覚プログラムで紹介する予定です。

どれも解説用のスペースとしてとても面白い場所になると思います。プロジェクトはまだ途中段階で、今は保存作業を中心に行っているのですが、その後こういった解説の部分に注力していく必要があります。今ご覧いただいているスライド17のような形で、こういった火薬などの軍事品を置いてスペースを整えようと思っています。火薬の作り方や火薬の成分といったことも全部このスペースで展示・紹介する予定です。

スライド18はイギリス植民地時代の地下貯蔵庫なのですが、カノン砲を動かすのに使われた色々な道具が見えます。こうすれば、この部屋は何の部屋なのか、当時はどんな道具が使われていて、それぞれの道具がどんなことにどんな段階で使われていたのか、といったことを見た人が理解できます。どのスペースも解説全体から見てとても意味のあるものになるわけです。

スライド19もイギリス植民地時代の地下室です。このような形で展示を行いたいと考えています。どのような銃が使われ、どのような道具、防具が使われたのか、実際に使用されたこういったものを全部知ることができます。この時代における軍事の重要性や軍備品を中心に取り上げますが、植民地時代の軍事的歴史だけではなく、社会的歴史であったり、その他の政治的背景におけるゴールの重要性といったものにも焦点を当てていきます。博物館ではこのようなものを展示・紹介する予定です。

また、スライド20のような絵も取り入れて、ゴール要塞が攻められたときの様子も分かるようにする予定です。この史跡が当時はどのように使われていたのか、その様子を地域コミュニティの方々や訪問者、学校に通う子どもたちが思い浮かべやすいよう、こういった絵を色々取り入れようと考えています。先程もお話ししましたが、この全体を、城壁も稜堡も屋外博物館にするつもりです。屋内だけでなく屋外もこの展示の一部にするのです。案としては、ここを屋外博物館として使い、あちこちにこのゴール要塞の模型を置こうと考えています。そうすれば自分の今いる場所が分かりますし、この要塞のレイアウトを立体的に把握することで方向感覚をいっそう高めることができるからです。

ゴールは街として居住地として今も生きています。ですから、このように手を加えたり展示を行ったりすることで、この街の価値が高まることを期待していますし、この活動を通して世界遺産としての価値も高まるものと思っています。この街に暮らす人々、地域コミュニティの方々がこの世界遺産を誇りに思い、その場所に住んでいることを誇らしく思ってくれればと願っています。そこで大事なのは、この要塞の保存に地域の方々の協力を得ることです。地域の協力がなければ保存はできませんし、維持していくのもとても難しいからです。協力することで、地域の方々が自分たちの遺産の持つ価値を十分に感じることができ、ひいてはそれがこの場所を持続可能な形で保存していくことにつながればと思っています。

ご清聴ありがとうございました。

Fortifications of World Heritage Site of Galle: Linking the community with the living history through interpretive presentation

Nilan COORAY

Good morning, everybody. My name is Nilan Cooray. I am the team leader and conservation specialist for the rehabilitation of the Galle Fort in Sri Lanka.

This is a project implemented by the Strategic Cities Development Project under the Ministry of Urban Development and Housing of the Government of Sri Lanka. My role in this project is to lead a team of consultants to conserve and present the World Heritage site of Galle. The whole idea of the project is to link the community with the living history through interpretive presentation.

My presentation is also on the same theme or subject, that is, the fortification of the World Heritage site of Galle, that is, the linking of the community with the living history through interpretive presentation.

As you know, Sri Lanka is an island located at the southern tip of the Indian mainland. And Galle is situated in the southernmost part of Sri Lanka. It is a port city whose history goes back to very early dates; it was a trading port and a settlement before the advent of the Portuguese in the 16th century. It is recorded that in 545 A.D., a navigator called Cosmas Indicopleustes published a book called *Topographia Christiana*, and in this book, Galle is mentioned as a port and a settlement.

Then, in 1344, Iban Batuta, the great Arab traveler, visited Sri Lanka through Galle. Galle was a coal port at that time; this is recorded in Iban Batuta's records about the Galle port and the surroundings. And then in 1421, the Ming Admiral, Cheng Ho, visited Galle during his expeditions in the Indian Ocean. The trilingual inscription written in Chinese, Arabic, and Tamil gives evidence of his visit and shows how important Galle was at that time.

But Galle came into the limelight in the 16th century. The Portuguese arrived on the island in the early 16th century and established their fortifications in different parts of the port, the seaport of the island. They constructed a magnificent port in 1588, and this hand-drawn sketch of that time was drawn with the viewpoint from the mainland (slide4). It shows the Portuguese fortifications at that time.

In 1640, the Dutch captured the Portuguese fort through a fierce battle with the help of the Sri Lankan people, and in 1663, the Dutch completed the expansion of the fort. So, what we see today is basically the fort that was constructed or expanded by the Dutch.

The Dutch didn't take down the Portuguese fort but they expanded it into the present form. And in 1796, the British also captured the Galle Fort from the Dutch and here you can see the fortifications (slide6); it is on a little promontory, away from the mainland. So, here you can see the fortifications all round. It is a living settlement still. The most important aspect of the Galle Fort is that it has 14 bastions and connecting ramparts.

These are the bastions (slide7). During the Dutch period, they named all the bastions and we are still using the same names for these bastions. Here you can see the street bridge which was established by the Dutch and these are the houses, the offices, the churches, and all these commercial buildings which were established by the Dutch and

still continue to be used.

And these are some of the fortifications (slide8); they were used to defend the artillery fire at that time. They are so monumental. The fort is the landmark of Galle. The other most important aspect of Galle is that it is still a living settlement, and in South Asia, we consider this a fortified settlement still living. So, there is a living community with different types of places of worship, including mosques, Buddhist temples, and Christian churches. And there are different types of communities—the Singhalese, the Muslims, the Tamils, the Burghers; they all still live in this settlement. Thus, it is a unique site and because of this value, and especially considering the criterion number iv, it is an outstanding example of a type of building or architectural ensemble which illustrates a significant stage in history. The Galle was declared, or inscribed, in the World Heritage list in 1988 because of this Outstanding Universal Value.

To introduce my project: The main objective of the project in Galle is to give a new lease of life to historic defense works. So, the whole idea is to conserve and give the defense works, that is, the fortifications, a new lease of life because now, unlike in the Portuguese, Dutch, and English periods, the defense works don't serve defense purposes. They are monuments with architectural, historical, archeological, and social value. So, we thought of developing them for current use. The Strategic Cities Development Program of the government is funded by the World Bank. The aim is to conserve these defense works for sustainable use for the enjoyment of the residents and also the general public and visitors through communication of their heritage value.

There are several components in this project. One is the landscaping, apart from the conservation work, and then installation of system of trails or the pathways connecting the bastions and other defense works. Installation of a unified system of signage for wayfinding through self-navigability will also be done. Next is, the installation of a lighting scheme to illuminate the ramparts and the bastions, highlighting their monumentality, architecture, and military use. Then, of course, the establishment of interpretive visitor presentation for selected bastions because all these bastions, apart from their defense use, have underground gun powder storage spaces and vaulted spaces. Since they are currently in disuse, we are now conserving them and using them for the interpretive presentation. So, the idea is to use specific but inter-related themes associated with gun emplacements, because there are several gun emplacements in all the bastions and also in the ramparts and along the ramparts; and there are also the historic defense works such as the powder magazines, the guard room, underground vaulted passages, and the coastal battery ammunition bunkers. Thus, through adaptive re-use, we will revive them for interpretive presentation.

We had several meetings with the stakeholders to get ideas from the local communities and the stakeholders on how to develop this as an interpretive—I mean, how to prepare a program of interpretive presentation. With the agreement of all these stakeholders, especially of the local community, and their input is greatly valued, this plan was finalized. This yellow line shows the visitor trail (slide13). So, these are the bastions, and these are the themes that we are going to use for each bastion. For instance, the Moon Bastion will be used as a children's museum and then the Sun Bastion to depict the British era, and this old gate is the Old Gate and it is connected with the harbor and there is a huge warehouse of trade goods, the trading will be highlighted in that area. And then the Black Fort will be developed to present the Portuguese era, and then Akersloot Bastion, the bay and harbor vista; and this Point Utrecht Bastion for international, intercontinental trade routes.

Then, the Flag Rock Bastion is very interesting because it is the location where, during the colonial period, flags were hoisted in the respective periods, whether it was Portuguese, Dutch, or English. So, here we thought of having a flag ceremony on a daily basis, so that the Lion Flag, that is, the Sri Lankan flag, will be hoisted ceremonially. It will be taken down during the night-time.

Then, the Triton Bastion is important because it shows the technology during that time, because a windmill was used to bring water, the sea water into the settlement, to sprinkle onto the dusty streets at that time. We still have the photographs of that windmill. Although it is not part of our project to reconstruct this type of windmills, we have excavated and identified the location for such elements to be reconstructed at a later stage.

Next, the Neptune Bastion was used for navigation and communication with ships, and the Clippenberg Bastion was for the Dutch sewage system, and the Aeolus Bastion was for the local life, and the Star Bastion was for the military life of different succeeding colonial occupations. So, it is a kind of a visitor's journey that strings together several stories of Galle, so that it becomes a kind of a living city highlighting the living memory of these places. So, it is not only for the enjoyment of the local community, but it will provide great awareness especially for school children and also for the visitors to understand the context of this World Heritage site. Owing to features like the rampart walks connecting all the bastions and the visitor trails along the whole periphery of the fortified town of Galle, this entire museum has a tremendous potential to take the visitors and the local community back in time to the 18th century and beyond in addition to giving a new lease of life to historic defense works currently in disused or underutilized conditions.

These are some of the gun emplacements of different styles (slide10), and here you can see that these were developed during the Portuguese and the Dutch periods, and the circular ones were constructed during the British period. Here you can see the different layers. What is important in a heritage site is to display the different layers of the history of that place. So, we have now conserved in such a manner to display all the layers and here you can see all these gun emplacements of different types using different technologies.

And here is an old photograph of Galle port (slide14) and here you can see one of these cannons mounted on a timber rail. It is a rotating one, similar to this one. So, what we are thinking of is to replicate this type of cannons and artillery guns, so that not only the internal spaces of the underground powder magazines can be used as museums or interpretive centers but also the whole rampart and the Galle Fort as a whole can be an open-air museum. It's a museum that people can engage with in their day-to-day life, that is the most important thing in this project. And also, we have done a lot of research to identify the different types of cannons and mounting carriages that were used at that time and so we are going to replicate all these cannons, not only to display as museum pieces but also to show the people and the local community, the school children, how they operate.

So, it is a kind of a working museum where people interact with these objects which are very much interesting and the other aspect is the conservation of all these underground vaulted gun powder magazines in most of the bastions (slide16). So, this is one of them. So, here you can see it is underutilized and the repair works that were done during the British period were not compatible with the historic structure and it is poorly used by the Department of Archeology, so what we are doing is now, we have removed all these items which are not compatible and removed the plaster and now we are replastering it as in the original Dutch period.

And then we will use these spaces to show how these spaces were used at that time by installing different types of the gun powder barrels and other items that were stored at these spaces. And also we will have audio-visual shows in these large spaces about the daily life in different periods, how the fort has survived in the attacks and how it was captured and what type of battles took place. Although it was a colonial fort, there was a lot of interaction with the local people at that time. The role of the local people in this fort and other such aspects will be presented visually through audio-visual presentations.

So, we believe that these are all very interesting spaces for interpretive presentations. The project is in the halfway

mark; the conservation work is now progressing and then we need to concentrate on these aspects, that is, the interpretive presentation. So, here you can see (slide17) how we are thinking of developing these spaces to install all these military items related to the gun powder, showing how the gun powder is produced and what are its ingredients. All these things will be displayed and presented in these spaces.

So, this is actually a British period underground bunker (slide18) showing the different types of tools that were used to operate a cannon so that people will get an idea what type of tools were in use at that time and their role and at what stage they were being used. That means all these spaces will be very meaningful for the whole interpretive presentation.

And this is also a British period underground space (slide19). This is actually an image of the type of presentation we want to make in Galle, so that people will get an idea about the type of guns, type of gear, protective gear, and all these types of things that were in use. The intention is to highlight the military value and the military equipment of this period. But we are not limiting the project to the military history of the colonial period; we will also highlight the social history and Galle's significance in the rest of the political context. All these things will be presented and discussed in these museums.

And then there will also be these types of visuals, the drawings, to depict attacks on Galle Fort (slide20). So, we are planning to have different series of these types of images to recreate in the minds of the people, the community, and the visitors, the schoolchildren, how these historic spaces were used at that time. This whole area including the ramparts and the bastions will be treated as an open-air museum. Not only the internal spaces but the outdoor spaces will also be part of this presentation, so what we thought was that we will use this as an open-air museum. We are going to install the models of the Galle Fort at different locations, so that people can understand the three-dimensional form and layout of this site and have better orientation.

Because Galle is still a living city, a living settlement I would say, with these interventions and these presentation elements, we hope that Galle will gain an added value, and the heritage value will be enhanced through this activity. We hope the people of Galle, the residents, the local community will be proud of the heritage, and they will also be proud to stay within that heritage site. The whole idea behind this project was to get their cooperation for the preservation of this fort because without the cooperation of the people, preservation is very difficult to sustain. So with the help of the local community, we hope that they value their own heritage and then it will pay dividend for its conservation in a sustainable way.

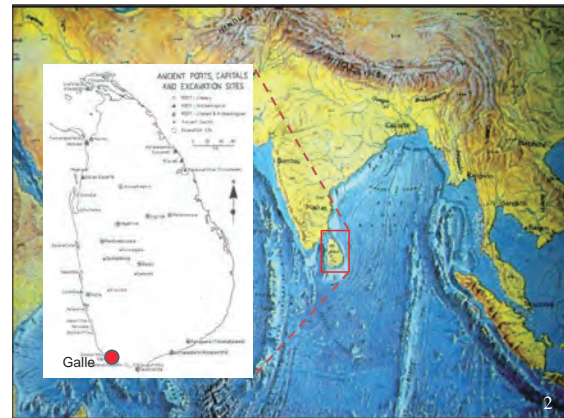
Thank you very much for your patience.

Fortifications of World Heritage Site of Galle:

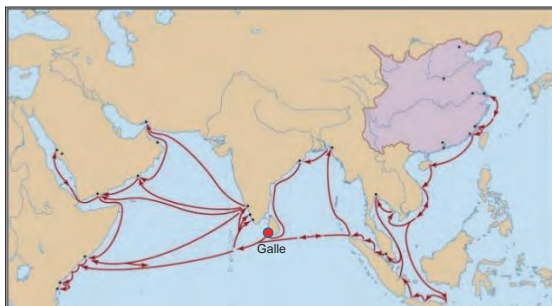
Linking the community with the living history through interpretive presentation

Nilan Cooray, Ph.D
Team Leader and Conservation Specialist
Rehabilitation of the Fortifications of Galle Fort
Strategic Cities Development Project
Ministry of Urban Development and Housing
Government of Sri Lanka

1



2



• Already a Trading Port and a Settlement before the advent of the Portuguese in the 16th century

- 545 AD: Cosmos Indicopleustes mention the port and the settlement
- 1344: Visit of Ibn Batuta, the Great Arab Traveller
- 1421: Ming Admiral Cheng Ho called in at Galle as recorded in the trilingual (Chinese, Arabic & Tamil) stone inscription

3



• 1588: Portuguese established the first Fort

4

- 1640: Dutch capture the Galle Fort
- 1663: Dutch complete the expansion of the Fort



5



□ 1796: British capture the Galle Fort

6

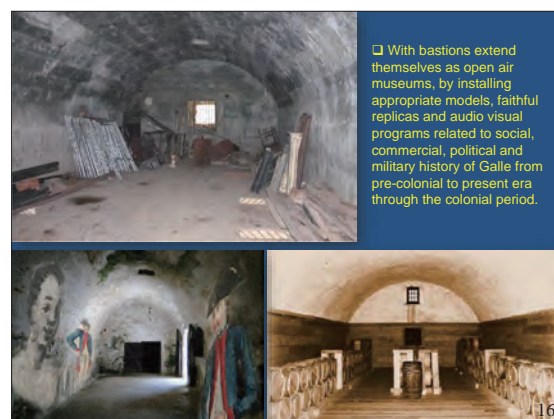
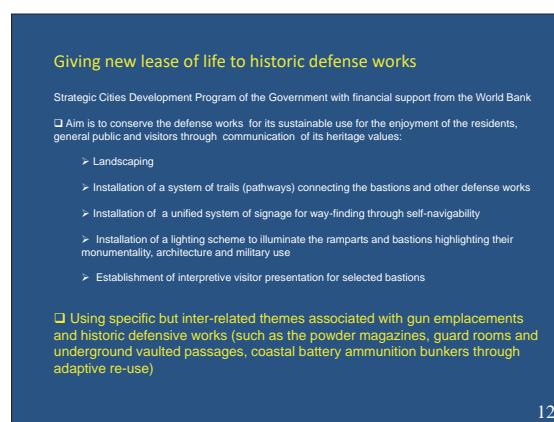
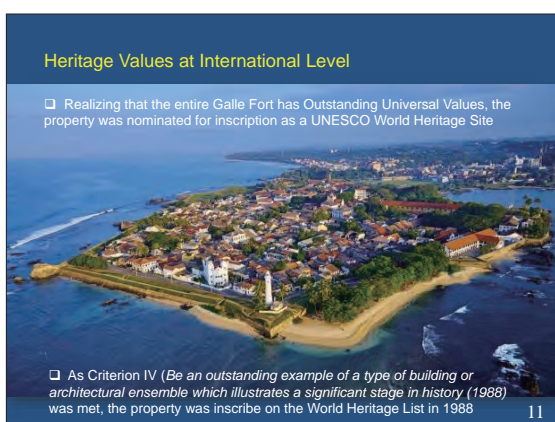
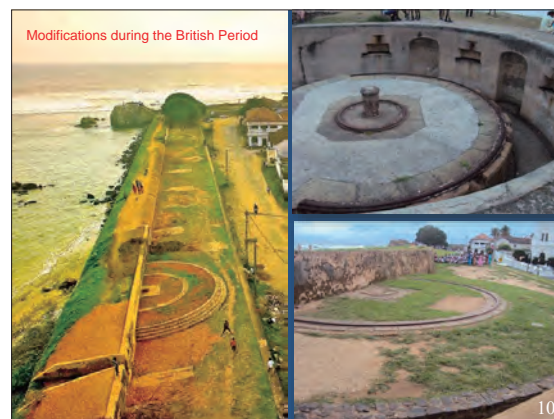
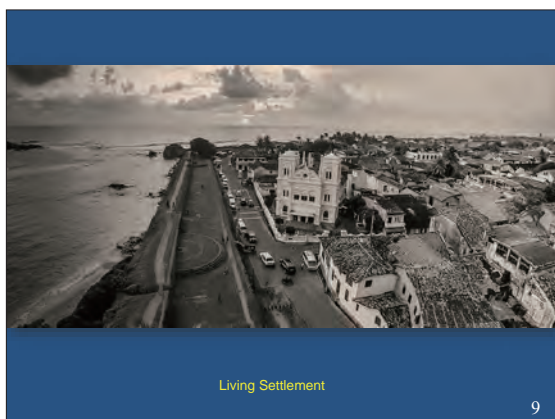


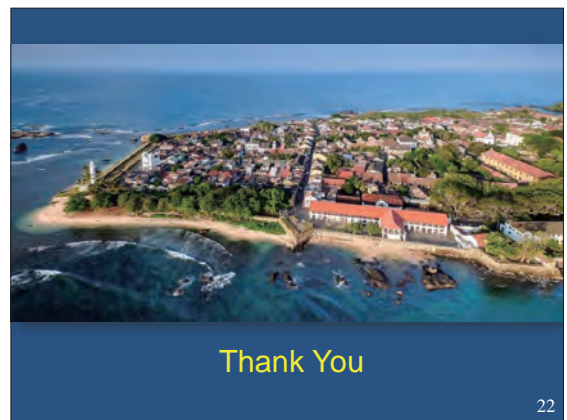
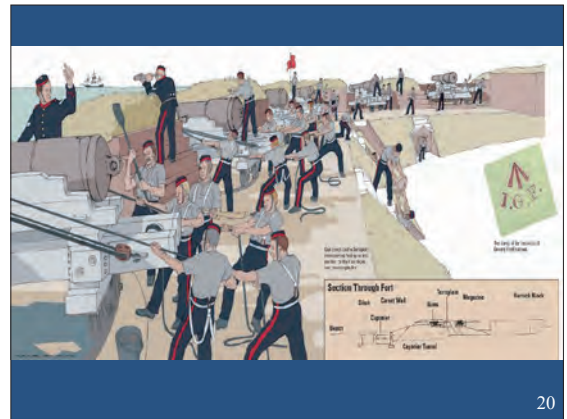
7



Defense works

8





ウズベキスタン国立歴史博物館 －文化遺産保存の中心として－

オタベック・アリプトジャノフ

国際会議にご参加の皆様、こんにちは。まず、このように貴重な会議に参加する機会をいただいたことに感謝申し上げます。

私は、ウズベキスタンから来ましたオタベック・アリプトジャノフです。ウズベキスタン国立歴史博物館で副館長を務めています。中央アジアの考古学を専門としています。本日は、ウズベキスタン国立歴史博物館における文化遺産の保存活動についてご紹介したいと思います。

ご承知のとおり、博物館は、様々な層の来館者とのコミュニケーションに重点を置きながら、文化遺産の保存に極めて重要な役割を果たしています。研究だけでなく、他機関との共同作業もその役割における重要な活動となります。本日は短時間ではありますが、当館の沿革、文化遺産の修復活動や、学術機関、博物館、研究者を含めウズベキスタンの歴史に関心を持つ関係者との文化遺産保存の共同活動などについてお話させていただきます。

ウズベキスタンはアジアの中央に位置しています。さらに言えば中央アジアの真ん中に位置している国でもあります。ウズベキスタン、というよりも中央アジアは、古代からの歴史を有し、かつては文明の十字路ともいえる、東西が交わる場所でした。現在のウズベキスタンの領域には、分かっているもので約8000の文化遺産があります。それら文化遺産は、フェルガナ盆地、タシケント地域、テルメズ、ブハラ、ヒヴァなどをはじめ各地に点在しています。

博物館はウズベキスタン文化省に属しており、その数は現在350館を超えています。また一部、ウズベキスタン科学アカデミーに属する博物館もあります。例えば、当館、ウズベキスタン国立歴史博物館がそうです。その他アミール・ティムール博物館とアリシエル・ナヴォイ文学博物館の2館の計3館が科学アカデミーに属しています。

当館は、1876年に中央アジア地域において初めて設立された博物館であり、中央アジア最大級の科学教育機関です。1943年から科学アカデミーの構成機関となっています。文化省に属する博物館との違いは、ウズベキスタン国立博物館は、遺物の保存や展示だけでなく、研究にも注力している点です。スライド4の写真は、タシケント市の中心部に位置している、以前博物館が入居していた趣のある建物です。ウズベキスタン国立歴史博物館は、設立から約140年間で、34万点以上の資料を収集しています。その大半は、考古学資料、貨幣、民族学関連資料、その他様々な遺物、そして公文書などとなっています。当館は、19世紀末から20世紀にいたるまでの、膨大な量の公文書を所蔵しています。

主な研究分野についてです。当館は、いくつもの性格を持つ科学機関です。たとえば、ウズベキスタンの文化や文化遺産の研究を行う科学機関というだけでなく、文化的価値がある資料の最大の保管場所であり歴史的価値の発信拠点でもあります。その他にも、学術論文、情報誌等の作成と発表・発行も行っていますし、文化遺産の保存科学や来館者との共同作業などにも力を入れています。

スライド7の写真は、現在の建物になります。旧レーニン博物館の建物です。1991年ウズベキスタンの独立後こちらの建物に移動、新たな展示に向けた準備を開始しました。それから約10年準備に取り組み、

ようやく2003年に新しい展示を開始しました。その新たな展示では、石器時代から独立までのウズベキスタンの歴史を伝える1万点以上の展示物を紹介しています。

この展示は大規模で、スライド8のとおり複数のセクションに分かれています。石器時代、青銅器時代、ウズベキスタンの領域における古代、古代末期、中世初期、ティムール朝ルネサンス期などといったように時代ごとに区分されています。

スライド9は、展示フロアマップです。展示会場は3階と4階です。来館者が、周回するような形で展示物を見学しウズベキスタンの歴史を学ぶことができるようになっていることがお分かりいただけると思います。

また、当館はウズベキスタン特有の遺産も所蔵しています。これらは、研究者や来館者だけでなく、学生や小学生の子供たちにとっても非常に重要なもので、私たちは、例えばウズベキスタンの歴史に関することなど特別講義を定期的に行っています。学校から協力依頼や特別講義の要望があった場合にも、生徒を招待し、展示物について特別講義を行っています。スライド10の上の写真は、セルウングル洞窟で発見された人類祖先の歯と骨です。下の写真は、ウズベキスタンの領域において有名なオビラハマート洞窟で発見された古代人の遺骨です。

青銅器時代の遺物もあります。スライド11の左側は、フェルガナ地域で発見された2匹の蛇を模した彫刻です。特有の遺物の一つで、本館所蔵のこのタイプの遺物は青銅器時代のみにもみられるものです。もう一方の写真の青銅遺物は、サパリ・テパで発見されたものです。こちらも紀元前三千年紀に作られたものです。

ウズベキスタンの南部にあるファヤズ・テパ遺跡の仏教寺院跡から発見されたスライド12の三尊仏を見学するために来館するのは、おそらく大半が日本と韓国からの旅行者ですが、ここ数年では中国からの旅行者も来館するようになっています。クシャーナ朝時代、ウズベキスタンの南部地域では多くの場所で仏教寺院が建設されており、当館研究者は50年以上にわたり、ロシア、イタリア、日本の様々なチームと共同で発掘調査を行っています。

先ほど述べたように中央アジア地域は、かつて文明の十字路であり、東西が交わる場所でした。例えば中国で作られた特有の青銅鏡が発見されています。スライド13の真ん中の青銅鏡は、コクテパ遺跡で発見されたものです。ご承知のように、これらの遺物の多く、例えば中央アジアで発見されている彫刻などは、粘土が使われています。もちろん、石造彫刻も発展していましたが、この時代の一般的な原料は粘土でした。建物、彫刻を始めいろいろなものを作るのに使いやすかったためです。

当館の貨幣コレクションの所蔵量は、中央アジアでも最大級となります。現在、その数は10万枚を超えており、紀元前4世紀から20世紀にいたるまでの貨幣を所蔵しています。スライド14の写真はその一部ですが、中央アジアの歴史を映し出しているものばかりではなく、ギリシャの貨幣や、アジアの他領域で作られた貨幣なども含まれており、貨幣鑄造の歴史を知ることができます。

民族学関連資料の所蔵量も最大級の規模であり、約1万8000点となります。その多くの衣服や装飾品からは、ウズベク人の歴史だけでなく、カザフ、トルクメン、タジク、キルギスやドンガン族などの歴史を知ることができ、これらの所蔵品に多くの研究者たちが高い関心を寄せています。私たちは、目録や学術論文など様々な出版物を作成、発表・発行しています。それらは、当館を認識、理解してもらうため、そしてより多くの人に来館してもらうために、とても重要なことなのです。

次に発掘調査についてです。遺物の写真をご紹介してきましたが、それらを含め展示している遺物の約8割が、発掘調査で発見されたものです。当館の発掘調査は、1930年代より現在に至るまで長い歴史があります。本館には、これまでM.E. マッソン、T. ミルギヤゾフ、V.I. スプリシェフスキー、Yu.F. ブリヤコフ

を始め、著名な考古学者が所属し、様々な地域において各時代の遺跡の発掘調査に取り組んできました。

また、生涯を終えるまで本館に所属し長年にわたり活動が続けていた研究者がラザル・アルバウム氏です。非常に著名な研究者でした。彼は非常に運を持った人で、カラ・テパ遺跡、ファヤズ・テパ遺跡、ダルヴェルジン・テパ遺跡、サバリ・テパ遺跡など名だたる遺跡を発見しました。また、アフラシアブで壁画を施してある部屋も発見しています。そこに描かれている壁画は世界的にも有名なものとなっています。

スライド18の写真は、発見当時の保存修復作業の様子を撮ったものです。そして、これらが皆様に今日お見せしたかった写真です。これまで一度も公表したことのないものです。当館同僚のアーカイブに保存されていた写真です。発見された当時の様子、壁画保存修復に取り組む姿などが分かると思います。スライド19には保存修復士が見えると思いますが、切取前に壁画の修復を行っているところです。スライド20は切取前に複数の画家が壁画を模写する様子を撮った写真です。スライド21の写真は実際の壁画です。現在この壁画は保存され、サマルカンドのアフラシアブ博物館に展示されています。ウズベキスタンを訪れた際には、ぜひ、アフラシアブ博物館でこのすばらしい壁画を見学してみてください。この壁画は、アジアの歴史に関する重要な情報を伝えてくれているのです。

アルバウム氏が発見した別の遺跡が、バラリク・テパ遺跡です。ここでも壁画を発見しています。スライド23の写真は壁画の一部ですが、残念なことにこの壁画の部屋は古代に火事に見舞われたため、一部の断片だけが、レプリカと共に当館とテルメズ考古学博物館に所蔵されています。

スライド24は、古代のテルメズの地図です。ウズベキスタンの南部に位置し、アフガニスタンとの国境に接する地域です。アルバウム氏を始め当館の研究者、考古学者たちが、この地域、主にファヤズ・テパ遺跡で発掘作業を行っています。スライド25の写真は、ファヤズ・テパ遺跡の保存事業に関するものです。この保存事業は、ユネスコの日本信託基金を通じたプロジェクトであり、多くの研究者たちによって取り組みが進められました。残念なことに壁の一部は損壊しています。私たちは、このような遺跡を長期保護していくためにどうすべきか検討する必要があると思います。

そして、スライド26は、再び展示の様子を撮った写真です。それから過去の様子になりますが、博物館でスタッフが保存作業や展示の準備を行っている様子を写したものです。

スライド27は壁画の一部の写真です。どのような形で三尊仏が発見されたのかが分かると思います。また仏像の背景に壁画が描かれていることが確認できると思います。スライド28も有名なもので、ファヤズ・テパ遺跡で発見された壁画です。

近年の発掘調査についてですが、まず、日本で東京大学総合研究博物館の館長を務めている西秋教授との国際的共同発掘調査について、お話ししなければなりません。西秋教授は2013年からアジアの石器時代に関する調査を行っています。私たちは毎年、ウズベキスタンの南部地域で共同調査を行っており、ここ5年間は主にマチャイ溪谷で調査を行っています。そこでは「カイナル・カマル (Kaynar Kamar) 岩陰」という重要な遺跡を発見し、中石器時代から古代にかけてできた13の層を確認しました。残念ながら今年は新型コロナウイルス感染拡大のため、この共同発掘調査はすべて延期となってしまいましたが、来年は共同調査を再開できることを願っています。

続いて、子ども博物館についてお話しします。当館内に2011年に新しい博物館を開館しました。当館の一角に4歳～14歳の子どもたちを対象として開設した、初めての子どものための博物館です。子どもたちは、ここで遊んだり、展示物に触れたりすることができます。また、考古学者の疑似体験もできます。発掘作業のように対象物や場所を掘りあて、歴史を理解していくコーナーを設けています。これは、子どもたちと接しながら、歴史を保護すること、歴史について考えることの重要性、遺物の取扱いのあり方などを教える必要があると考えるからです。そうすることによって、将来、その中から歴史学者が生まれる可能性も

あります。また、博物館で働くことに興味を持つ子もいるでしょうし、考古学者になる子がでるかもしれません。ですから、この子ども博物館は、子どもたちに歴史を教える上で非常に重要な役割を果たすと私は考えています。

国際協力についてですが、この3年間様々な機関、博物館と協議し、2018年～2022年を対象期間とするものを含め計12件の覚書・協定に調印しました。例えば、共同調査を行っている日本の東京大学総合研究博物館、シカゴ大学や、上海博物館など中国の博物館、韓国国立中央博物館やその他の研究機関と、もちろん主に文化遺産保存のための情報交換など協力に関する覚書・協定を結びました。そして、韓国や中国の博物館と共同でいくつもの展覧会を開催しました。それらについてはこの後ご紹介します。

国際展覧会はとても重要です。スライド32は、韓国の国立博物館、国立民俗博物館と初めて共同で開催した展覧会の1つとなります。当館ホールでは、特別韓国展を開催しました。

そして、この2年間に中国の博物館と3つの大規模展覧会を実施しました。その一つがスライド33の上海博物館と共同で「Blue and White – The Glory of the Silk Road」と題して行った展覧会で、非常に興味深い展覧会となりました。上海博物館は珍しい展示物を展示するとともに、会場にタッチスクリーンや特別な3Dモニターを設置し、来場者はインタラクティブな展示を楽しむことができ、とても満足していました。

また、スライド34のように中国社会科学院との共同展覧会も開催しました。過去5年間のフェルガナ盆地での発掘調査や当館と中国社会科学院考古学研究所がサルマカンドで行った共同調査に関する成果報告のような内容の展覧会となりました。また、当館でもフェルナガ盆地の発掘調査で発見された遺物を堪能できる展覧会を行っています。

スライド35は、月氏に関する展覧会です。西安の西北大学の王（ワン）教授らと共に開催しました。西北大学は、ウズベキスタンの南部地域で発掘を行い、遊牧民族について調査しています。発掘調査では、数多くの遺物を発掘しており、それらの特別展覧会も行い、多数の研究者たちが関心を寄せていました。

最後にご紹介する国際展覧会は、スライド36の「Return to Bukhara: cultural heritage from the burial of General An Pu and his wife during the rule of the Tang Dynasty」と題した展覧会です。将軍・安菩は、中央アジア出身のソグド人であったので、洛陽博物館からも非常に貴重な展示物が提供され、展覧会は約3カ月開催されました。多くの人が関心を寄せていました。なぜなら、中国のソグド人は独自の文化を持っていたことから非常に重要な研究対象となっており、彼らの駱駝の彫刻は古代中国と中央アジア間の関係を研究する上で非常に重要な役割を果たしているためです。

文化遺産の保存に関して、当館もかなり取り組んできました。最初に紹介する事例は、日本の青木教授・古庄氏と共に取り組んでいるプロジェクトです。彼らと共に大規模なプロジェクトに取り組みました。歴史博物館に若い保存修復士、研究者や考古学者を集めて実施しました。ジャパンファウンデーションが創設し、3年間、参加者全員が考古学資料の保存、修復方法について学びました。また、東京文化財研究所から特別講師を招き、蛍光X線分析のように新しく特別な分析方法の使用について講義を行ってもらっています。

それから、このプロジェクトでは、いくつかの論文を作成しました。スライド38の写真は、東京文化財研究所が仏像や絵画などの彩色材料を調査しまとめた報告文書です。

スライド39は、また別のプロジェクトです。日本の協力者と共に実施していたプロジェクトを継続するような形の取り組みを導入することができました。シカゴ大学東洋研究所と共に2018年からの2カ年プログラムをスタートさせています。これも遺跡・遺物保存のためのプロジェクトです。こちらには、ウズベキスタンとタジキスタンやキルギスなどの近隣諸国から合計で13名が参加しています。実はこれは、当館

が中央アジア全域を対象として実施した初めてのプロジェクトです。

そして、ちょうど1年前になりますが、当館の分館となる新しい博物館を開館しました。それがスライド41のタシケント博物館で、タシケントの歴史を学ぶことができます。タシケントはウズベキスタンの首都で、当館も位置しており、私自身の住む市でもあります。これまでタシケントには、このような（タシケントの歴史を伝える）博物館はありませんでした。ウズベキスタン科学アカデミー考古学研究所の協力を得て、当館研究者と共に約1年でこの分館展示を準備しました。大きな博物館ではありませんが、ここに来れば、石器時代から16世紀までのタシケントとこの地域の歴史を知ることができます。また、この分館には地域の人たちの働き方や暮らし方を紹介する部屋を設け、工芸職人に関するコーナーも設置しています。ここに来れば、陶器を作ることもできます。特別な展示室があります。展示ではタッチスクリーン、3Dモニターやプロジェクターといった新しい機器を備えており、ここではタシケントの歴史についてより多くの情報を得ることができるようになっています。

コミュニティとの協力も非常に重要です。私たちは、多くに取り組み、様々なことを行っています。例えば、数カ月前に、当館に新しく2つの部門を設置しました。コミュニティと協力する展示部門と、博物館の観光管理を担当する部門です。

この2つの部門は、来館者への対応も行っています。来館者の年齢層が多岐にわたるためです。例えば、当館の子ども博物館では、幼稚園から子どもたちがグループで訪れ、遊ぶことができます。また、そのような小さな来館者に分かりやすい言葉で歴史について説明する特別ガイドも実施しています。さらに、学生の方々、研究者それぞれを対象とした特別ガイドも行っています。中央アジアやウズベキスタンの仏教美術に興味のあるグループが来館することもあります。その調査を行っている専門の研究者もいます。

時々ですが、古代歴史や遺跡発掘調査について知りたいと来館する方々に対しては、私もガイドを行うことがあります。より人々に近づけるよう取り組み、また人々への対応の仕方を理解する必要があると思っています。なぜなら当館への来館者は、関心を持つ点も様々で、年齢層も異なる方々だからです。来館者の大半は、歴史学者でも美術を研究している人たちでもありません。一般の方々です。ウズベキスタンの一般の住民や、観光で訪れている人たちです。それらの人々は、歴史を知りたいと思って来館します。ですから、その人たちへの説明の仕方を知る必要があります。例えば、難しすぎる言葉を使ってははいけません。また歴史を伝え、興味を引くストーリーを伝える必要があります。当然、友だちなど誰かと一緒に来るはずですが、そう考えると、時々展示を変え、新しい展示物を展示することがとても重要だと考えます。

それから、当館はウェブサイトを開設しており、常に更新して最新の情報を発信しています。またウズベキスタン独立記念日やウズベク語の日など国の重要な記念日をお祝いしており、例えば5月18日の国際博物館の日には、夜間の開館を実施しています。私たちは、10年前よりもより多くの人達に来館してもらおうと取り組んでいます。そして来館者の数は増え続けており、現在年間来館者は約15万人となっています。もちろんこれはそれほど多い数ではありません。ですから来館者増加に向け取り組みを続けてはいますが、残念なことに、新型コロナウイルス感染拡大を受け、長期にわたり休館していました。ちょうど1カ月前に再開したところですが、来館者は多くありません。スタッフ、来館者を支え続ける必要があります。来年春には通常の開館状態に戻り、各国の渡航制限が解除され移動が自由になり、人々が来館してくれることを切に願い、当館の皆がそれを待ち望んでいます。どうぞ、その時には、ウズベキスタンの歴史への理解を深め、中央アジアの人々に関する多くの情報を得ることができるウズベキスタン国立歴史博物館にぜひ来館ください。

これで私の講演は終わりです。ご清聴ありがとうございました。

The State Museum of History of Uzbekistan as a Center of Preservation of Cultural Heritage

Otabek ARIPDJANOV

Hi, dear friends, colleagues, and the participants of this workshop. To begin with, I would like to thank you for inviting me to participate in this very interesting and important meeting.

My name is Otabek Aripdjanov. I am from Uzbekistan. I work at the State Museum of History of Uzbekistan. My position is the Deputy Director of Scientific Affairs. My background is the archaeology of Central Asia in antiquity, and today I will give a presentation about the preservation of cultural heritage at the State Museum of History of Uzbekistan.

As you know, museums play a very important role in the preservation of cultural heritage in communication with the different layers of the people visiting our museum. Also, one of the important functions that museums fulfill is collaboration with other institutions, not only with research institutes but also with other museums. In my short speech I am going to tell you about the history of our museum, the restoration of the cultural heritage at the museum, and how we are working with scientific institutions, other museums, researchers, and people who are interested in the history of Uzbekistan for the preservation of cultural heritage.

Uzbekistan is located in the center or, we can say, in the heart of Central Asia (slide2). Uzbekistan, and indeed all of Central Asia continuously from ancient times, was on the crossroad of civilization and functioned as a kind of connection between the east and the west. About 8,000 objects of cultural heritage are registered within the territory of Uzbekistan, which you can see here, in different areas of the nation like Fergana Valley, Tashkent region, Termez, Bukhara, Khiva and so on.

Almost all the museums belong to the Ministry of Culture, and now at the Ministry of Culture, we have more than 350 museums. Three museums belong to the Academy of Sciences. That includes our museum, the State Museum of History. The other two are Amir Timur and the Literature Museum of Alisher Navoi.

Our museum is the first museum of Central Asia. It was established in 1876. It is a large scientific-educational institution. In 1943, our museum became a part of the Academy of Science. The difference between our museum and the museums of the Ministry of Culture is that we concentrate not only on preserving or exhibiting the artifacts, but also on studying them. Here in this picture (slide4), you can see our old building, a very unique architectural monument in the center of Tashkent city. In over 140 years, the State Museum of Uzbekistan has accumulated more than 340,000 objects. Mostly these are archaeological objects, numismatic and ethnographic objects, some other artifacts, and archives. We have a huge archive dating from the end of 19th till the 20th century.

Main areas of research: The museum is a scientific organization having many profiles. For instance, it is a scientific institution for studying the cultural heritage of Uzbekistan, it is the largest storehouse of objects of historical and cultural value, and a center for appealing historical meaning. Additionally, we publish scientific and popular papers and focus on cultural heritage and conservation science. We also work with museum visitors.

Here you can see our building (slide7). It was formerly occupied by the Lenin Museum. After the independence of Uzbekistan in 1991, we moved to this building, and for around 10 years our researchers worked to build the new exhibition. Finally, in 2003, the new exhibition was opened, and if you visit our museum, you can see the exhibition has more than 10,000 objects, telling the history of Uzbekistan from the Stone Age to independence.

The main exhibition on the history of Uzbekistan is divided into several parts, for instance, the Stone Age, Bronze Age, Antiquity, the Middle Ages, Early Middle Ages, Amir Timur, and other periods (slide8).

This is a map of the exhibition (slide9), which is located on the third and the fourth floors. You can see visitors studying and learning history from the circular exhibition.

In our museum, we have unique objects that are very important for not only researchers but also visitors, students, and schoolboys and schoolgirls. We give special lectures on the exhibitions, for instance about the history of Uzbekistan. If any schools want to work with us or organize an educational session, we just invite them to the exhibition and give a special lecture. These are human remains from the Selungur Cave (slide10), those are teeth and the bones, and the remains in the second picture are from the Obirahmat, also one of the famous sites in the territory of Uzbekistan.

Other unique objects date from the Bronze Age (slide11). This is a sculpture of two snakes from the Fergana Valley. It is one of our unique objects. We have these type of objects from the period, and the other bronze objects are from Sappalitepa. They also date from the third millennium BC.

I think most of the Japanese and Korean tourists, and from the last few years, Chinese tourists, visit our museum to see this sculpture of the Buddha with monks (slide12) that was discovered from the Fayaztepa Temple, located in the south of Uzbekistan. Since from Kushan times the territory mostly in the south of Uzbekistan had several Buddhist temples, our researchers excavated that region for more than 50 years together with different teams from Russia, Italy, and Japan.

As I mentioned before, many territories in Central Asia were on the crossroads of civilizations, connecting the East and West. Therefore, we have unique bronze mirrors from China. Here you can see them (slide13). They are from the Samarkand region. The middle one is from Koktepa. As you know, most of the objects, for instance, sculptures in Central Asia, were made of clay. As for stone craft, of course it was developed, but the common material was clay, and it was easy for craftsmen to make or to use clay for building, for sculptures, and for other things.

This is the numismatic collection, one of the hugest in the Central Asia (slide14). Up to now, we have collected around 100,000 coins dating from the 4th century BC to the 20th century. Here you can see them. Not all are connected to the history of Central Asia. Some coins we have are from Greece or from other territories of Asia. They reveal the history of coin making.

Regarding the ethnographic collection, also one of the hugest, it has about 18,000 artifacts, mostly clothes and jewelry, telling not only the history of the Uzbek people, but also our neighbors. For instance, we have collections from the Kazakh, Turkmen, Tajik, Kyrgyz, and Dungan people, and many researchers are very interested in these collections. We prepare and publish different catalogues and scientific papers, which are very important to understand and make in order to invite other visitors to our museum.

Archaeological expedition: About 80% of the artifacts in the exhibitions were found during archaeological expeditions. This museum has a very long history of archaeological expeditions, from 1913 to the present. We had very famous archaeologists like Masson, Mirgiyazos, Sprishevsky, Buryakov, and others who excavated in different

regions in different period sites.

Another researcher who was working in our museum for a long time till the end of his life was Al'baum. He was very famous. He was a very lucky person because he discovered famous sites like Kara Tapa, Fayaz Tapa, Dal'verzin Tapa, and Sapallitepa, and also he discovered the mural painting room in the Afrasiab. It was one of the famous wall paintings in the world.

Here you can see some pictures of the reconstruction from the time he discovered them (slide18), and here are some pictures which I would like to share with you because these pictures were never published anywhere. They are from the archives of our colleague. They show how they discovered the wall painting and how they worked on the conservation site. Here you can see the conservators (slide19), how they fixed the wall mural painting before cutting it out. And here are some painters who made copies before the mural paintings were taken out (slide20). Here you can see the original (slide21). Now this old wall painting is stored and exhibited at the Afrasiab Museum in Samarkand and if you visit Uzbekistan, I would like to invite you to this museum to see this old, amazing wall painting, revealing very important information about the history of Asia.

Another site which he discovered, Balalik Tapa. He found these mural paintings. Here you can see some drawings (slide23). Unfortunately this room was burnt in antiquity, but we have some fragments in our museum and Termez's Archaeological Museum, and of course some replicas.

And here's a map of the old Termez (slide24) located in the south of Uzbekistan, which shared a border with Afghanistan. Al'baum and our other researchers and archaeologists excavated in this area, mostly in Fayaztepa. Here you can see some pictures (slide25). These pictures are from Fayaztepa, showing the conservation work through UNESCO Japanese Funds-in-Trust ; many researchers were working for them. Unfortunately, some walls were damaged. I think we have to think how to preserve these sites for a long time.

So, these are more pictures of the exhibition and how our old staff was working on preserving and exhibiting the objects at the museum (slide26).

Here are also some fragments of the picture (slide27). Here you can see how they discovered the sculpture of Buddha, and behind this sculpture was a wall painting, which you can see here. This is also one of the famous objects (slide28). These are other old paintings from Fayaztepa.

Regarding the expeditions, that is, the current archaeological expeditions, I have to tell you about the first international expedition with our Japanese colleague, Professor Nishiaki, Director of The University Museum, The University of Tokyo, who has been studying the Stone Age in Asia from 2013. Every year we waited and made a survey in the south of Uzbekistan, but for the last five years we have been concentrating our work in Machiavelli, where we discovered an important site called the Kaynar Kamar. In situ, we discovered 13 layers from the Mesolithic time to antiquity, but because of COVID-19, unfortunately, this year all our research and excavations were delayed, but we hope that next year we will continue our work together.

Next, the children's museum, we opened a new museum within our museum in 2011, specially for children. Children from age 4 to 14 can visit this museum. They can play, they can touch some objects. They can also be like archaeologists. We have an archaeology corner where they can make a small expedition and dig up objects. This is to help them understand the idea of history, because we have to teach children and work with them to explain how important it is to preserve history, think about history, and work with artifacts. So perhaps some of them could be inspired to become historians in the future or maybe they will be interested in working at museums or becoming archaeologists. I think this children's museum plays a very important role in teaching history to children.

Regarding international cooperation, for the last three years we did much work with different institutions and museums. We signed about 12 memorandums and agreements during the period 2018-2022, with different parties like our Japanese colleagues, the University of Chicago, and Chinese museums like the Shanghai Museum, and with the Korean National Museum and with other institutions to study to work together to share information and conduct preservation work, mostly of course of the cultural heritage, and we held many exhibitions together with the Koreans and with our Chinese colleagues, which I will tell you about later.

The international exhibitions are very important. This is one of the first exhibitions (slide32) we started to work on with our Korean colleagues from the National Museum of Korea and with the Museum of Folk of Korea, and we had a special Korean hall in our museum.

In the last two years, we opened three major exhibitions with our Chinese colleagues. For instance (slide33), with the Shanghai Museum we opened the exhibition named “Blue and White—The Glory of the Silk Road,” which was very interesting. It had many unique objects, and the touchscreens and the special 3D monitors made it very interactive for the visitors, which they very much loved.

We also held another exhibition with archaeologists from China (slide34). After a five-year long excavation project in the Fergana Valley and the issue of a report, the Chinese Academy of Social Sciences together with the Institute of Archaeology in Samarkand and our museum created this very interesting exhibition of the artifacts discovered during the excavation.

Another exhibition about the Yuezhi (slide35), Professor Wang from the North-West University in Xi'an was excavating in the south of Uzbekistan and studying this nomadic people. His group discovered many tools that we exhibited in our museum. Several researchers showed interest in this special exhibition.

The last exhibition, called the “Return to Bukhara Cultural Heritage,” included objects from the tomb of General An Pu and his wife (slide36). General An Pu was from Sogdia in Central Asia. These unique objects were brought from the Luoyang Museum and were exhibited for around three months. Many people were interested in this exhibit because Sogdians, in China, are a very important subject of study. Sogdia had a special culture. These camel sculptures play a very important role in the study of the relationship between ancient China and Central Asia.

Our museum has also worked extensively on the preservation of the cultural heritage. Take, for instance, our first project together with our Japanese colleagues Professor Aoki and Furusho-san. Together with them we had a major project. We gathered all the young conservators, researchers, and archaeologists at the History Museum. The project was funded by the Japan Foundation and for three years, all the participants studied there about how to preserve artifacts and how to restore archaeological materials. Also, we invited special speakers from Tokyo National Research Institute for Cultural Properties to use the special new methods of analysis like x-ray fluorescence analysis.

During our project we prepared some articles. Here you can see them studying some sculptures of the Buddha or paintings to study the pigments (slide38).

Another project we had was like a continuation of the project with our Japanese colleagues (slide39). From 2018, we started a two-year project with the Chicago University Oriental Institute for the conservation of archaeological sites. About 13 participants from our neighbor countries such as Tajikistan, Kyrgyzstan, and Uzbekistan were invited. This was actually the first project in our museum to cover all of Central Asia (slide40).

Just one year ago we opened a new museum, that is, a branch of our museum, in Tashkent (slide41). In that museum you can see the history of Tashkent. Tashkent is the capital of Uzbekistan; it is where our museum is located and where I live. Earlier, we had no such museum. With the help of the Eastern Institute of Archeology of

Uzbekistan, our museum researchers set up this exhibition in around one year. It is a small museum, but when you come here you can see the history of the Tashkent region from the Stone Age up to the 16th century. The exhibit includes a house of the local people, how they worked and how they lived, and there is a craftsman's corner where people can come and make pottery. We have special halls for the exhibits. The exhibition uses some new features, with things like touchscreen displays, 3D monitors, and projectors where people can get more information about the history of Tashkent.

Collaboration with the community is also very important. We are working extensively and doing many things. For instance, about a few months ago we opened two new departments in our museum. This is the exhibition department, which works with the community, and also we started a second department for museum management and tourism.

So, these two departments are working with the people who are visiting, because we have visitors from different age groups. For instance, we have kindergarten groups that can visit our children's museum and play there. We have a special guide who can explain history to these visitors in a language that they can easily understand.

Also, we have special guides for students and researchers. Sometimes we have a group visit that is only interested in the Buddhist art of Central Asia or Uzbekistan. We have researchers specializing in that subject.

Sometimes I also act as a guide, because some visitors just want to know about ancient history and archaeological expeditions. I think we have to work more closely and we have to understand how to work with visitors, because people of different ages have different interests. Most of the visitors, of course, are not historians or art students but just common people, just people who are living in Uzbekistan or just tourists. They want to know about our history and we have to find a way of explaining them without using difficult words. For instance, we have to explain to them history through stories that will be interesting to them. Of course, we want them to come back and bring other people, like their friends, with them. To achieve this, I think it is very important to change things up sometimes in the exhibition and introduce new objects.

We have a website of our museum where we usually update and share new information. We often celebrate some special days of Uzbekistan, for instance, Independence Day, Uzbek Language Day, or 18th May, which is International Museum Day, when we keep the museum open the whole night and try to invite more and more people than 10 years before. Of course, visitor numbers are always increasing and currently we get around 150,000 visitors a year. Of course, that is not too much, but we have been working on that. Also, unfortunately, because of COVID-19, the museum was closed for a long time and reopened just one month ago. There are not many visitors. We have to care about the staff and the visitors, and we really hope that next spring, we will work normally and the visitors will come and the countries will open. We are all waiting for this, so please come to the State Museum of History to understand and learn about the history of Uzbekistan and get more information about the people of Central Asia.

So, this is the end of my speech. Thank you very much. I hope it was interesting to you. Thanks again.



The State Museum of History of Uzbekistan as a Center of Preservation of Cultural Heritage

OTABEK ARIPOJANOV, PH.D.
DEPUTY DIRECTOR
STATE MUSEUM OF HISTORY OF UZBEKISTAN

1

INTRODUCTION



- ▶ Having ancient and rich history, Uzbekistan incorporates common historical processes of civilization development along with its diversified forms and variety in development process.
- ▶ About 8000 objects of cultural heritage are registered on the territory of Uzbekistan

2

INTRODUCTION



Ministry of Culture of Uzbekistan



Academy of Sciences of the Republic of Uzbekistan

350 – Museums

3 – Museums

3

FROM HISTORY

- ▶ The State History Museum of Uzbekistan was established in 1876 and is one of the largest scientific-educational institutions in Central Asia.
- ▶ The museum has been included in the Academy of Sciences of the Republic of Uzbekistan since its foundation in 1943.

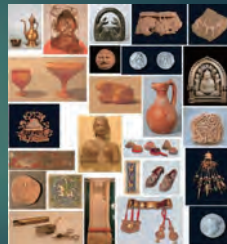


The building in which the museum was housed from 1964-1991. An attractive architectural monument of the 19th century.

4

FROM HISTORY

- ▶ More than 140 years at the museum was accumulated more than 340,000 individual items.
- ▶ Archaeology;
- ▶ Numismatics;
- ▶ Ethnography
- ▶ Miscellaneous artifacts;
- ▶ Archival documents of modern and recent history



5

The main areas of research

- ▶ Museum is scientific organization of many profiles, and the functions are:
 - ❑ Institute of Scientific study of material culture of Uzbekistan;
 - ❑ The largest storage of historic and cultural values;
 - ❑ Center for appealing historic meanings;
 - ❑ Preparation and publication of scientific papers and popular publications;
 - ❑ and other direction concerned with cultural heritage of Uzbekistan;

6

FROM HISTORY



A new building of the museum
Former V.I. Lenin Museum



In 2003, the museum opened a new exhibit, where exhibited more than 10,000 objects reflecting the history of Uzbekistan from the Stone Age to Independence

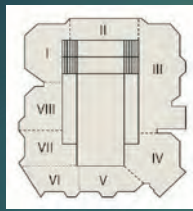
7

Exhibition

- ▶ Territory of Uzbekistan in the Stone Age (1,500,000 BP - 5,000 BC)
- ▶ Territory of Uzbekistan in the Bronze Age (3,000 - 2,000 BC)
- ▶ Establishment and Development of the State in the Territory of Uzbekistan (1,000 BC - 4th century AD)
- ▶ State Formation on the Territory of Uzbekistan (5th-8th centuries AD)
- ▶ Development of Science and Culture (8th-13th centuries AD)
- ▶ Renaissance Period of Amir Timur and the Timurids (4th-15th Centuries AD)
- ▶ Uzbekistan in the 16th-19th centuries
- ▶ Uzbekistan in the 19th-20th centuries
- ▶ Independent Uzbekistan

8

Exhibition



3rd floor



Fourth floor

9

A Unique Objects



Stone remains of the most ancient human type (1.5 million years BC, Solungur (The Fergana valley)

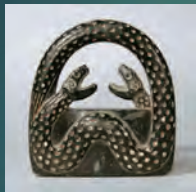


► Bone remains of an ancient man, 48-46 millennium BC, Garamak, The Tadjik region.

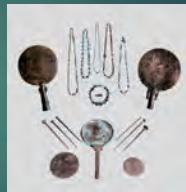
► The Stone Age in the territory of Uzbekistan is represented by numerous sites, including those in caves, flint mines and various archaeological finds reflecting the several stages of development (Palaeolithic, Mesolithic, and Neolithic periods). The study of them indicates the development of human society in the territory of Uzbekistan, starting with the earliest cultures of the Palaeolithic up to the most advanced cultures of the Neolithic period.

10

A Unique Objects



STONE SCULPTURE DEPICTING TWO SNAKES. Onyxite, carved, drilled and then polished. 2nd of 2nd millennium BC, Sakh (The Fergana region)



The Bronze objects from Sappallepa. 3rd millennium BC. The Surkhandarya region

11

A Unique Objects



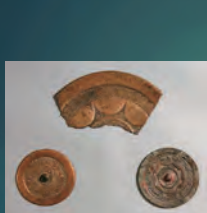
► "TRIAD" Budda with marks. 2nd-3rd century AD Fayaztepa. From the sanctuary. The Surkhandarya region



► Figure of the Buddha. Wall Painting 2nd-3rd century AD Fayaztepa. From the sanctuary. The Surkhandarya region.

► Penetration of Buddhism can be observed at the Kushan time in the southern regions of Uzbekistan. Between the 1st and 3rd centuries AD, Buddhism played an important role in the life of the population of northern Bactria. Termez (ancient Tarmita) became the main centre of Buddhism. During this time, large monasteries were built in Termez, such as at Fayaztepa, and including those in the caves at Karatepa.

12



A bronze mirrors. 1st-2nd century AD. Tashkent, Samarkand



Mirror, 2nd-1st century BC Koktepa, The Samarkand region.



► SCULPTURE. A bust a woman, 5th century. Kuyukurgan, The Surkhandarya region.

13

Numismatic Collection



► GREECE. Athens (c. 480-400 century BC)



► Alexander III the Great (c. 336-323 century BC)



► GRECO-BACTRIA. Diodotus with the name of Antiochus (c. 250-240 century BC)



Sogd. Uik. Warkantuk (the end of 7th-8 century)



► GRECO-BACTRIA. Demetrius I (c. 200-185 century BC)



► THE YUEZHI. "Kushan" or "Gera" (1st century BC-1st century AD)



► THE KUSHANS. "Soter Megas" (Wima Tak (to) 1st century AD)



► Omayyads. Marwan II. Vasil. (127 AH/c. AD 744-45)

14

Household items



15

Archeological excavations

► An archaeological Expedition of the State Museum of History of Uzbekistan for many years has been the main source of archaeological collections. The museum included such well-known local archaeologists as M.E.Mosson, T.Mirg'ozov, V.I.Spiridovskiy, M.E.Voronets, Yu.F.Buraykov, L.I.Albaum etc. Archeological expeditions have become a major source in completion of the archaeological and numismatic collection of the museum.



16

AFRASIAB -1965-67



Lazar Al'baum explains the murals of the southern wall in situ.



Reconstruction by D.Nazlov

The themes are: hunting, crossing a river, a solemn procession and, lastly, the fundamental scene, the arrival of emissaries of various countries at the court of Varkhman, the ruler of Sogdian.

17

AFRASIAB



Metal canopy over the room with wall paintings



Excavation and conservation works of wall paintings

18

AFRASIAB



The conservation of the white elephant and its riders. The southern wall paintings.



The camel riders. The southern wall paintings.

19

AFRASIAB



Copying of the northern wall with the image of the hunters



20



Fragment of a great procession of riding and walking people. Afrasiab, the southern wall.

21



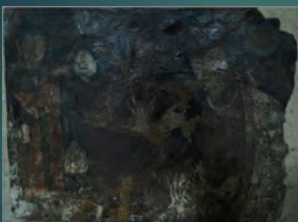
North wall

Western wall

South wall

22

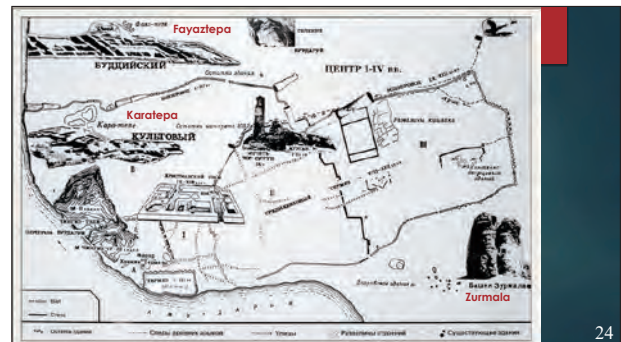
BALALIKTEPA wall paintings



The painting depicts a feast scene in which men and women sitting on rugs.



23



24



INTERNATIONAL EXHIBITIONS



INTERNATIONAL EXHIBITIONS



- ▶ "Blue and White – the Glory of the Silk Road". Shanghai Museum, 2018
- ▶ "From Chang'an to Vandu" - results of Uzbek-Chinese archeology, 2019
- ▶ Institute of Archaeology, Chinese Academy of Social Sciences

34

INTERNATIONAL EXHIBITIONS



- ▶ "Archaeological Identification of Yuechiji and Kangs" with northern-western University, China, 2019

35

INTERNATIONAL EXHIBITIONS



- ▶ "Return to Bukhara: cultural heritage from the burial of General An Pu and his wife during the rule of the Tang Dynasty

36

"Human Resources Development and Technical Transfer for the Protection of the Culture Heritage" Japan Foundation, 2011-2013.



37

- ▶ Material Analysis of Objects Collected in The State Museum of History of Uzbekistan Using a Handheld X-ray Fluorescence Spectrometer.
- ▶ Yasuhiro HAYAKAWA



38

The Cultural Training Partnership for Artifact Conservation

- ▶ The Oriental Institute of the University of Chicago organized and conduct a three year training program, from 2018-2020
- ▶ Three-year program of capacity building and advanced training for artifact conservators at the National Museums of the five Central Asian republics



39

C5 Conservation Training Partnership for Artifact Conservation

- ▶ The 16 workshop participants:
- ▶ Uzbekistan (8 participants),
- ▶ Tajikistan (2 participants),
- ▶ Kazakhstan (2 participants),
- ▶ Kyrgyzstan (2 participants),
- ▶ Turkmenistan (2 participants)



40

Tashkent Museum



41

Collaboration with Community



A new building of the museum
Former V.I. Lenin Museum



In 2003, the museum opened a new exhibit, where exhibited more than 10,000 objects reflecting the history of Uzbekistan from the Stone Age to Independence

42

Thank you for your attention!

43

総合討議

General Discussion

博物館が地域社会に果たす役割

モデレーター：森本 晋

パネリスト：栗原 祐司、田代 亜紀子

村野 正景、吉村 和昭

チャプ・ソフィアラ(カンボジア)、レン・フーシン(中国)

ミン・チー・アン(マレーシア)、カナル・サンディープ(ネパール)

ニラン・コーレイ(スリランカ)、オタベック・アリプトジャノフ(ウズベキスタン)

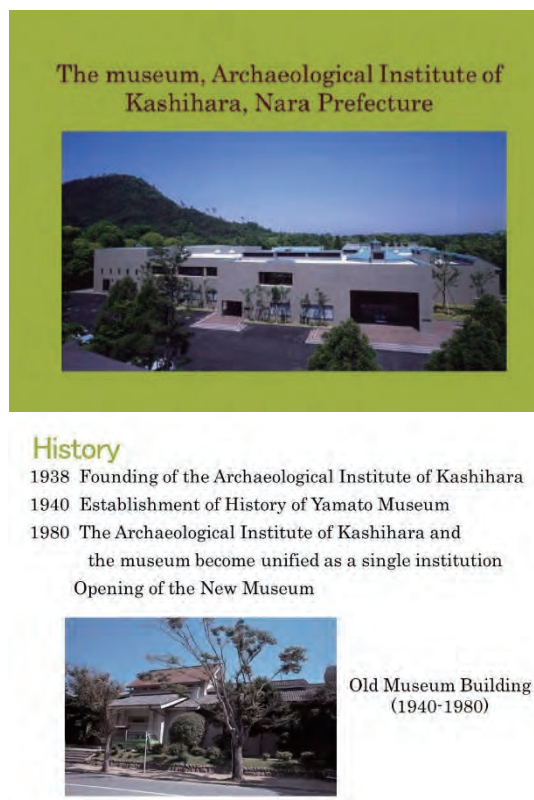
森本 「博物館と地域社会」という課題で、これから総合討議をさせていただきます。時間が限られておりますので、深いところまで入っていけるかどうかは分かりませんが、各国の事例を踏まえながら、討議していただければと思います。各国の皆さんの発表内容につきましては、既にネットで配信しておりますので、それをご参照いただいていると思いますので、それを踏まえた上での議論ということをお願いしたいと思います。

ただ、本日こちらに来ていただきました吉村先生につきましては、発表資料を配信しておりませんので、この場で先に吉村先生よりご発表いただきたいと思います。それでは、どうかよろしくお願いいたします。

吉村 皆さん、こんにちは。今ご紹介にあずかりました、吉村でございます。私が勤めておりますのは、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館ということで、名前が示すとおり、奈良県という日本の地方政府が管轄する、考古学研究所が持っている博物館でございます。この名のとおり、奈良県から出土した考古遺物を中心に展示・収蔵しております。研究所の附属博物館である関係上、研究所が発掘調査してきたものが中心となっております。

こちらが現在の博物館の状況です。1940年に最初の博物館が建てられています。そして、今、付属となっております大本の研究所のほうですけれども、こちらが1938年の設立で、それが1980年に合体をする形となりまして、付属の博物館となりました。1940年の設立でございますから、今年で創立80周年ということになります。比較的古い博物館でございます。これが1980年の段階で、新しい建物ができています。新しいといいましても、もう40年たっているのが、現在の博物館の姿でございます。奈良県のもを中心に、およそ1万点の展示物を展示しているというところでございます。

奈良には、古代において日本の政治的な中心がございました。その関係上、その前段階の古代国家の形



成に当たる日本の古墳時代、それから古代の飛鳥時代、奈良時代の遺物、展示品については、とても質、量ともに充実した状況にあります。ですから、地域ということでもありますけれども、日本全体で注目を浴びているということも特徴でございます。

ですので、博物館ですけれども活動としては、今日参加されている博物館の中では比較的オーソドックスな、またトラディショナルな活動パターンだと思います。基本的には、常設展示に加えて、春と秋の2回の特別展示や、発掘されたばかりの速報の展示、収蔵品に関する特集展示などを中心に組み立てられていて、それについて、一般の来館者の方々には、シンポジウムや講演会などといった形でのアウトプットをさせていただいているというところでございます。

特徴としては、比較的大きな友の会の組織、アソシエイトメンバーがあります。今、私どもは、展示改修、リニューアルの最中で、少し減っているのですが、それでも1000人の会員がいらっしゃいます。会員の範囲は、奈良にとどまらず、北は北海道から南は九州まで、全国に及んでおります。ですので、奈良での活動というのは年に10回程度あるのですが、それ以外に東京や名古屋などでも、年に複数の講演会があったり、見学会を催したりというようなことで、比較的、全国的な活動をしています。

ただ、そういう中で、地域的な活動を全くしていないわけではなく、力を入れている部分があります。地域の中で力を入れておりますのは、子ども向け、特に小学生に向けての活動です。そのうちの一つは、ここにThe Mobile Museumと書いていますけれども、移動博物館と言ったり、あるいは出前授業と言ったりもしております。日本の小学校では、だいたい6年生になりますと、日本の歴史を学ぶわけですが、そうすると、春の段階では、特に私どもの博物館が扱っているような考古遺物を中心に学ぶわけですが、

ですので、奈良県内の小学校の、特に希望されたところが中心なのですが、私どもの博物館が持っているいろいろな土器や石器や鉄器、いわゆる本物の遺物を持っていき、それを実際に見てもらい、触ってもらいということと講義を通じて、教科書に載っているものを身近に体験してもらって、歴史に親しんでもらい、好きになってもらいということ、取り組みとして持っております。それと、県内は比較的広いので、博物館になかなか来られないような山間部の学校もございまして、そちらのほうもできるだけ積極的に回って、実際には訪れてもらえませんが、それをこちらから提供していくということで、活動を行っております。

もう一つ、大きなイベントなのですが、日本の場合、夏休みが非常に長く、40日程度あるわけですが、その中で、子ども向けの考古学講座を行っています。講座の内容は、もちろん展示を見て勉強してもらいということもありますし、先ほどの出前授業と同じように、遺物を実際に触ってもらいというような体験型ということもあります。

例えば、今年はいわゆるモビールという、やじろべえみたいにオブジェをつるして、平衡を取るようなものがございまして、考古遺物をかたどったようなものを作ってもらって、自分たちだけの古代のモビールを作りました。あるいは、昨年の場合、少しはやりましたけど、古代のオブジェを瓶に詰めて、ア

Membership Events



The Mobile Museum



ルコール漬けにして、自分だけのハーバリウムを工作しました。日本では夏休みの宿題があるのですが、宿題の対策も兼ねてそういった活動をして、実際に歴史に触れてもらって、考古学を好きになってもらうといったことを、取り組みとして行っています。その結果、考古学講座のほうは4年生以上を主に対象にしているのですが、毎年参加してくださる方や、4年生、5年生、6年生の時にずっと来てくださる方や、卒業しても、今度は弟さんや妹さんが来てくれる、友達を連れてきてくれる方など、毎年楽しみにしてくださっている方も、県の中に何人もいらっしゃいます。そういう人が来ることを、こちらもし楽しみに、この活動をしているところでございます。

ということで、歴史を好きになってくれる人を増やし、将来的には、文化遺産を守る活動というか、その理念も大事だということを、心の底で思っていただけの方を増やしていくという点でも、力を入れてやっている活動でございます。私どもの活動については、これ以上時間が取れませんので、簡単でございますが、以上です。

今回のパネラーの方の資料を見させていただいた中で、少し質問を投げかけてみたいと思います。博物館における教育普及に関する質問です。カンボジアの先生とウズベキスタンの先生にご質問させていただきたいのですが、私どもと同じような学校の連携ですとか、子どもを対象とした授業について、ぜひ教えていただきたいことと、そういったことを中心に、何か新たな取り組みというものがございましたら、お教えいただけたらと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

森本 吉村先生、ありがとうございます。質問いただきましたので、それに従って、まずは、カンボジアのチャブさん、何かご意見をいただければと思います。

チャブ 教育についてのアイデア、子どもたちに対しての教育と、博物館の考え方ですね。私たちの博物館では、普段、スクールプログラムというものをやっていて、私立学校や公立学校の高校生を博物館に招待しています。

ただ、博物館に来る前、あるいは来ている間のホームワークといったものではありません。単に博物館に来て、展示物についてのガイドの説明を聞くというものです。ですので、このプログラムだけでは、博物館やカンボジアの文化の歴史を理解し、知識を広げるのは難しいです。将来的なプランは持っています。もっと教育を促進していかなければならないので、それを博物館の仕事を通してやっていきたいと思っています。生徒が博物館に来る前に、学校でレクチャーをし、その後、実際に博物館に来てもらう、といったようなことです。そして、彼らを博物館に招待し、その場で課題をしてもらうわけです。

また、チルドレンズルーム、子どもの部屋というものを作りたいと思います。そこで文化について知っていただくということをしたいと思います。実際に物に触ってもらうといったような経験も与えたいと思います。ミュージアムコレクションに、実際に手で触れるということです。これが私の考えです。

森本 具体的で、よく分かりました。続きまして、ウズベキスタンのアリプトジャノフさん、いかがでしょうか。

アリプトジャノフ 質問をありがとうございます。2つ事例を紹介します。2014年、われわれはウズベキ

Children's Course of Archaeology



スタンで最初のチルドレンズミュージアムを開きました。4歳から14歳の子どもたちが対象です。私は考古学者として、多くの発掘調査を行ってきました。そこで、子どもたちのための特別なコーナーを作りました。小さなコーナーですが、子どもたちは私たちが作った陶器やコインのレプリカを使った発掘体験ができます。子どもたちはそれらを見つけたら、持ち帰ることができます。

また、クラフトマン、職人たちのコーナーもあります。古代より手工業は、都市や村で発展しました。私たちが作った職人のコーナーでは、子どもたちが、実際に焼き物や器などを作ることができます。本当に気に入ってくれています。というのも、普段、子どもたちが展示に行く時、私たちは触らないように、叫ばないように、走らないようにと言いますが、このチルドレンズミュージアムにおいては全く違いまして、話をすることができますし、触れることができます。そして、民族学的な資料や考古学、歴史について、説明します。文化遺産の重要性を理解してもらうため、文化遺産を理解し愛し保存することはとても大切です。

2014年、政府が特別なプログラムを作りました。毎週火曜日と金曜日は、親といっしょに来た子どもたちは、無料で博物館に入館できます。子どもたちは親と来るだけで、無料で歴史や文化の展示を楽しむことができます。以上です。

森本 ありがとうございます。子どもに向けての展示というのは、展示だけではなくて、体験してもらうということが大切だということを、どちらの方からもいただいたのですが、それについて、吉村さん、何かコメントはありませんでしょうか。

吉村 思いは全く同じかなというように思いました。やはり、本で見るだけではなくて、実際に身近に見て、触ってというのは、心に残るというか、ずっと記憶に残るという部分ですし、それは本当に子どもの頃の一番大事なものではないかというふうに思います。ありがとうございます。

森本 ありがとうございます。では、同じ博物館というお立場でおられる、村野さんからコメントをいただきたいのですが、よろしいでしょうか。

村野 はい。ありがとうございます。私自身の博物館の仕事に関しては、既に事例報告で紹介しているかと思います。

私たちの博物館の目指しているところは、例えばICOMやユネスコの定める目標であったり、先ほど栗原先生の発表でもありましたけれども、特に地域コミュニティへの貢献といったところの方向性が、強く打ち出されています。

その点で、今回、各国のご発表を私も拝聴させていただいた中で、地域コミュニティへの貢献で、例えば、スリランカの方のところでは防衛施設のことであったり、ネパールでは、有形ではなくて、特に無形の文化遺産という方面にも、博物館は貢献をしていくのだということが出ておりました。さらに、中国の事例では、マーケティングというところも含めて、正直、今までの博物館でやっていたこと以上に、仕事の中身が拡張しているなと思います。

ましてや、マレーシアの事例では、確かに消防というところはものすごく大事ですし、博物館ということではなくて、文化遺産保護ということでも、もちろん大事なことはあるのですが、実際に博物館の組織が、例えば私どもの博物館が、周辺の文化遺産の消防を担っているかという、とてもそこまで行けておりませんので、こういう4カ国のご発表を聞きますと、博物館の地域貢献の幅の広がりというものを、

ものすごく強く感じました。

その時に、そういうふうな思いがあった一方で、あらためて、私どもも悩んでいることではあるのですが、地域貢献というのは少し難しい面も持っているのではないのかなと思っています。というのは、私どもの博物館でもそうですけれども、博物館がやっていることを、博物館のある種の自己満足というか、独り善がりにならないようにするためには、地域貢献といった場合に、地域の要望をきちんと受け止めることが大事だろうというふうに思っております。

私どもの博物館では、毎月1回、地域の定例会というものを博物館で設けていて、第3金曜日に必ず1回開いているのですが、ここでの話を聞いていても、たくさんの要望があります。

そこで、スリランカ、ネパール、マレーシア、中国という各国の皆さまに対して、私どもの博物館の活動に近く、親近感を覚えました。博物館の活動する範囲と人々の生活圏が、ある意味一致しているような博物館の皆さまの場合に、一体、博物館というのは、地域コミュニティの要望にどこまで応えていくべきとお考えでしょうか。少し言い過ぎかもしれませんが、優先順位みたいなものをどのように付けていくのでしょうか。

そもそも、地域コミュニティといっても、中身がすごく多様で、多様な人がいるかと思います。博物館としては、一体、誰の要望、意見を聞いていけばよいのかということを、少し抽象的な話かもしれませんが、今回のシンポジウムのテーマが「博物館と地域社会」ということですので、私が悩んでいるようなことを、少し皆さまから意見を聞きたいと思います。

森本 大変興味深いご指摘をいただきました。これにつきましては、順番に各国の方のご意見を伺いたいと思います。最初に、スリランカのコーレイさんからお願いしたいのですが、ゴールというのは要塞でありまして、現在も人が住んでいるリビングヘリテージそのものでありますから、どのようなことで住民と対話されているのかについて、教えていただければと思います。よろしくお願いします。

コーレイ われわれが保存しているのはリビングヘリテージです。実際に人々がこの文化遺産の所で生活をしています。そして、保存だけでなく意思決定ですとか、そういったところにも住民には参画をしてもらっています。ここで重要になるのが、歴史的な背景を理解するということです。ゴールというのは、オランダの要塞であったということで、歴史的にどういった連なりがあったのかということを教育し、知っていただいているわけです。そして、博物館やインフォメーションセンターで人々に文化遺産の様々な側面を伝える活動をしています。

このような活動においても重要な点は、地元住民が意思決定のプロセス全体に参画することです。また、住民は調査にも活発に参加し、遺産の背景描写の作成に地元住民としての知見を提供してくれます。そして、こういうやり方が確立されますと、住民たちはミュージアムのマネジメントにも参画できるということです。研修を受け、子どもたちや来館者に自分たちの遺産について説明できるようになるのです。

ということで、外部の人を雇用するのではなく、すべてのプロセスにおいて地元の人々を巻き込み、パートナーになってもらうことは博物館にとって大きな意味合いがあると考えます。そして、それを通じて、人々は自分たちの遺産の保存に参画し、誇りを持ってくれると思います。これが、人々を中心にした博物館にするという私たちの考え方です。

森本 ありがとうございます。続きまして、ネパールのサンディーブさんをお願いしたいのですが、パタンという所も、リビングヘリテージというか、周りにたくさん歴史的建造物が建っている中にある博物館

ということで、どのような活動を特にされているのかについて、ご紹介いただければと思います。

サンディープ ご存じのとおり、ネパールというのは、多言語、多宗教、多文化の国です。多様性に富む国です。ですので、最近では地域レベルで、さまざまな伝統的な文化の保存に努めています。若い世代も、文化への関心が高まっています。これはとても良い面だと思います。

基本的に、3つの宮殿博物館がカトマンズ渓谷にあります。儀式やお祭りなどを通じてコミュニティと直接関係があります。人々はそこで礼拝したり伝統的なイベントなどもやってきました。博物館には独自の規則があり、私たちはその元で、博物館とコミュニティの相互接続を支援する仕事をしています。計画や決定というものも、地元の人々とミュージアムとの間で、共同で意思決定をしています。

難しい問題に関しては、トップダウンでやる場合もあるかもしれませんが。例えば、プレゼンテーションでもお話ししましたが、スライドの16ページになりますが、ローカルコミュニティと政治指導者が、私たちの規則に反して、もっと博物館にスペースを要求するといったことがありました。当時、博物館当局はそれを許可していませんが、コミュニティの感情を傷つけないようにすることは重要です。コミュニティベースのアプローチは、博物館の持続可能な開発に必要であり、アイデンティティーを探究することでもあります。

世界的には、収集や展示の責任を担う機関が博物館のコレクションと関連する人々を理解する仕組み作りが必要ではないでしょうか。

森本 ありがとうございます。多文化・多民族の国ということもあって、日本とは少し違う面はあるとは思いますが、大変興味深い話をありがとうございました。

それでは、続いて中国のレンさんから、コメントをいただければと思うのですが、よろしいでしょうか。

レン 皆さん、こんにちは。今日、参加することができ、また皆さんと意見交換できることを、とてもうれしく思っています。皆さんの報告を見ることで、知識を増やすことができました。ありがとうございます。

さて、ご質問ですが、2つの観点からお答えします。まず、こういったリクエストを地域コミュニティから集めているかです。6つの側面があると思います。1つ目は、地方政府です。2つ目は、村の役所です。3つ目は、さまざまな組織です。例えば、木工に関する活動をしている組織やキノコを育てている組織など、そういったところから意見を伺っています。4つ目は、職人とその見習いです。こういった方々も、さまざまな当局からの認定が出ている方々です。5つ目は、現地の文化を担っている方々です。例えば、教師など、外で教育を受け、村に戻ってきて活動している、教育レベルの高い人たちです。彼らからの意見も聞いています。最後は、いわゆる村の尊敬されている存在です。政府の方ということではないのですが、村の意思決定や重要な行事などで、尊敬を集めている重要な方々がいます。経験が深い方です。彼らの意見というものも、意思決定のプロセスで大変重要です。この6つの面からやっています。そういったところから情報を集めます。どのように地域コミュニティのリクエストに応えていくのかということ、こういったところからすくっていきます。

地域コミュニティの要望にどのようにして、どれだけ応えていくかについて、次の点を共有したいと思います。まず、地域コミュニティにおける博物館の役割は、われわれがプラットフォームになるということです。また、地域コミュニティと、外の世界とのかけ橋になるということです。われわれのポジション、機能によりまして、意思決定のプロセスに関わっていく、あるいは地域コミュニティのリクエストを受けた場合、最初に、いろいろなグループを集めます。先ほど、6つ申し上げましたよね。6つのグループが集

まって会議をします。そして、どのようにしてリクエストに応じていくのか話し合いをします。そして、提案というものを得ます。いろいろな意見が出ますので。そのミーティングの後で、どの方向に進むのか、方向性を決めます。次に、地元の政府に支援と助言を求めます。彼らが承認するか、このような決定を支持するかを確認します。3番目に、どのような問題が提起されているかに応じて、特定の政府の部門に委託します。例えば、観光業のことであれば、観光局というように、そういった当局に回します。そして、最後になりましたが、私たちは関連する社会的資源を求めています。お金だけでなく、特定のプログラムに参加したり、このコミュニティのために努力することをいとわないボランティアや企業です。

こういった形で、われわれは地域コミュニティを参画させています。以上です。

森本 ありがとうございます。非常に広い範囲の、さまざまな職能といいますか、いろいろな立場を代表するような人を巻き込んで、意見を集約しているというところが興味深いと思いました。

では、4番目になりましたけれども、マレーシアのアンさん、ご意見をいただければと思います。よろしくお願いします。

アン ありがとうございます。われわれは世界遺産ジョージタウンのサイトの管理という役割をしています。皆さんと同じように、さまざまなバックグラウンドを持つ多くのコミュニティと協力しています。特にここでは、彼らは異なる文化的背景、宗教的背景、社会的背景や関心を持っていますので、私が地域コミュニティを話題にする時は、主にここで生活し、働く人々のことを意味します。

報告では中央消防署の例を示しましたが、非常に新しいコンセプトとしてやっています。どうしてこういったものが大切なのかといいますと、地域コミュニティの力というのが本当に大きいのです。博物館は地域コミュニティの要望で設立されました。世界遺産の中にある唯一の消防署であり、112年間、消火活動等すべてにおいて大きな役割を果たしてきました。いろいろな史料・資料もありますし、またストーリーもあります。ですので、地域コミュニティと消防署、私たちとで話し合い、われわれとしては、やはり、ここを教育の場所、意識を向上させる場所、文化遺産についての知識を向上させる場所にすべきだということになりました。このような経緯から、私たちは消防署の職員と協働で実務を行っています。例えば、市民の巻き込み方や展示方法などを相談しながら考えます。これが第一段階です。

第二段階はストーリーです。来館者に展示をみてもらい、話をしてもらいます。私たちはこれをオーラルヒストリーの記録と呼んでいます。これは博物館のストーリーを層の厚い豊かなものにするため、時間をかけて発展させていきたいと思っています。

消防署にある私たちの小さな博物館には写真がありますが、いくつかの写真は地域コミュニティの寄付によるものです。とても古い写真で、ある時に、どういったことがジョージタウンで起きたのかということを示しています。そして、結局のところ、火事というのが、ここジョージタウンにとって最大のリスクの1つです。若い世代の方々の教育にこれを使いたいと考えています。今回のコロナ禍の前は、子どもたちは消防署に行って消防士の方に会い、様々な体験をすることができました。しかし、今のコロナ禍の状況で、私たちは、誰もがミュージアムを訪れ、文化遺産や消防の意識を向上させる体験ができるように、安全な方法を探るとともに、コミュニティとの協働にも力をいれています。皆さんがいつか来ることを願っています。

森本 ありがとうございます。リビングヘリテージに住まわれているということは、そのまま文化財防災につながるということにもなるかと思うのですが、大変興味深い話をありがとうございます。

以上、4カ国のパネラーの方から、いろいろなご意見をいただきましたけれども、それを受けて、村野さん、何かコメントがございましたら、よろしくお願いいたします。

村野 ありがとうございます。私の少し抽象的な質問に対して、抽象的レベル、具体的レベルでそれぞれ答えていただいて、すごく勉強になりました。いずれも、参加型ということがキーワードになってくるのかなと思います。

ただ、この参加型で皆さんがされていることは、全で一昔前から大事なことだというふうに言われていると思うのですが、実際のところ、具体的にどんな組織をつくっていったらいいのかや、何より、学芸員が主導すればいいような普通の展覧会作りとは違って、意思決定のプロセスや意思決定の仕方などは、こういう参加型のことをやる時に非常に難しいことになってくる部分はあるのかなと思っています。本日の皆さんの回答、やっておられることをお聞きして、こういう参加型の具体的な組織や、意思決定の仕方など、そういうところも、今後情報共有させてもらえたらうれしいなというふうに思いました。以上です。

森本 ありがとうございます。地域の意思や考え方と博物館の考え方、それをどのようにすり合わせていくかということは、非常に大切なことではありますが、地域そのものが観光地として機能しているときに、観光と博物館との関わりというのも、一つの視点として重要なことではないかと思っています。この点について、観光と博物館について研究されております、北海道大学の田代先生からコメントをいただきたいと思っています。よろしくお願いします。

田代 森本さん、ありがとうございます。プレゼンテーション全体について5分ほどコメントしてから、皆さんに質問を投げかけたいと思います。皆さん、素晴らしい発表をありがとうございました。多く学ぶことができましたし、本当に楽しく拝見しました。

最初に、カンボジアとウズベキスタンの方の発表を取り上げたいと思います。この2カ国の事例は国立博物館で、他の博物館とは少し違っていると思います。

まずカンボジアですが、カンボジアの国立博物館は本当に素晴らしい所です。その地域自体も、王宮の近くでもありますし、川も近くにあるということで、観光地としても大変素晴らしい場所です。それから、ウズベキスタンに関しては、研究所ということで、非常に教育的な機関を持っています。それが、また一つ、地域とのつながりを持つ方法だというふうに思います。遺物をどこで、どのように保存するのかということもあると思います。ですので、オタベックさんが紹介している博物館を考えるのも面白いと思います。

それから、3つ目はネパールです。パタン博物館ということですが、場所として非常に重要だと思います。パタンという場所が、この地域自体が、大変重要であるということです。宗教的な意味合いもある空間で、一般の方々にとっても重要な場所です。これは特別な例だと思います。スリランカのゴールの要塞と比較をしますと、複数の歴史的なレイヤーがあり、複数の宗教や文化が折り重なっているということで、これらは非常に似ていますが、全く違う点もあります。ゴールの要塞では、トレイル、遊歩道を整備されていて、とても関心があります。日本でも約1025kmの海岸線に沿った「みちのくトレイル」というのがあるのですが、2011年の東日本大震災で何が起きたのかを見ることができます。一種の災害博物館です。地域コミュニティのつながりに関しては、ゴールは民族や宗教的なつながりがある一方で、京都は地理的なつながりが強くあります。地域コミュニティと言ったときに、ゴールと京都ではそこが違うところだと思います。

マレーシアに関しても、災害のリスクマネジメントにどのように関わり、また地域コミュニティと博物館の関わりがいかに必要かを理解することができ、とても興味深かったです。例えば、ネパールなどでも、避難所になるというふうなことをおっしゃっていましたが、マレーシアもそういった役割を果たしていると思います。

また、中国の事例はとても興味深いエコミュージアム活動や本来の場所でのダイナミックな保全事業が紹介されました。このような活動については、内側からの視点と外側からの視点、2通りの考え方ができると思います。また、都市と村について言及し、博物館はその架け橋であるとおっしゃいました。ツーリズムスタディー、観光学では、コミュニティ、そして、ホストとゲストの関係を考えます。この2つの間のバランスをどのように取るのかということを考えるわけです。

現在のコロナ禍の状況で、観光産業は大きな影響を受けています。このことは、間違いなく皆さんが知っていると思います。では、私たちは観光に対して何をすべきでしょうか。地域コミュニティについてどう考えるべきでしょうか。コロナ禍にあって、地域やエリアの定義も変わってくるのではと思います。皆さんはどう思われますか。もちろん、例えばバーチャルリアリティー、VRを使うとか、博物館をオンラインで宣伝する方法とか、新たな手法を考えることもあるでしょう。その辺りのコメントをいただければというふうに思います。

アリプトジャノフ 素晴らしいプレゼンテーションをありがとうございます。残念ながら、新型コロナウイルスで、私の博物館では様々なことがキャンセルされました。世界中で同じ状況だと思います。

4月初めにオマーンとの大規模な展覧会を開催することを考えていました。オマーンの古代ギリシア時代の遺物には、中央アジアの考古遺物と似ているものがたくさんあるのですが、キャンセルになりました。それから5カ月間、博物館は閉鎖されました。そして、9月に再開をいたしました。9月の半ばだったと思います。パンデミックは、既にある程度は収まっていました。感染者数もだいぶ減っていたのですが、来るとしても来館者は1人か2人でした。消毒液や体温測定など、いろいろと予防策も講じなければいけませんでした。私たちはどうすべきか考え、Webサイトにビデオをアップしたり、オンラインツアーをしたり、Zoomも使いました。みんな関心を持ってくれましたが、やはり、本当の遺物を自分の目で見るということが重要だと思うのです。例えば石器時代や古代ギリシア時代のビデオを作ってくださいという依頼があって、それを作り、スマートフォンを使ってオンラインでガイドをしたりということをやっているのですが、やはり、みんな遺物を見るためにミュージアムに来たいと思うのです。実際に遺物を自分の目で見るということ、そして感じるということが重要だと思うのです。オンラインではなく、オフラインで感じたいと思っているのです。

来年の春には、全てが落ち着いていればと思います。本当に、良くなることを祈っております。ありがとうございます。

森本 同じような国立博物館であるカンボジアの例について、チャブさん、どうですか。

チャブ コロナ禍での私たちの博物館の状況を共有したいと思います。私たちの博物館は、数年前にソーシャルメディアをはじめたばかりです。コロナ禍で博物館は閉鎖していましたが、スタッフは仕事を続けていました。そこで、ソーシャルメディアで博物館の活動を紹介することにしました。公開講演を行い、また、私たちの博物館の特別な収集品についての調査記事をFacebookに投稿しました。

多くの人々が私たちの博物館を知り、今の状況を理解し始めたと思います。将来的なプランとしては、

毎月伝統的なイベントをしていきたいと思います。考古学研究所の新しい調査結果をアップデートしたり、芸術大学の協力を得た毎年のイベントも行っていきたいと考えています。以上です。ありがとうございました。

森本 ありがとうございました。それでは、このコロナの影響下において、博物館と地域社会の関係が変わったといったことはなかったのか、スリランカのコーレイさんのご意見をいただければと思います。

コーレイ 現在スリランカは、新型コロナの第二波がきており、ほとんどの博物館は閉館しています。早くコロナが落ち着き、再開できることを願っています。

遺跡訪問者の視点で考えても、博物館展示品は遺跡から切り離されるべきではないと考えます。動産文化財はそれぞれ背景があり、その背景の中でそれらは物語を紡ぐことができるからです。ビデオやVRを使って、ある程度は伝えることができるとは思いますが、実際に空間に行って見ることが、理解を深める上で非常に大切だと思います。今は別の手段が必要な時期ですが、正常な状態に戻りましたら、もちろん最良の選択肢は、動産文化財をその背景を伝える場所で実際に見ることだと思います。

森本 ありがとうございました。では、ネパールの状況はいかがでしょう。サンディープさん、お願いいたします。

サンディープ コロナの影響だけではなく、全体的な状況、文化と伝統が消えつつある状況について、お話ししたいと思います。何世紀にもわたって存続してきた無形文化遺産が、経済状況や自然災害、政治等によって消失した例はたくさんあります。最近では地震やパンデミックが、伝統的な遺産が消滅するリスクを高めています。消滅の危機に瀕した、あるいは消滅した活動を復活させるためには、博物館を通じて行うことができるすべての側面からの調査研究が必要だと思います。博物館を訪れる一般の方が知識や創造性を身につけられるよう、さまざまな活動が行われています。展示やライブプレゼンテーションを通じて、情報や知識を伝える試みが行われています。

今、社会に対する博物館の役割というのは、重要で不可欠なものであると思います。われわれの文化、文明、伝統、儀式を存続させ、創造性を維持する上で、博物館は重要な役割を果たします。展示を通じて、博物館はその国の文化、文明、習慣といったものを維持していく役割も果たすわけです。コロナ後に博物館が再開しても、私たちがやるべきことは多く残っています。

森本 ありがとうございました。中国のレンさんにお伺いしたいのですが、地捫侗ではコロナの影響というのはあったのでしょうか。

レン 報告でもお分かりいただけるかと思いますが、エコミュージアムはコミュニティの一部です。別々のものではありません。そして私たちは、マスツーリズムに直面している博物館ではありません。コロナがあってもなくても、私たちの村や研究センターに来る観光客はそれほど多くはありません。ということで、コロナは私たちのコミュニティ、博物館に影響は与えていません。しかし、普段は地域の人々、特に若者は、経済的支援のために都市へ働きに行きますが、コロナの影響で、村の家にいなければなりません。そうなりますと、エコミュージアムの概念や、生態系とは何なのか、どのように自分たちを支援してくれるのかということに、目が向いてきています。村の未来を決定し、影響を与えていく若者が、村に留まり、目

を向けるというのは、エコミュージアムにとってはいいことだと考えています。

森本 人の移動が制限されるということが、地域に目を向ける一つの契機にもなったというところは、興味深いご指摘だと思います。

最後になりましたが、マレーシアのアンさん、いかがでしょうか。

アン 私たちは、持続可能な観光が重要であるという話をしてきました。持続可能な観光計画をたてるということは、遺跡だけでなく、来館者をターゲットにしている全ての博物館において必要なことです。私が紹介した博物館、つまり中央消防署ですけれども、もちろん1つ目のミッションは消火ですが、2つ目のミッションは博物館としての教育です。

今回のコロナにおいて、消防署は入館料の減収が大きな影響にはなっていませんが、やはり生活と生計のバランスを取るということを考えさせられています。コロナが広がらないようにするためには、同時にどれぐらいの人数だったら博物館にきてもいいのか。ウイルスもですが、不安もコントロールが難しいです。

コロナによって旅行ができない時、家を出ない人もいれば、特定の地域内での活動に制限する人もいます。しかし、規制が緩和され旅行ができるようになれば、より多くのマレーシアの人々が、国内の博物館や場所を訪れるでしょう。これは、他の国でも同様だと思います。それは地域の人々を元気づけます。ジョージタウンや他の所の人々にとって、国内の博物館や地域に愛着を持ち、より理解を深める機会となりました。コロナは大変大きな問題ではありますが、チャンスにもなり得ると思います。以上です。

森本 ありがとうございます。6つの国の方々からリアルタイムの状況についてお話を伺うことができ、大変興味深いものがあったと思いますが、これらをお聞きになって、田代さん、最後に何かコメントはございますか。

田代 皆さん、コメントをありがとうございます。マレーシアのアン先生がおっしゃるのは、マイクロツーリズムということだと思うのです。そういうトレンド、家から1、2時間しか離れていない所に行って、観光を楽しむという動きは、こちらにもあります。いいポイントだと思います。コロナ前の状況に戻るといったことはないかもしれませんが、栗原先生がおっしゃったように、博物館の新しい定義とはどういったものなのか、哲学のようなものか、新しい状況の下で、柔軟に定義を作るべきだというふうに思います。

森本 ありがとうございます。本当に最後になってしまいましたが、これらのいろいろな国々の方のご発表を聞いて、栗原さんからコメントをいただければと思います。

栗原 ありがとうございます。時間がないもので、手短にお話し申し上げますと、やはり今日のテーマである「博物館と地域社会」を考える場合に、人材というものが大きな役割を果たすのかなと思っています。難しいことを難しく伝えることは、誰でもできるのであって、専門的な内容を、より分かりやすく、地域の方々、あるいは来館者の方々に伝えるということが大事になってくるのではと思います。それは、博物館のいわゆるキュレーターだけではなくて、エデュケーター、インタープリター、コーディネーターといったような方々、必ずしも専門家ではなく、場合によってはボランティアの方がその役割を担う場合があるかもしれませんけれども、そういった人材を活用して、いかに博物館の内容を、地域の方々や来館者の方々

に伝えるかということが大事だろうというふうに思います。今、コロナ禍によって、物に触れない、なかなか人が集まらないという状況はありますけれども、それを何とかいろいろクリアしながらやっていく必要があるだろうと思います。その中で、今日も少しお話ししたとおり、多視点性、マルチパースペクティブというものが大事です。同じ国の中にあっても、さまざまな人種、民族、ジェンダーがあります。また、同じ人種、民族であっても、年齢によって全然違います。例えば、日本でも、畳1畳分の大きさといっても、子どもは畳を見たことがなかったりすると、それが通じなかったりしますから、そういった年齢差に応じたものの考え方、伝え方、こういったものを考えていくことが大事だろうと思います。

最後に、田代さんからお話がありましたコロナについては、いろいろ厳しい状況ではありますが、デジタル技術の活用によって、今はさまざまなオンラインの教育プログラム、あるいはバーチャルツアー等々が行われていますので、それをさらに進めていくということと、この機会にしっかり勉強、研究を進めていって、コロナが終わった時にそれをうまく活用するということを考えていく必要があるだろうと思っています。もう一つは、2019年の2月、3月でしたか、京都国立博物館で、ちょうど展示替えて休館しなければいけない時に庭園だけ無料で開放したら、これが思いの外、好評で、展示が見られなくても博物館が開いているというだけで、人々が安心してやって来たということがありました。ある意味、博物館が人々の心の安らぎの場になるという役割もあるだろうと思いますので、なかなかコロナ禍で活動が難しい中においても、博物館が開いているということが人々に何か癒やしの場となれるような効果もあるのではないかと考えています。そういったことも含めて、今後またみんなでいろいろ考えながら、博物館活動を展開できればいいなというふうに考えております。以上です。

森本 ありがとうございます。いろいろな厳しい情勢の下にあって、博物館が地域の核として、いろいろな機能を担うことができるというご指摘、大変勉強になることだと思います。

この国際会議自体、今年はコロナの影響を受けて、このようなデジタルプラットフォームを利用した開催という形になったわけですが、それであっても、多くの国の方々の、現に起きていることの、非常にリアルタイムな状況についてのご意見を伺うこともできました。また、オブザーバーとして多くの方々にご視聴いただいているということで、こういう形式としての欠点はございますが、利点もあったなと感じるところであります。本日は長い時間、どうもありがとうございました。



The Role of the Museum for Local Development

Moderator: MORIMOTO Susumu (Japan)

Panelist: KURIHARA Yuji (Japan), TASHIRO Akiko (Japan), MURANO Masakage (Japan),
YOSHIMURA Kazuaki (Japan), CHAP Sopheara (Cambodia), REN Hexin (China),
Ming Chee ANG (Malaysia), Khanal SANDEEP (Nepal), Nilan COORAY (Sri Lanka),
Otabek ARIPDJANOV (Uzbekistan)

Morimoto Today, we are going to have a general discussion under the theme of Museum and Local Community. However, time is limited, and therefore, I'm not sure how deep we can go. But based on the examples from each country, we'd like to proceed.

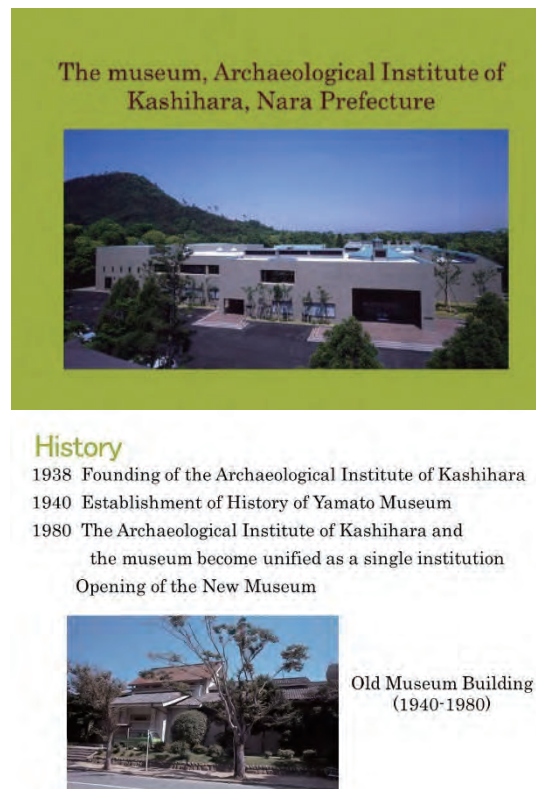
The presentation materials from each country have already been distributed. I assume that you've already referred to them, and I'd like your discussion to be based on the contents. However, for Mr Yoshimura who's here at Kyoto, we haven't actually circulated the material in advance, so Mr Yoshimura is going to give us a brief presentation. Now, please start.

Yoshimura Hello, everyone. My name is Yoshimura. I am from the Museum of the Archaeological Institute of Kashihara, Nara Prefecture. It is located in Nara Prefecture and it is a museum owned by the Archaeological Institute of Research. Basically, the museum exhibits the archaeological artefacts mainly discovered from the research activities.

This is the building of our institute. The first museum building was constructed in 1940 and the main research centre was established in 1938. In 1980, the Archaeological Institute of Kashihara and the museum become unified as a single institution. This year, we are marking our 80th anniversary, so we have a relatively long history. In 1980, we built a new building, but still it's been 40 years. This is what it looks like now.

About 10,000 artefacts are exhibited, and mainly, they are from Nara Prefecture. Nara was the political centre of Japan in ancient times, the Kofun, Asuka and Nara periods. The number of the artefacts and their quality from those time periods are quite good. So, the artefacts owned by our museum have been given a lot of attention across Japan.

In this context, we are doing rather orthodox and traditional activities, basically a permanent exhibition and



temporary exhibitions in spring and autumn. Also, we sometimes organise symposiums for the general visitors in order to more information.

Our other characteristics include a relatively big associate membership. We are now in the midst of renewal of the exhibition, but still, we have 1,000 members, and they are not only from Nara, but from Hokkaido in the north to Kyushu region in the south. Across the nation, there are members. We conduct various activities in Nara about 10 times a year, and organise site visits and lecture meetings in Tokyo and Nagoya a few times a year. So, our activities are nationwide.

However, this doesn't mean that we don't do any local activities. We focus on some local for children, particularly primary school pupils.

One example is the mobile museum. At Japanese primary schools, pupils start learning about the history of Japan. We actually take our archaeological artefacts to primary schools in Nara, when we receive a request; some authentic artefacts like stone and iron tools are taken to primary schools in order for children to see and touch them so that they come to like history. Nara is large and some schools are located in mountainous areas from where it is difficult to come and visit the museum, so we visit them ourselves and show our artefacts.

Another big event for children is held in the summer holiday which is about 40-day long. During that time we conduct children's archaeological courses providing exhibition tour and hands-on experience. For example, we held the craft workshop for children last year in which they made a suspended object modelling on archaeological artefacts and a glass bottle object like a herbarium. During the summer holidays, children are asked to do some craftwork, we help them do the work so that they become more familiar with archaeology and history. Our activities target around 10 year olds, and there are pupils who find it fun and keep coming back every year. Even after leaving primary school, their younger siblings and friends also come. So, there are many fans for these activities, and we are looking forward to interacting with them.

These are our activities to increase the number of fans of history. In the future, we would like to help them understand the importance of protecting and preserving cultural heritage.

Due to the time constraint, I would like to conclude my presentation and ask some panellists about the education programmes disseminated by museums. I would like to ask the cases of Cambodia and Uzbekistan. Can you tell us about the linkage between museums and schools, and the activities for children? Also, I would like to know new initiatives in your museums if there are some.

Membership Events



A guided tour of Archaeological site

The Mobile Museum



Children's Course of Archaeology



Morimoto Mr Yoshimura, thank you. First, Ms Chap from Cambodia, could you give some comments for his question?

Chap Speaking of ideas for education programmes and efforts connecting children and museums, normally, our museum have a school programme which invites some high school students from private schools and state schools to the museum. We don't have any programme such as homework for them before or during their visits to the museum. They just come to visit and listen to the tour guide of the museum objects. So, it is difficult for them to understand and to extend their knowledge about the museum and the history of our Cambodian culture only through this programme. In future, I have some plans to develop the education in my country related to my museum work. First, I would like to give lectures to the students at school before they visit the museum. Then, I will invite them to the museum and give some worksheets for them to complete in the museum. And also, I would like to create a kind of children's room in which they can understand more about the culture or sometimes touch the real objects from our museum collection. Those are some of my comments.

Morimoto That was quite concrete, and thank you very much for your opinion. Dr Aripdjanov from Uzbekistan, how about you?

Aripdjanov Hi, everybody. Thank you very much for your question. I have two comments. In 2014, our museum opened the first Children's Museum in Uzbekistan that targets 4-14 years old kids. It is a special corner for young archaeologist. We've made a kind of reconstruction of the archaeological site as I conduct a lot of excavation work as an archaeologist. At the small corner, the kids can see some artefacts and have the experience of digging out the replica of ceramics and coins that we made. When they discover the coins, they can take them home as presents.

Also, our museum has a corner of craftsmen. From the ancient time, crafts were developed in the cities and the villages. We have made a corner of craftsmen in which the kids can make some terracotta, vessels, and objects. They like it very much because usually when the kids go to an exhibition we tell them don't touch, don't scream, don't run. But this children's museum is definitely different: they can talk, they can touch. And usually, we give a description about the ethnographic materials, archaeology, and history. It is very important to understand these artefacts and how important it is to preserve the cultural heritage.

And also, just one note, in 2014, our government made a special programme to invite a lot of kids with their parents. Every Tuesday and Friday, for kids with their parents entry to all of the museums is free, so they don't have to pay anything. They can just come with their parents without any payment and enjoy the exhibitions about history and culture. Thank you.

Morimoto Thank you very much. So, exhibitions for the kids are very important, but giving them the experience of touching the objects is important as well. For this point, Mr Yoshimura, do you have some comments?

Yoshimura I share the same idea with you. Just looking at books is not enough. Going there and touching the collection gives a deep memory and makes an impression on kids. I think that is the most important experience for the children.

Morimoto From the same viewpoint, Mr Murano, I would like to have your comments.

Murano Thank you very much. As for my job at the museum, I've already put my presentation on the website. The aim of our museum is to achieve the targets set by the ICOM and UNESCO, and to make a strong commitment and contribution to the local community as Mr Kurihara mentioned before.

In the case study presentations from participants' countries, I found the interesting contributions to the community, for example, the conservation of fortification in Sri Lanka, and the contribution to not tangible but intangible heritage in Nepal. The case of China showed that the museum work, including marketing, is much more advanced than what we have done so far. The case of Malaysia taught us the importance of fire prevention not only for museums but also for cultural properties. However, our museum, for example, cannot take charge of fire prevention of neighbourhood at the moment. So, looking at the presentations from these four countries, I have found that museums are making great commitments and contributions to the local community. This is how I feel.

On the other hand, I am concerned that contributing to the local community has some difficult challenges. In our museum, we ensure not to allow what the museum is doing to be self-satisfactory. So, we have to receive requests from the neighbourhood and community surrounding the museum so as not to be inward-looking.

In The Museum of Kyoto, once every month we have a regular meeting of the neighbourhood. We hold a meeting on the third Friday of each month. And we hear a lot of requests from the local community. The efforts in Sri Lanka, Malaysia, Nepal, and China are quite similar to the activities of my museum. In your countries, the scope of museum activities and its function overlap with the lives of the local people. So, how and to what level should a museum respond to the requests of the local community? This is my question. For example, what are the priorities? How should we set priorities? There are diverse stakeholders in the local community. From the viewpoint of a museum, from what people should we hear opinions and requests? This might be a little bit vague, but since the symposium theme is "Museum and Local Community", I'd like to have feedback from you.

Morimoto Thank you very much. That was a very insightful point. Regarding this point, we would like to hear from each country's participant. First, Dr Cooray from Sri Lanka, since Galle fort is a living heritage site where people live, how do you have interaction and a dialogue with the local residents?

Cooray Actually, what I am conserving at the moment is living heritage. The people are involved in not only the conservation work, but also in the decision-making for the preservation of these heritage sites. So, what is important here is to give an understanding about the historical layering of the site because the general notion is that Galle is a Dutch fortification, but now, we are making them aware of the historical sequence of a heritage site that has multiple layers of activity and occupation. So, through our museum and an interpretation centre, we are trying to show the people the different layering of this heritage site.

What is important in this exercise is that the local residents are part of the decision-making process, and they are actively involved in the whole process and doing some kind of research and giving local inputs to develop the storylines. Then, once they are established, local people will also be part of the management of the museum so that they will be trained and could explain to the schoolchildren and other visitors about their own heritage sites. So, that means rather than employing people from outside, involving the community and making them partners in the whole process will, I think, give meaning to the museum. And through that, we think that people will take part in the

conservation and take pride in their own heritage sites. This is our idea of a people-centred approach for the display and management of museums.

Morimoto Thank you. Next, Mr Sandeep from Nepal. Patan is also a living heritage site, and there are many historical buildings. What kind of activities do you do there?

Sandeep As you know, Nepal is a multilingual, multireligious, and multicultural country. There is a diversity of religion, culture, rituals, etc. So, in recent times, many efforts have been made at the local level to preserve their traditional culture. Moreover, the level of interests in the culture among the younger generation has increased, which is a very positive aspect. Basically, we have three main Palace Museums in Kathmandu Valley, which are directly linked to the community through rituals and festivals. People used these places for worship, performance, and traditional functions.

The museum has its own rules and regulations. Under them we do our work which helps to interconnect community and museum. Plans and decisions are made based on mutual decisions between the local people and museum. There are situations to be addressed even from the top levels when some unsolved issues occur between a museum and community. For example, I already mentioned in my presentation, you can see in slide 16, that the local community and political leaders want more space in the museum against our rules. At that time, the Museum Authority does not allow them. In spite of all that, it is very important to ensure not to hurt the feelings of the community. Community-based approach is much needed for sustainable development of the museum and can thus be understood as a part of quest for identity or identities. In a global context, it is very important to try to understand the ways in which museum collections and people represented within them have been viewed by the authorities that have had the responsibility for collecting, presenting, and interpreting them.

Morimoto Thank you. So, a multilingual, multicultural, multireligious country. The situation may be a little different from Japan, but it was very interesting. Next, Mr Ren from China, could you give your comments please?

Ren Good afternoon, everyone. It is our honour to join the meeting today and exchange practical opinions with all the panellists. I have watched all the presentations and they benefit my knowledge a lot in a good way. So, I appreciate it from my side.

Regarding the given questions, I would like to share in two ways. First of all, we gather requests from the local communities and classify them into six aspects. The first one is the country government, that is the first level. Second, the village authorities, and thirdly, the organisations of various kinds such as the mushroom plant organisations and crafts organisations.

The fourth aspect is the craftsmen and their apprentices. Of course, all those craftsmen and their apprentices are acknowledged by different authorities of different levels.

And the following is the local cultural people like teachers or students who have received education in the outside world and come back to the village. We call them the well-educated group, and if we have opinions or other things to be discussed, we gather opinions from them.

And last but not least, we have certain groups that we call the respected leaders in the village. Those people are not from the government section. They are the people who are playing a decision-making role in major events in the

village because of their good behaviours and experiences. Their opinions in the decision-making processes are very important. Those are the six aspects we are gathering information from.

Regarding how and how much we respond to the local communities' requests, we'd like to share the following aspects. First of all, our function. The museum's function in the local community is to be a platform, also a bridge between the local community and the outside world.

Depending on our position and function, if we are involved in the decision-making process or we receive requests from the local community, we will do things in the following ways. First of all, we will arrange a meeting with those groups mentioned above, the six aspects. We will discuss how we deal with requests and give some suggestions, and see if they agree or if they have different opinions. After that meeting, we will decide a direction to follow. Secondly, we will ask help and advice from the local authorities. We will see if they approve or support the decision. Thirdly, we will refer it to specific government sectors, according to which kind of issue has been raised. For example, if there's a tourism issue, we will refer to Tourism Bureaus of all levels of the authorities.

And then last but not least, we will seek relevant social resources such as volunteers or companies that are interested in specific areas and willing to give not only money but also efforts to the community and the programme. So those four aspects are our main efforts to involve the local community. That's all. Thank you.

Morimoto Thank you very much. That was quite a wide range of efforts going on. It is interesting that you are involved with many people from diverse backgrounds. Next, Malaysia, Dr Ang, what is your opinion?

Ang Thank you. We are the site manager for George Town World Heritage site. Playing that role, we work with, like many of you, a lot of communities from diverse backgrounds. In particular, they have different cultural backgrounds, religious backgrounds, social backgrounds, and interests. So, when I talk about local communities, I mainly look to the people who are living and working here in the site.

The example that I shared with you all is the central fire station. This is really one of its kind and a very new concept over here. Why it is important is actually because the power of the local community is so strong. The museum was established responding to requests and interests of the local community. Also, this fire station is the only one inside the world heritage site, and has been playing a big role in fighting fires and everything else for 112 years. And they have a lot of artefacts and a lot of stories to tell. So, we had a discussion with the local community and the fire station, and consented to establish this building as a place for education, awareness, and appreciation of our cultural heritage.

Because of that, we actually work with the fire station and firemen. We strategise how to cooperate in involving the citizens and exhibiting the artefacts. That is the first stage. Second stage is the stories. We welcome the public who come there, have a look and tell their story, which we call oral history documentation. I think that it makes the stories of museum rich and multi-layered, so we should continue to develop it over time. And in our little museum over here at the fire station, you will see photos. Some old photos were donated by the local community, and they tell us of what happened at one time in George Town. And of course, as fire is one of the biggest risks for our site, we want to use these photos as a way to educate, in particular the younger generations.

Before COVID-19, children could have various experiences at the fire station with firemen. But now, after COVID-19, we are still trying to find a safe way for everyone to continue to visit our museum, to experience, and to enjoy growing the cultural heritage awareness and firefighting awareness, as well as involving the local community.

And I hope you can all come one day soon.

Morimoto Thank you very much. In living heritage sites, disaster prevention can directly lead to the prevention of damage inflicted on the cultural heritage. So, we could hear a lot of opinions from the four panellists. Mr Murano, after hearing those opinions, do you have some comments?

Murano Thank you very much. My question was a little bit abstract, but you answered in a concrete way. That was quite informative. Each person's keyword must be the participation of the local community, but there are many forms of participation. We have been saying for several years that participation by the local community is very important, but however, unlike the exhibitions made by only curators, the community participatory approach faces many difficulties, such as what kind of organisations to be set up, or what is the best way of decision-making. These things will be more difficult when we involve the communities. I could learn a lot from your answers and efforts. I would like to continue to share with you in the future about our efforts for decision-making and participation of communities.

Morimoto Well, thinking of the local community and museum, how to make a bridge between these two elements is very important. On the other hand, there is the case that the local community itself is functioning as a tourism destination. In that case, the relationship between the museum and tourism is also important. Dr Tashiro has been studying the relationship between tourism and museums, so I'd like to have her opinions on this topic.

Tashiro Thank you very much, Mr Morimoto. I'll comment on the whole presentations and then raise a question to all of you on that topic. I enjoyed and learned a lot from your informative presentations.

First, I would like to pick up the presentations by Cambodia and Uzbekistan. These two are national museum and quite different from the others. The Cambodian National Museum is a great place to visit. Its location near the Royal Palace and the river is very special as a tourist attraction. On the other hand, I realised that the State Museum of Uzbekistan is a higher education and research institute. When you excavate sites in the local area, you can relate to the locals and discuss those artefacts and places to be conserved. I think that's an interesting point of your museum.

The third one is Nepal, and the museum in Patan that I recognise its significance as a place. The place itself is very important in the area, because it has a religious meaning. It is very important for the public, so, it's quite a special case. Comparing with the case of Galle Fort in Sri Lanka, as there are multiple historical layers, multiple cultures and religious characters, these two are quite similar, but some of the points are quite different. I would like to ask you about the trails in Galle because we have already developed the trails on the coastline in Japan, which is called Michinoku Trail, about 1025 kilometres long. The trails show us what happened in the earthquake in 2011. So, it's a kind of disaster museum as well. Considering the tie or connection in local community, Galle has ethnic and religious ties while Kyoto has a geographical connection. I think that is quite a difference in local communities between the two cities.

In the case of Malaysia, it is very interesting to see how you are involved in disaster risk management and this is why we need a local community to be involved with the museum. Sometimes like the case in Nepal, the museum could be an evacuation centre for the local community, and I think that Malaysia also has that kind of role.

Also, the case of China introduced quite interesting activities as an ecomuseum and the in-situ and dynamic

conservation projects. I think that we can think about that in two ways. One is a perspective from the inside of the ethnic communities and the other is a perspective from the outside. Also, you mentioned about the city and the village, and that the museum is a bridge between the two. In tourism studies we think about the community, the host and the guest, and the balance between them.

The tourism industry has been affected by COVID-19 as all of us know. We should think about what we should do for tourism and what we should think about local communities. I would like to know your opinion about how the definitions of local or area could be changed under COVID-19 situations. And then, of course, you will think about other methods like virtual reality, and whether people should visit museums again or how we can promote museums online. I would like to have some comments about these topics from all of you.

Aripdjanov Thank you so much, Dr Tashiro. Your presentation was excellent. Unfortunately, COVID-19 cancelled everything not only in my museum but the whole world. We had an idea to open a huge exhibition on Oman as our first exhibition at the beginning of April, and there were a lot of objects from the Attic period, which had some analogy to Central Asian artefacts, but it was cancelled. For 5 months, our museum was closed. It was very hard for everybody, for the museum staff. We cancelled everything. Then people were scared, of course, to come to the museum after the reopening, I think the pandemic was fixed in the middle of September, and the number of infection was down. But nobody, I mean just one or two people came. We prepared some special antiseptics and measured temperatures, and we thought, how to work? We put videos on our website, made an online tour and used Zoom. Of course, people were interested, but it's important to see the real objects. Some people ask, could you please make a video about, for instance, the stone age or the Attic period? We made the videos and guides with our smartphones. But I think people want to come to the museums because they want to see the objects. They want to experience them not online, but offline. We really hope that next spring, everything will be stabilised, and we can continue our work. Thank you.

Morimoto Thank you very much. How about another National Museum in Cambodia? Could you give your comments?

Chap I would like to share my comments about during the suffering of COVID-19. As you know, our museum just started our social media a few years ago. During the COVID problem, we had planned to post our museum activities. Even though our museum was closed, the other work was still continuing. So, we tried to present our activities on social media. We set up some public talks during this year, and also, we tried to research some articles about special objects in our museum, and post them on Facebook. I think that people have started to know about our museum and to understand our situation now. We plan in the future to present a traditional events in every month. We are also trying to update with new research from the archaeological institute, and also an annual event from the school of arts. That is all. Thank you.

Morimoto Thank you very much. So, we are now on the COVID-19 impact, and how the relationship between the community and the museum has changed. Dr Cooray, how about the situation in Sri Lanka — has the relationship between the community and museum changed or not?

Cooray At the moment, Sri Lanka is experiencing a second wave of COVID-19, so, basically, all the museums are closed, but we hope that they will open soon with the controlling of COVID. But my opinion about the museum objects and the visitors to the site is that the objects cannot be viewed independently because they have a context. When you put the objects in the context, it gives a story. With videos and virtual reality, to a certain extent, you can convey the idea, but seeing and experiencing the space and the visual experience, those things really matter to get a better feeling for the whole story. So, I think for the time being, probably, we need to go for other options, but once everything returns to normal, the best option is, of course, seeing the objects in the context. Physical observation is the most important thing, I suppose. Thank you very much.

Morimoto Thank you very much. How about Nepal? Mr Sandeep.

Sandeep I want to talk about the overall situation, not only COVID-19, how culture and tradition are disappearing. We have many examples of disappearance of intangible cultural heritage that has existed for centuries due to economic conditions, natural calamities, politics, etc. More recently, earthquakes and pandemics have spontaneously disturbed such activities, increasing the risks of extinction of traditional assets.

In order to revive our activities, such endangered and even extinct heritage, it is necessary to study and research every dimension related to what can be done through the museum. Various activities can be done so that knowledge and creativity can be passed on even to the general visitors who come to the museum. Attempts are made in the museum to convey information and knowledge to the audience through exhibitions and live presentations.

In the present scenario, the usefulness of the museum to society is essential. The museum has an important role to play in keeping our culture, civilisation, traditions, and rituals alive and maintaining creativity. Through the exhibition, the museum is leading the way in general and generational preservation of the national culture, civilisation, and customs. Recently, museums have opened after COVID, but still, we have a lot of things to do. Thank you.

Morimoto Thank you very much. Mr Ren from Dimen Dong, China, how is the impact of COVID-19 in your region?

Ren As you may see in our presentation, the definition of ecomuseum in simple words is that we are part of the local community. We are not separated from it. And we are not a museum that's facing the mass tourism market. With or without COVID-19, we will not have many tourists rushing to the village and our research centre. So generally, COVID-19 has not impacted our community and museum at all. But the thing is that local people, especially the young, usually rush into the cities for work, for financial support, but from this COVID-19 influence, they have to stay at home in the village. So, they actually pay more attention to the ecomuseum concepts, what is the ecosystem and how it helps us in the village. Actually, from our point of view, it's a good thing for the ecomuseum because the young people that decide and influence the future of the village stay and pay more attention on it. So that's basically our point of view. Thank you.

Morimoto The movement of people being constrained gives a chance for the local community to pay attention to their own community. That was a quite interesting viewpoint. Lastly, Malaysia, Dr Ang, how about you?

Ang We have been talking about how it is important to have sustainable tourism. So, it's important to have a sustainable tourism plan, and that is not only for our site, but also for all museums that are targeting visitors. For this particular museum that I presented, that is the Central Fire Station, actually, whose mission is firefighting but the secondary mission is for education as a museum. So COVID-19 in this particular case doesn't have much impact because they do not depend on ticket sales for their expenses, but in general, COVID-19 is challenging us to find a balance of life and livelihood. How much can we allow people to visit a museum but at the same time make sure that COVID-19 doesn't spread? I think the virus is one thing, fear is another thing that is very difficult to control. But I do see that COVID-19 is giving more people restrictions on travel. It can be that everyone cannot leave the house, or everyone must constrain the activities within a certain territory. So, when the restriction is a little bit loosened and then we can travel, for example, we do see more Malaysians coming to museums and places within Malaysia now, and I think it's the same with other countries and that is actually encouraging the local people. In George Town or other places, we start to appreciate and get to know more of potential museums and places in the country itself. So, COVID-19 is a big problem, but it is also an opportunity. That's all from me.

Morimoto From the panellists from six countries, we have heard about the real-time situation under the current pandemic. It was very interesting. So, Dr Tashiro, do you have anything to say at the end?

Tashiro Thank you very much for all your comments. As Dr Ang from Malaysia talked about, we also have that kind of movement, namely micro tourism, in which people walk around within one or two hours from their homes, and this is how they enjoy tourism nowadays. It's a really good point. Maybe we cannot go back to the situation before COVID-19, but as Mr Kurihara mentioned, we think about what is the new definition of a museum, or perhaps a kind of philosophy, and we should be very flexible about those definitions under the new situation. Thank you.

Morimoto Thank you very much. So, this is the very last point. We have heard comments from many different countries. I would like to ask Mr Kurihara to give us summary comments.

Kurihara Thank you. Well, time is very limited, so I'm going to keep my comments very brief. Today's theme is "the museum and local community". I think the important point is the talent. Communicating what's difficult in a difficult way is easy, but it is important to communicate the important specialised content to the local community in a simple manner. So not just the curators, but interpreters and coordinators or volunteers will play an important role in this communication. So, we have to utilise these good talents so that the content of the museums can be interpreted to the local residents. Because of COVID-19, we cannot actually touch things, and we cannot gather together. However, we have to overcome these problems to move forward. And as I said, multiple perspectives are going to be very important. Within the same country, there are many different ethnic groups and races and genders, and also age difference is important. In Japan as well, when I say tatami mat, some children don't understand how big that is. So, depending on the generations, we have to think how to think and communicate.

As Dr Tashiro mentioned at the end, due to COVID-19, the circumstances are quite difficult, but by utilising digital technology, online education programmes and virtual tours are now available. We have to proceed with them, and this is a great opportunity for us to do more research and study. After COVID-19 is under control, we should utilise what we have learned during this period of time. Last year in February or March in the Kyoto National

Museum, we had to close the building; however, we opened the garden to the public for free, and it was well received. Even without the actual exhibition, the museum was open and people were happy to visit. Basically, it is a place that can offer peace of mind to the local communities. So even though the situation is tough, museums are running and open and that can give some sense of security. So, from many different aspects, we would like you to move forward with museum activities. Thank you very much.

Morimoto The situation is quite tough; however, museums can serve as a hub in the community and can play many different roles. That was a point raised by Mr Kurihara. Although this international symposium was held online due to COVID-19, a real-time report of what's happening in each country was shared and discussed. And as observers, many people viewed these proceedings. This is one format having pros and cons. Thank you very much for your participation.



Edited and Published by
Cultural Heritage Protection Cooperation Office,
Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)

757 Horen-cho, Nara 630-8113 Japan
Tel: +81(0) 742-20-5001
Fax: +81(0) 742-20-5701
e-mail: nara@accu.or.jp
URL: <http://www.nara.accu.or.jp>

Printed by JITSUGYO Co., LTD.

© Cultural Heritage Protection Cooperation Office,
Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU) 2021

